

卅（まんじ）

谷崎潤一郎

青空文庫

その一

先生、わたし今日はすっかり聞いてもらうつもりで伺いましたのんですけど、折角お
仕事のところかまいませんですやろか？ それはそれは詳しくに申し上げますと実に長い
のんで、ほんまにわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何
まで書き留めて、小説のような風にまとめて、先生に見てもらおうか思ったりしましたのん
ですが、……実はこないだ中ひよつと書き出して見ましたのんですけど、何しろ事件があん
まりこんがらがってて、どういう風に何処どこから筆着けてええやら、とてもわたしなんぞに
は見当つきません。そんでやつぱり先生にでも聞いてもらうより仕様ない思ひましてお
邪魔に出ましたのんですけど、でも先生わたしのために大事な時間滅茶々々めっちゃめっちゃにしられてお
しまいになって、えらい御迷惑でございますやろなあ。ほんまに宜よろしございますか？ わ
たし先生にはもう毎度々々おやさしいにしてくださいますもんですから、つい御親切に甘
える氣イになって、御厄介ごやつかいにばかりなりまして、どないに感謝してもしきれへんくら
いや思ってます。そいであのう、いつかも大へん御心配かけましたあの人のこと、あれから

お話せんならんのですが、あれはあの後に申し上げました通り、あないにいうて下さいましたので、自分でもしみじみ考えまして、あんなりぷつり絶交してしまいました。

その当座は未練とでもいいいますのんか、何かにつけて思い出されますもんですから、家にいてまでもまるでヒステリーのようなになってましたけど、そのうちにだんだんあの人がええことない男やつたいうことはつきり分つて来まして、……主人も私が前は始終そわそわして音楽会や何かいうては出歩いてばかりいましたのんに、先生の御宅^{おたく}に寄せてもらうようになりましてから、すっかり様子変りまして、絵工書^{けいこ}いたり、ピアノの稽古^{けいこ}したりして、一日家に落ち着いてますもんですから、「この頃はお前も女らしなつたなあ」なんぞいいまして、蔭^{かげ}ながら先生の御好意よろこんでました。尤^{もっと}もわたし、あの人の事については何も主人にいいませなんだ。「夫に過去のあやまち隠しとくのんよろしゅうないから、——殊^{こと}に肉体上の関係なかつたのんなら告白しやすい訳やから、すべてを打ち明けておしまいなさい」と先生はいうて下さいましたけど、……けどどうも、……それはまあ、主人にしましてもあるいはうすうす氣イついてたかも分れしませんが、私の口からは何やいいにくうもありましたし、この後間違いないように自分さい注意してたらええのや思いまして、何事も胸に収めてたのんです。ですから主人は私が先生からどんなお話伺うて

来ましたやら、それは知りませんでしたけど、いろいろ為めになること教せてもろたに違いない^{おも}思て、そういう心がけになったのんはええ傾向やいうてましてん。

そんな訳で、そこから暫くは大人^{おとな}しいに家^い引つ籠^{こも}つてましたもんですから、この様子やったらまあ安心や思いましたもんか、そうそう己^{おれ}も遊んではいられんからいうて、大阪の今^{いま}橋ビルディングに事務所借つて弁護士開業しましたのんが、あれが昨年の二月頃でしたかしらん。——はあ、そうです。大学の方は独法やりましたのんで、弁護士にならいつでもなれたのんです。始めは何でもプロフェツサになりたいようにいうてまして、ちやうど私のあの事件ありました時分には、引きつづいて大学院の研究室の方^{かよ}い通てましたのんですが、弁護士やる氣いになりましたのんは別にこれちゆう理由あつたのんではあれしません。そういつまでも私の実家の方に世話にばっかりなつてましては義理も悪いし、私に対しても頭上^{あが}らんと思つたのんですやろ。いったい主人は大学時代に秀才やいう評判で、たいへんにええ成績で卒業しましたもんですから、そういう人間ならばいうのんで、嫁に來たというものの、婿^{むこ}を取るのも同様にして結婚したのんです。それでもう私の親たちは主人を信用してまして、いくらか財産も分けてくれまして、まあまああせるには及ばんから、学者になりたかつたら学者になるで、ゆつくり勉強するがええ。洋行もしたけ

れば夫婦で二、三年彼方あつちい行てくるがええなどいうてくれまして、——最初は主人も大そう喜んで、そんなつもりもあつたらしいのんですけど、——私わがあんまり我が儘ままやのんで、実家の方笠かさに着て威張るのんやいう風に取つて、それが癩しやくに触さわつたのかも分れしません。しかし性質が学者肌はだに出来てまして、いつまでたつても書生流のぶつきらぼう抜けしませんし、あいそは下手へたですし、それはそれは人づきあい悪い方ですから、弁護士なんぞになりましてところで一向仕事やかいあれしませんね。それでも毎日事務所いだけはきちんきちん出てましたが、そうなりましたら、私の方は一日家にぼんやりしてまして、しょうないものですから、自然また、いろいろと、一旦忘れてたことが胸に浮かんで来るのんです。前には暇ありますと歌作つたりしましたが、歌はかいつて思ひ出の種になりますので、もうこの頃はせえしませんやろう？　そこで私、こうやってはろくな事考えへんさかい、これは何とかせんといかん、何ぞ氣まぎい紛まぎれるようなことはと思ひまして、——先生は御存知でしょうか、——あのう、天王寺てんのうじの方に女子技芸学校がつこいうのんありますね。私立の詰つまらん学校ですもんけど、絵工と、音楽と、裁縫と、刺繡しゆうと、それからまだ外にも何や、まあそんな風に科ア分れてまして、入学の資格なぞむずかしいことも何にものうて、大人でも子供でも自由に這入はいれます。わたし前にも日本画稽古けいこしてまして、下手ですけど、

その方になら幾らか趣味持つてますもんですから、それい毎日、朝は主人と一緒に出かけようにしまして、ともかくもまあ、通うことにしましてんわ。尤も毎日とはいいいましても、そんな学校ですから、休みたい時は勝手に休んだりしましたけど、――

主人は絵工や文学やにはてんと趣味ない方やのんですが、私が学校に行きますことは賛成してくれまして、それは結構や、ええ思いつきやさかい精出して行くがええいうて、自分から勧めたくらいやのんでした。毎朝出かけますのんにも、私が行きますのんは九時のこともあり、十時のこともあり、自分の都合でいろいろになることありましたけど、主人の方も事務所暇ひまやのんですさかい、何時になろうと大概たいがい待たいててくれまして、阪神電車で梅田まで一緒に行き、そこから二人円えんタクに乗のつて堺さかい筋すじの電車通りの今橋の角で主人おろしまして私はずっとその車で天王寺に行きます。主人はそういう風にして一緒に出かけますこと楽しみにしてたらしいので、「またもう一遍いっぺん学生時代に復かえつたような氣イするなあ」などいいますから、「夫婦づれで自動車で通う学生あつたらおかしいやないか」いいましたら、あはあは笑うたりなんぞして上機嫌じょうきげんでした。午後に帰ります時分にもなるべく誘さそてくれるようにいいますので、電話で打ち合わせしといて、事務所い寄つたり、難波なんばや阪神で待ち合わしたりして、一緒に松竹座なぞ行つたりしました。そうい

うような塩梅^{あんばい}で主人との間は大変^{ぐあい}工合^{ぐあい}ように行つてましたのんですが、あれは四月の半ば頃でしたか、わたしほんの詰^つまらん事で学校の校長さんと喧嘩^{けんか}してしまいました。それはあのう、妙なことです、学校でモデル使^{つか}て、それにいろいろの服装さしたりポーズ取らしたりしまして、——日本画の方は裸体のデッサンはやりませんですけど、——それ写生する時間ありますね。ところがちようどその時分に使^{つか}てたのんが、Y子さんちゆう十九になる娘^{むすめ}さんで、大阪では有名な美人のモデルやそうで、それに楊柳^{ようりゅう}観音^{くわんおん}の姿さしまして、——まあ、いくらかそんな風すると裸体に近うなりますのんで、多少裸体の研究も出来るいう訳^{わけ}やつたのんです。私それを外の生徒たちと一緒に写生しますと、或る日校長先生が教室い這^{はい}入^いつて来られて、「柿^{かきうち}内^{うち}さん、あんたの絵工はちよつともモデルに似ておらんようすな、あんたは誰ぞ、外にモデルあるのんではありませんか」いわれて、何やこう、意味ありげに笑われますね。それが校長先生ばかりでのうて外の生徒たちも、先生が笑われるあとからクスクス忍び笑いするのんです。わたし思わずはっとしまして顔赧^{あこ}うなりましてんけど、こういう訳で赧^{あこ}うなつたのんかその時は自分で分れしませなんだ。今になつて考えますと確かにあの時赧^{あこ}うになったような氣イしますねんけど、あるいはそうでなかつたかも分れしません。しかし「外にモデルがある」いわれましたら、そ

ういわれるまでは自分では意識してえしませなんだのんに、何やしらんはつと胸いこたえるもんありましてん。でも、そんなら誰モデルにしたかちゆうことは、はつきりしてたのんではあれしません。ただ何やしらん頭の中にY子さん以外の或る人の印象刻みついてて、Y子さんを眼の前に見ながら、知らず識らずその印象の方モデルに使てた、——使うつもりものうて、自然と筆がその人の姿写してた、いうだけやのんです。

もう先生にはお分りになつておられますやろが、その、わたしが無意識のうちにモデルにしてた人いうのが、——どうせ新聞にも出ましたのんですから、いうてしまいますが、

——徳光光子さんやのんです。（作者註、柿内未亡人はその異常なる経験の後にも割に

寡れた痕がなく、服装も態度も一年前と同様に派手できらびやかに、未亡人というよりは

令嬢の如くに見える典型的な関西式の若奥様である。彼女は決して美女ではないが、「徳

光光子」の名をいう時、その顔は不思議に照り輝やいた。）けど私は、まだその時分には

光子さんとお友達になつてた訳ではあれしません。光子さんが洋画の方習ておられて、教

室も違てましたよつて、ものいう機会もなかったはずです。ですから光子さんの方では私

の顔知りなされしませなんだか、知つてなさつても別に氣いに留めておられなんだのん

ですやろ。私の方にしましてもそれほど光子さんに注意してたとは思われしませんですが、

でも何とのお好きそうな人という風に考えてたに違いないのんです。それもしかし、ものいうたことないくらいですよって、性質やとか気だてやとか、そんなこと分れしませんでしたんけど、——まあ、何とのお、ただ全体の感じやのんですなあ、そういうええ私が案外早うから光子さんに氣イつけてました証拠には、もうその時分に誰から聞きたいいでもなしに、光子さんの名前やお所を、——船場せんばの方にお店のある羅紗問屋ラシャのお嬢様で、住まいは阪急の蘆屋川あしやがわにあるのやいうようなことまでちゃんと知ってましてん。そいでわたし、校長さんにそんなこといわれましたのんで、あとでいろいろ考えてみたのんですが、なるほどその絵工光子さんに似てますけど、故意に似さしたいうのではありません、また故意に似さしたにしたところが、ぜんたいモデルにY子さん使ういうのんはY子さんの顔写すのん目的とはちがいますねんやろ？　ただY子さんに観音さんみたいな姿さして、その体つきや、白衣びやくえの襷ひだの工合ぐあい研究して、なおその上観音さんの感じ出せたらええ訳ですやろ。Y子さんはモデル女の中では美人かも分れしませんが、光子さんの方がもっと美人で、その絵工の感じに合うあてるとしましたら、光子さんモデルにしても差さ支しいつかないではあれしませんか。——私そない思たのんですねん。

その二

ところがそれから二、三日たちますと、またモデルの時間に校長先生が這入^{はい}って来られて、私の絵工の前い立ち止まってにやにや笑われますね。そして「柿内さん」いいなさって、「柿内さん、どうもこの絵工変ですなあ。ますますモデルに似んようになって来ますね。いったいあなたは誰モデルにしておられるのですか」と、冷やかすような眼つきで私の顔じいツと視^みつめなさるのんです。「おや、そうですかしらん。モデルに似てえしませんか」と、私癩^{しやく}にさわりましたものですから、わざとにそないいうてやりましてん。そやかて校長先生は絵工の先生ではないのんですやろ?——はあ、日本画の方の受持ち筒^{つつ}井^{ついで}春^{はる}江^え先生やのんで、常^{じょう}時^じお越しになる訳やのうて、ときどきやって来られて、何^ど処^こが悪いやとか此^こ処^こをこないせえやとかいわれますのんで、常は生徒たちが勝手にモデル見て画^かいてますねん。校長先生いうのんは、随意科の方に英語ありまして、それ教^おせてなさるのんやそうですけど、学士でも何でもあれしませんし、何処の学校出られたのんか、学歴やかいもろくろくないらしい人やのんです。それは後になってから分りましたんけど、

教育家いうよりは学校商売上手じようずな人やのんで、つまり一種のやり手やのんですねんなあ。そういう校長さんですから絵工のことなんぞ分るはずあれしませんし、余計な嘴くちばし入れる必要はないのんです。それにまた、学科の方はたいがい専門の先生たちに任じきりにしてめつたに教室見廻ることやかいかいあれしませんのんに、その時間に限ってわざわざやって来られて、わたしの絵工何や彼かんやといいなさるのんですねん。「へえ、そうですかなあ、あんたはこの絵工このモデルに似てるつもりなんですか」と、皮肉な口調でいわれましたもんですさかい、こつちも空惚そらとぼけてやりまして、「はい、わたし絵工は下手へたですから、似てえへんかも分れしませんけど、でも自分では一所懸命モデルの通りに写しましたつもりです」いいますと、「いや、あんたは下手ではありません。なかなか上手に画かけてます。しかしこの顔は、どうも誰ぞ外の人に似てるように思われますね」と、またそないいいなさるのんです。「ああ、顔のことですか、顔はわたし、自分の理想にかなうように画いてみたのんです」いいますと、「ではあんたの理想いうのは誰のことですか」と、えらいひつこいですねん。そいからわたし、「これは理想やのんですから、別に誰ちゆう実在の人間描えがいた訳ではあれしません。観音さんの顔にふさわしいようになるだけ清らかな感じ持たしたのんですが、そいではいきませんか。顔までモデルに似ささんと悪いのん

ですやろか」いいましてん。すると、「あんたはたいそうむずかしい理窟^{りくつ}いいなさる。しかし理想通りのもんが思いのままに画けるようやったら、此の学校い絵工習いに来るには及ばん。理想通りに画かれないからこそモデルについて写生するのではありませんか。自分勝手の絵工画くくらいならモデル使う必要ありません。ましてこの観音さんがモデル以外の或る實在の人間に似てるとしたら、あんたの理想いうもんも甚^{はなは}だ不真面目^{ふまじめ}に思えますね」いわれるので、「わたしちよつとも不真面目とちがいます。仮にこの顔誰^{だれ}に似てても、その人の顔観音さんの感じ出すのに適してましたら、それ写しても芸術的に疚^{やま}しいことない思います」いいますと、「いや、それがいかんのんです。まだあんたは一人前の芸術家ではありません。あんたがその人の顔清らかであると感じられても、万人がそう感じるかどうか、それが問題です。そういうことからかく誤解が起るのんです」いう訳ですねん。「へえ誤解で、どんな誤解起りますかしらん？ ぜんたい似てる似てるいうて、誰に似てるのんですか、どうぞいうて下さい」いうてやりましたら、ちよつとどぎまぎして、「あんたは強情な人ですねえ」いわれて、そんなり校長先生は黙ってしまいはりました。わたしその時は校長さんやり込めてやったので、喧嘩^{けんか}に勝ったような氣イして、えらい痛快でしてんわ。けど大勢の生徒たちの前で議論したもんですよって、えらい評判

になつてしもて、間ものうけつたいな噂^{うわさ}ひろまるようになりましてん。つまりわたしが光子さんに対して同性愛^{さうじ}捧^さげてる、光子さんと私とが怪しいいますねん。——それが前にいいましたように、まだその時分は光子さんと物いうたこともなかったほどでしたさかい、出鱈^{でたらめ}目も出鱈^{でたらめ}目、ひどい嘘^{うそ}やのんです。尤^{もつと}もわたしは、うすうすみんなが蔭^{かげぐち}口^{くち}いうていることぐらい感じてましたものの、それがそないに騒^{さわ}がれてようとは夢にも知りませなんだ。何^{なん}せ身^みいに覚えな^ないことやのんですから、何^{なん}いわれても平氣なもんで、まあ、世間の人いうたらたいがいええ加減なことをいい触^ふらすもんや。附^つき合うてもいえへん人同士怪しいやなんて、なんぼ作りごとにしたかてようまあそんな嘘^{うそ}ばかりいえたもんや思^{おも}て、あんまり馬鹿々々しいて腹も立てしませなんだ。ただ心配になりましたのんは、わたしはそいでかめしませんが、光子さんの方はどう思てなさるやら、さぞかしえらい係り合いになつて迷惑してはるに違^{ちが}ひない思いましたら、そいからはこう、学校の往^いき復^{かへ}りなぞに出^で遭^あうことありまして、何や氣^きイさして、前^まみたい顔^{かほ}しげしげと見守ること出来しませなんだ。そうかいうて、思^{おも}い切りようこつちから話^わしかけて、あやまるいうようなことも、——それがかいってけつたいなことになりますし、なおさら迷惑しなさるかも分^われしませんのんで、そないする訳にもいけしません。そんでわたし光子さんに出^で遇^あいま

すと、出来るだけあやまる心持外に現わすようにして、小^{ちい}そうになって、下向いて、こそそ逃げるように傍^{そば}通り抜けましたが、そないしながらも、先^{さき}様^{さん}怒^{おこ}ってはれへんやろか、どんな眼つきしてはるか、やつぱり気がかりやもんですから、擦^すれちがう拍子にそうツと顔色うかごうたりしました。ところが光子さんの様子前とちよつとも変つたようなこのうて、別にこつちを不愉快に思てなさる風にも見えません。あ、そうそう、此^{ここ}処に写真持つて来ましたよつて、これ見て下さいませ。これは揃^{そろ}いの着物出来ましたとき二人で記念に撮^とりましたので、新聞にも出たことある問題の写真やのんです。これでもお分りになるように、こうして並んでましたら、わたしが引き立て役勤めてる形で、光子さんは船場あたりの娘さんの中でもちよつと飛びきりの器量やのんです。（作者註、写真を見ると、お揃いの着物というのは如何^{いか}にも上^{かみ}方^{がた}好みのケバケバしい色彩のものらしい。柿内未亡人は束^{そく}髪^{はつ}、光子は島田^{しまだ}に結っているが、大阪風の町娘の姿のうちにも、その眼が非常に情熱的で、潤^{うる}おいに富んでいる。一口にいえば、恋愛の天才家といったような氣魄^{きはく}に充^みちた、魅力のある眼つきである。たしかに美貌^{びぼう}の持主には違いなく、自分は引き立て役だという未亡人の言は必ずしも謙^{けん}遜^{そん}ではないが、この点が果して楊柳観音の尊容に適するかどうかは疑問である。）先生はこんな顔だちでないお考えになりますか？ 日本髪よう

似合うてますやろ？——はあ、お母様^{かあさん}日本髪好きやとかいうことで、ときどき結^いやはりまして、学校いもその頭で来やはりましてん。——何せそんな学校ですから、制服なんぞあれしませんし、日本髪の着流しでも何でもかめしませんのんですから、わたしなんか袴^{はかま}穿^はいて行^いたことあれしませんでした。光子さんも、たまに洋服着なさることありましてんけど、和服の時はいつでも着流ししてん。この写真では髪^{かみ}のせえで私より三つぐらい若うに見えてますけど、ほんまは一つ歳^{とし}下の二十三、——生きておられたら今年二十四ですもん。しかし光子さんの方が一、二寸せえ高いでしたし、それに綺麗^{きれい}な人いうもんは、自分では器量鼻^{きりょうび}にかけへんつもりでも、やっぱり何とう自信のある様子態度に現われるもんですやろか、それともこつちに引け目ありますとそない見えますのんですやろか、その後親しいになりましたからでも、歳からいうとわたしの方が姉さんでありながら、いつでも妹みたいな気^き伊^いしてましてん。

で、その時分、——といいますのんは、話前に戻りまして、まだお互いにもものもいわんといてました時分、前にいいましたようなけつたいな噂^{うわさ}立ちましたことは光子さんの耳いも這^{はい}入^いってえへんはずあれしませんのんに、光子さんの様子はちよつとも前と変れしませんねん。わたしの方では疾^とうから綺麗^{きれい}な人や思て、噂^{うわさ}立ちません時分には、光子さんが通

りなされると、それとのう傍^{そば}い寄って行ったりしましてんけど、光子さんの方ではてんと私
 やかい眼中にないような塩^{あんばい}梅で、すうツと通つてしまひりますが、その通られた跡の
 空気までが綺麗なような氣イするのんです。もしも光子さんが例の噂聞いてなさるとした
 ら、なんぼ何でも私いうもんに注意しなされへん訳あれしませんやろ。イヤな奴^やつちや思
 われるか、氣の毒や思いなさるか、何とか素振^{そぶり}に見えそうなもんですのんに、さっぱりそ
 ういう風しなされへんもんですから、私の方も段々ずうずうしいになりまして、また傍^{ひる}
 寄つて顔のぞき込むようになりましてん。すると或る日、お午^{ひる}の休みに休憩所^{じぎ}でばったり
 出遭^{であ}うと、いつでもすうツと澄まして通り過ぎてしまいなさるのんに、どういふ訳やにツ
 こりしなさつて、眼工で笑いなさるのんです。それで私思わずお時儀^{じぎ}してしまいましたら、
 直ぐつかつかと寄つて来られて、「わたし、あんたにこないだから大変失礼しました。
 どうぞ悪^{あやま}うに思わんというて頂^{ちやうだい}戴^{だい}」いいなさいますねん。「まあ何いいなさるのんです。
 わたしこそ詫^{あやま}らないかなんだのんですが」いいますと、「あんた詫^わりなさることあれしま
 せんわ。あんたは何も知りなされへんのんです。わたしたち^{おとし}陥れよとしてる者^{もの}いますから、
 氣イつけなさいや」いいなさいますねん。「へえ、——それは誰^たですか」と尋^たねますと、
 「校長先生ですわ」といわれて、「此^{ここ}処^こでは詳^でしい話^け出来^でしませんさかい何^{どこ}処^こぞ外^{そと}い行て、

お昼御飯一緒に付き合ってもらわれませんか？ そしたらいろいろ、ゆっくり聞いてもらいますが「いいなさるんですから、「何処いでも一緒にいきますわ」と、二人で天王寺公園の近所にあるレストランに行きました。それから光子さん洋食たべながら話して下さったのですが、わたしたちの事について悪い噂いい触らしたのんは実は校長さんやいいなさいますねん。なるほどそういうわれて見ると、用もないのんに教室い這入^{はい}って来て、みんなの前でわざと私に恥掻^かかすような事するというのんが、だいぶんおかしい。悪意あつてしたもんとか思われへん。けどいったい何のために校長さんがそんな噂触れ廻^かるのんかといいますと、目的は光子さんにあるのんやそうで、何でも彼^かでも光子さんの品行について悪い評判立ちさいしたらええのんやいうのんです。それがまたどういう訳やいいますと、その時分光子さんに結婚の話持ち上つてまして、先はMいう大阪でも有名なお金持の家の坊^{ぼんぼん}々で、光子さん自身は氣い進んでおられなかったそうやのんですが、お宅ではたいていそうその縁談望んでおられたし、先方でも光子さん欲しがっておられた。ところが或る市会議員のお嬢さんで、やっぱりそのMさんへ縁談持ちかけてる人あつて、光子さんの方と競争の形になつた。——光子さんは競争のつもりやのうても、市会議員の方では大敵が現われた思ひましてんやろ。何しろMさんの坊々は光子さんの器量にあこがれてラブレ

ター寄越よこしたくらいやのんですから、それは大敵に違いありません。それでその市会議員の方では八方いい運動して、成ろうことなら光子さんにケチ付けよというのんで、もう今までにも随分いろいろと、光子さん外に男あるらしいとか、あることないこといい触らしてましたんやそうですが、まだそいだけでは飽き足らんと、とうど学校の方いい手工廻して、校長さん買収したのんですなあ。あ、そうそう、そいからその前に、——話がほんまにこんがらがってますけど、——その前にその校長さんが、校舎の修繕するからいうのんで、光子さんのお父様に、お金千円一時融通してもらえまいかいうて来たことありますねんと。光子さんのお宅ではお金はたんとありまっさかい、千円ぐらい何でもなかったのんですやろけど、おおびらに寄附金募つるのんなら聞えてるが、一時融通してくれというのんおかしい、それにあんだだけの校舎が千円のお金で修繕出で来るはずもないし、分らん話やいうようなことで、お父様は断ことわられたのんやそうですねん。光子さんの話やと、そんなこというてはお金のありそうな生徒の家頼み歩くのん校長さんの癖くせやそうで、借ったお金は一ぺんでも返したことあれしませんねんと。それも校舎の修繕に使うのんなら格別、校舎いうのん豚小屋みたいに汚きたうてぼろぼろになったなり、荒れ放題にしたあるのんです。——はあ？
 いいえ、そのお金は自分の生活費に使つてはりますねん。校長さんいいましても高等幫ほうか

間まみたいな人で、おまけに奥さんがやつぱりその学校の刺し繡ゆうの先生してなさって、夫婦でお金持の生徒に取り入っては、日曜のたんびに遠足会やとか、そんなことばかりしてはりますさかい、なかなか暮らし派手ですね。そいでお金貸したげたら、たいそう御機嫌ええのんやそうですけど、断つたら、陰い廻うらつてその生徒のことえらい悪ういやはりますねんと。つまり光子さんにはそういう恨うらみあるとこいさして、市会議員に頼まれたもんですから、どんな悪あく辣らつなことかてしかねへんです。「ですからあんたわたし陥れるために利用しられなさったんやわ」と光子さんはいわれますねん。「まあ、そんな深い訳あつたのんですか、そんな事とはちよつとも知りませなんだが、それにしてもあんと私とは今日までお附き合ひもしてませなんだのんに、あんまり出鱈でたらめ目が過ぎるではあれしませんか。捏ねつ造ぞうする人も捏造する人なら、みんながそれ真まに受けるいうのん不思議でなれしません」いいますと、「あんたはそれやから呑氣のんきや」いいなさって、「噂立うわさったもんやさかい、二人はわざと学校ではものいえへんのやと、みんなそないいうてますし、それどころか、こないだの日曜に二人大軌電車だいきでんに乗つて奈良い行くとこ見たいう人さいあるのんですね」いいなさるのんです。わたし呆あきれてしもて、「まあ、誰がそんなこといいますねんやろ」いいますと、「なんでも校長さんの奥様おくさんから出たらしいのんです。それはそ

れはあんたが考えてなさるより十倍も二十倍も陰険やのんですから、氣イ附けなさいや」
いう訳ですねん。

その三

そこで光子さんは、ほんまにあんたに氣の毒でなれしません、すみませんすみませんと何遍もいいなさいますから、わたしの方がかいつて氣の毒になりまして、「いいえ、いいえ、あんた悪いことあれしません。憎いのんは校長先生です。教育家ともあろうもんが、何ちゆう卑劣な、……けど、わたしでしたらどんなこといわれようとちよつとも構めしませんけど、あんたこそお嫁入り前の身イで、そんな悪辣な人たちの罾わなにかからんように氣イ附けなさいや」と、こつちからあれこれと慰めたげましたら、「きようはあんたにすつくりお話すること出来て、ほんまにええことしました。こいでようよう胸すツとしました」いわれて、「あのう、こうして二人で話やかいてたら、またなんやかんやいわれますから、こんだけにしときまひよなあ」と笑いなさるのんです。「折角友だちになったのんに

名残り惜しいですなあ」と、わたし何や、ほんまにそんな氣イしまして暫くもじもじして
 ました。すると光子さんは「あんたさいよろしかったら友だちになりたいのんですが、今
 度内い遊びに來なされしませんか。わたしハタからどないいわれても恐いことあれしませ
 んわ」いいなさるのんです。「はあ、わたしかつて恐いことあれしませんが、あんまりう
 るさいこというのなら、あんな学校やかい止めてしまします」いいますと、「なあ、柿
 内さん、わたしいつそのこと、知って仲ようしてみんなが冷やかすのん見てやりたいわ。
 あんたどない思いなさる？」「はあ、それがよろしいわ、そして校長さんどんな顔しなさ
 るか見てやりたいですわ」と、わたしもすぐその氣イになってしまいました。「そしたら、
 あのう、面白いことありますねん」と光子さん手工たたいてやんちやのように嬉しがりな
 さつて、「ほんまに今度の日曜に、二人で奈良い行きなされませんか。」「ええ、行き
 まひよ、行きまひよ、それ分つたらえらい評判になりますで。」「——そんなことで三十分
 か一時間ほどの間に、お互にもうすつくり打ち解けてしまひしてん。

きようはもう学校い歸るのんも馬鹿々々しいし、何なら松竹いでも行きませんかと、孰
 方からともものういい出しまして、その日は夕方まで一緒に遊んで、光子さんは「ちよつと
 店い寄つて行きます」と心齋橋筋散歩しながら歸られて、わたしは日本橋からタクシ

ーに乗って今橋の事務所に行きました。そんでいつでもみたいです主人誘^{さそ}て阪神電車で帰りましたのんですが、その時主人が、「お前今日えらいそわそわしてるなあ、何ぞうれい事でもあったのんか」いわれましたのんで、「やっぱりいつもと様子違^{ちが}てるのかしらん、光子さんと友達になったことそないに自分幸福にさしたのんかしらん」と、ひとりで思いました。「そんでもわたし、今日ほんまにええ人と友達になったんやもん。——」「何んちゆう人や。」「何んちゆう人やて、そら綺麗な人やもん。——あんた、あのう、船場の徳光^{ラシヤ}いう羅紗問屋あること知らん？ そのお嬢さんやねんけど。」「何処で友達になったんや？」「同じ学校の人やわ、——それが、あのう、わたしとその人と、こないだからけつたいな噂^{うわさ}立つてなあ、——」わたし別に疚^{やま}しいことやかいもないもんですさかい、面白半分^{はんぶん}に校長先生と喧嘩^{けんか}したことから、一から十まで話してしましますと、「ずいぶんひどい学校やなあ。けどお前がそないに美人やいうのんなら、僕も一遍会^あうてみたいもんやがなあ」と、冗談にそないいうてました。「いまにきつと内いも遊びに來なさるやろ。わたしこの次の日曜日に、一緒に奈良い行くいうて約束したんやけど、行つたらいかん？」
 「そら行つてもかめへん。」主人はそないいいまして「校長さん怒るぜエ」いうて笑^{わろ}てましてん。

明くる日学校に行きますと、きんの一緒に御飯食べたことや映画見に行ったこともういつの間にやら知れ渡つて「柿内さん、あんたきんの道頓堀歩いてなさったなあ」「お楽しみやなあ」「あれ一体誰やったなあ」なんて、女の人いうたら、も、ほんまにうるさいのんです。そしたら光子さんはまたそれ面白がりなさって、知って傍い寄って来られて、これ見よがしにしなさるのんです。そういうようなあんばいで、それから二、三日するうちに、えらい仲好うなつてしまいました。校長さんはかいつて呆れてしまわれたのんか、ただ恐い眼工してじつと睨んでおられるだけで、もう何ともいいなされしません。光子さんは「なあ、柿内さん、あの観音さんの絵工もつと私に似るように画いて御覧。そしたらどないにいやはるかしらん」いいなさるのんで、前よりもつと似るように直しましてんけど、校長さんはそんなり教室いも来なされしません。わたしたちはええ気イになつて「痛快やなあ」いうてましてん。

そないなつて来ると、無理に奈良い行く必要もないようになりましたが、ちょうど四月の終りのことで、えらいええお天気の日曜でしたさかい、電話かけて相談して、上六の終点で待ち合ひして、お午すぎから若草山の方ぶらぶら歩き廻りました。光子さんは歳のわりにたいそうおませなところもありますし、また子供のような無邪気なところもあつて、山

の頂^{てっぺん}辺^へい上りましたら、蜜柑^{みかん}五つも六つも買^かうて、「ちよつと見てて御覽」と、それを上から転^{ころ}こぼしたりしました。すると蜜柑は頂^{てっぺん}辺^へから下までころころと転^{ころ}こんで、その拍子にぽんと一つ往来飛び越えて、向い側の家の中い這^{はい}入るのんで、面白がついていつまでもそないしてなさるのんです。「光子さん、そんな事してたら切り^きがないよつて蕨^{わらび}でも採りに行きまひよ。わたしこの山に蕨^{つくし}や土筆のたんと生^はえてるところよう知^しつてゐるわ」いうて、それから日の暮れまでかかつて、蕨やらぜんまいやら、土筆やら、たあんと採りました。

——はあ、その場所ですか、あれはあの方、若草山の山が三つ重なつてゐる、その一番前の山と、その次の山との間のへつこんだ所、——あそこら辺^{へん}に、ずっともう一杯に生えてまして、あの山のんは、毎年春に山焼きますので特別おいしいのんです。——そんなことでもう空大分暗^{くろ}なつた時分、二人ともまた前の山の方に戻^{かへ}つて来まして、あんまりくたぶれましたよつて、山の中途へんい腰おろして休みながら、暫^{しばら}くぼんやりしてます時でした。「柿内さん」と、急に光子さんが何やこうすこし改^かまつた様子で、「わたしどうしてもあんたにお礼いわんならんことあるねんけど」いわれるのんです。「何やのん？」と尋^たねますと、「わたしあんたのお蔭でなあ、あんなイヤな人のとこい嫁入りやかいせえでもええようになりそうやねんわ。」——そういうて、何や知りませんけどニヤニ

や笑^{わろ}てなさるのんです。「まあ、また何でそんな事になったん？」「ほんまに噂^{うわさ}いうもん早いもんで、もうちゃあんと、あなたと私のこと向^{むこ}い知れてしもてるねん。」

その四

「ゆんべなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつがれて、「お母さんがわたしを呼びやはって、お前、学校でこんな噂^{うわさ}あるそうやけど、それほんまでつか、いやはるねん。へえ、そんな噂あることはありまっけども、いったいお母さん、何処^{どこ}で聞きやはりましてん？ そらまあ何処でもよろしおまつしやないか。それよかそらほんまの事でつか？ へえ、ほんまです、そやけど何がけったいでんねん？ 友達と仲好^ようしてるぐらいで。——そういうたらお母さんちよつとまごつきはってなあ、そらお前、仲好^ようしてるだけやったら何ともないけど、何やそれがイヤらしいこツちやいうやおまへんか。イヤらしい事でどんな事でんねん？ どんな事やお母さんは知りめえんけどな、別に悪いことやなかったらそんな噂立つはずおまへんやないか。ああ、そら何でや知ってまんねん、

そのお友達というのがなあ、うちの顔が好きやいやはってモデルにしやはりましてん、そんな事からみんながうちらを排斥し出しはりましてんやろ。そろもう学校いうたらうるそうてなあ、ちよつとでも顔綺麗きれいかつたら何や彼かやと憎まれるよつて。——そろまあ、そんな事もありまっしゃろけど、と、わたしが説明したげたらお母さんもだんだん分つて来やはつて、そんな事ならかめへんけども、そないいうてもその何とかはんいう人とはつかり仲好うせん方がよろしおまっしゃないか。お前もこれからが大事な体やよつて、しようむない事あんまりいわれん方がよろしおまつせいうて、まあそんなりで済んでしもてんけど、きつとあの市議員なあ、向むこらへんの連中がそんな噂聞さき搜さがしてMの方いしやべつたのんが、それがまたお母さんの耳に這はい入つてしもてんわ。そやよつて、大抵縁談もあかんようになるやろ思てんねん。」「そら、あんたはそんでええやろけど、お母さんがきつとわたしを嫌いやがつてはるわ。今に見てて御覧、わたしと交際したらいかんいわれへんかしらん？もし誤解しられたらイヤやけどなあ」と、わたしそれが気がかりで、そういいますと、「そんなことあんた、心配せんかてかめへんわ。そろほんまいうたら、校長さんが慾張りの人で、お金貸してもらえなんたら悪口いう癖のあることや、市議員の人に買収しられてることやらを、みんなお母さんについてしまお知らん思たけど、そんなけつたいな学

校なら止めてしまいはれいわれそうやよつて、いわんと置いてんわ。そしたらあんと会われへんようになるよつて。「あんたもなかなか隅^{すみ}い置きなあ。」「ふふん、うちかつてスコイよつてなあ」と、光子さんはくつくつ笑われて、「向^{むこ}が悪い人やつたらこつちかつて利用してやらんと損やわ。」「けど、あんたの方が破談になって、市議員のいとはんもよろこんではるやろなあ。」「そしたらあんたは両方から感謝しられるべきやわ」なんと、お互いあれやこれやいい合いまして、山の上で一時間以上もしやべつてました。わたし今までも若草山い上ったこと何遍でもありますけど、そんなに日イ暮れてしまうまで山の上にいたことあれしませなんだのんで、あそこから夕^{ゆうもや}靄^{もや}の景色見たすのんは、ほんまにその時が初めてでした。ついさつきまでまだその辺に人がチラホラしてましたのんに、もうてつぺんから麓^{ふもと}までだあれも人の影ありません。その日は割にえらい人出でしたから、あのなだらかな、若草の生えた山の中ほどには、弁当のたべ残しや、蜜柑の皮や、正宗^{まさむね}の鑊^{びん}が一杯散らかつて、空はまだうす明^{あか}いのに、足の下には奈良の町の灯^ひイちらちらして、遠くの方の、ちょうどわたしら^まの真^まア向うのあたりには、生駒^{いこま}山のケープル・カアのイルミネーションがずうつと珠数^{じゆず}のようにつながって、紫色した靄^{もや}のあいだから、ところどころ絶えては続いてまたたいてます。そのまたたいてる光見ると、わ

たし、何やしらん息詰まるように感じたのんですが、「まあ、知らん間に晩になってしもて、淋しいわなあ」と、光子さんがいわれました。「一人やったらほんまに恐うていられへんわなあ」いいますと、「好きな人と二人だけやったらこんな淋しい所の方がええわ」と、そないいうて光子さんはためいきついておられました。「うちあんと一緒やつたらいつまでも此処でこないしてたいわ。」——わたしはその言葉口いは出さんと、夕闇のなかにうづくまつて足投げ出してなさる光子さんの横顔眺めてましたが、暗いのでどんな表情してなさるのんか分りませなんだ。ただ光子さんの白い足袋の向うに、大仏殿の金の鯢鉾が空のうすあかりに底光りしてました。「おそうなつたよつて帰りまひよ」いうて、そこから山降りて、大軌まで歩いて行きましたらかれこれ七時になってしまいました。「うちお腹減つたけど、あんたどうする?」「きようは早う帰らんといかんねんわ奈良い行くとも何ともいわんと出て来たよつて」と、光子さんは時間氣イにしておられましたか、「そないいうたかてうちもうペコペコやわ。おそなりついでやよつてええやないか」いうて、無理に引つ張つて洋食屋い這入りました。「あんたとこの旦那さん、おそなつても別に何ともいやはれへんか?」と御飯たべながらそんな話が出ました。「うちのあの人、そんなこと何とも干渉しやはれへん。それにうち、あんたと仲好うなつたことちや

あんと話したあるわ。」「そしたらどないやはった?」「うちがあんまりあんたのこと
 ばかりいうよって、あの人いうたら、そんな綺麗な人やったら一ぺん会うてみたいなあ、
 いっそ遊びに來^けえへんもんやろかいうてはった。」「あんたの旦那さんいうたら優^{やさ}しい人
 ?」「それもうあの人と來たら、うちがどんな勝手氣儘^{さま}な事してもなんともいやはれへん
 わ。けど、あんまり優しいよって、時によったら張合^さいがないのんで、——」わたし、まだ
 その時までには自分のことは一つも光子さんにいうてなかったのんで、夫と結婚するようにな
 った訳や、それから、あのう、いつやらの恋愛問題や、それについて先生にいろいろ心
 配^{いた}して戴^{ただ}いたことまで、その時すっくりいうてしまいました。光子さんはわたしが、先生
 知^ちつてるいいましたら、「まあ、そうお? あんた知^ちつてんのん?」とびっくりしなさつ
 て、自分も先生の小説とても好きやよって、一遍連れて行^いつてくれなされしませんが、い
 てなかつたのんですが、いっつも今度こそ今度こそいいながら、とうとうそのままにな
 っ^ててしもうたのんです。「ふうん、そしてあんた、もうその人と交際してへんのん?」と、
 光子さんは一所懸命にあの事聞きたがりなさつて、今はもう交際してえしませんといいま
 すと、「なんでやのん? そんな、あんたのいうように清い恋やったら交際してもええや
 ないか。うちやったら、恋愛と結婚とは別々^{べつべつ}のように思うけどなあ」なんかいうて、「あ

んたの旦那さん、その事ちよつとも知りはれへんのん？」「ふん、そらうすうす感じてたかも知れんけど、うちなんにもその事についていうたことないし、とやかく問題になったようなことなかったわ。」「えらい信用あるねんなあ。」「それよりかうちのこといつそ子供のように思うてるねんわ。そやよつてうち氣に入らんねんけど」と、わたしそういいました。

その晩家い歸つてみたら十時近くでしたのんで、「えらいおそかったなあ」と、夫はいつにのうけつたいな顔して、何やこう淋しそうにしてたのんが、ちよつと氣の毒な氣いしました。別に悪いことした訳でも何でもないのに、夫が長いこと待ちくたぶれて、たつた今御飯すましたらしい様子見ると、妙に氣がとがめました。そういうと前、恋人と会った時分にはよう十時過ぎに歸つて来たことありましたが、この頃になってこないにおうなつたことあれしませなんだ。そいで夫もちよつと氣い廻したのんかも分れしませんが、わたし自身も、何かしらんちようどあの時と同じような氣いしました。

その五

そうそう、それからその時分にあのいつぞやの観音さんの絵工出来上りましたので、それ夫にみせたことありました。「ふうん、光子さんいうたらこんな人か。お前にしたらこの絵工もう出来すぎてるなあ」と、夫は晩御飯のときにそれ畳たたみの上い広げて、一と箸はしたべては見、一と箸たべては見いして、「これやったら、さも絵工にかいたようやけど、ほんまにこの通りかいな」と、あやしみながら念押ししました。「そらこの絵工問題になったくらいやもん、よう似てるわ。ほんとの光子さんはこの神々こうこうしさの上にちよつと肉感的なところあるねんけど、日本画にしたらその感じが出えへんねん。」——その絵工わたし、大分骨折りましたので自分でもよう画かけてると思ひました。夫はしきりに傑作やいいましたが、とにかくわたしが絵工いうもん習ひ始めてから、これほど一所懸命に、興味も以つて画いたことはあれしませなんだ。「いつそこの絵工表具ひょうぐしてもろたらどうやねん。それでそれが出来上つてから、光子さんに見に来てもろたらええやないか」と、夫がいいますのんで、わたしもその氣イになりまして、そんなら京都の表具屋いやつて立派に仕立てさせよと思ひながら、ついそのままに放つたあつた、或る日イのことでした。「実はこういうつもりやねんけど」と、光子さんにその話したら「表具屋いやるぐらいやったら、

もう一ぺん画き直して見えへん？——あれはあれでよう出来てるけど、——顔はよう似てるけど、——体のつきがちよつとだけ違うよつてなあ」いわれるんです。「違うて、どういう風に？」「どういう風にいうたかつて、口でいうたぐらいやつたら分れへんわ」と、そないいわれたのんが、ただ自分の感じ正直に述べられたのんで、「わたしの体はもつともっと綺麗です」いうような自慢の意味はなかったのんですけど、でも何とこの不満足に思うてなさる様子でしたので、「そんなら一ぺんあんたのはだかの恰好かつこ見せて欲しいなあ」いいますと、「そら、見せたげてもかめへんわ」と、すぐに承知しなさいました。

そんな話があつたのんやつぱり学校からの帰り道か何処ぞやったんですやろ。「そんならあんたといこい行て見せたげるわ」いわれて、たしかその明くる日の午後、学校早退はやびきして二人でわたしの家うちい来ました。「うち、はだかになつたりなんかしたら、あんたといこの人びつくりしやはるやろなあ」と、みちみち光子さんはいうておられました、きまりわるがるより、なんぞ面白い遊びでもするように、やんちやな眼工しておかしがっておられるのんでした。「家にええ部屋あるわ。そこやつたら誰にも見られへん、西洋間になつてよつて」と、わたしはそないいうて二階の寢室い連れて行きました、「まあ、感じのええ部屋やなあ、とてもハイカラなダブルベッドあるなあ」と、光子さんはそのベッドに腰

かけて、お臀^{しり}にはずみつけてスプリングぐいぐい撓^{たゆ}ましたりしながら、暫^{しばら}くおもての海のけしき見ておられました。——宅は海岸の波打ち際^{ぎわ}にありますのんで、二階はたいへんに見晴らしええのんです。東の方と、南の方と、両方がガラス窓になってまして、それはとても明^あうて、朝やらおそうまでは寝てられしません。お天気のええ日は松原の向うに、海越えて遠く紀州あたりの山や、金剛山^{こんごうさん}などが見えます。はあ？——はあ、海水浴も出来るのんです。あそこら辺^{へん}の海はちよつと行きますと、じきにどかんと深うになってますので、あぶないのんですけど、香櫨園^{こうろえん}だけは海水浴場出来^でまして、夏はほんまに賑^{にぎ}やかやのんです。ちようどその時分は五月のなかば頃でしたから、「早う夏になったらええのんになあ、毎日でも泳ぎに来るのに」と、部屋の中見廻しながら、「うちも結婚したら、こんな寝室持ちたいわ」などというたりしました。「あんたやったら、これどころやあるかいな。もつともつとええとこい行けるやないか。」「そやけど、結婚してしもたらどんな寝室に住んでも、綺麗な籠^{かご}の中に入れた鳥のようなもんと違^{ちが}うかしらん？」「そんな氣イすることもあるけど、——」「あんた、此処は夫婦の秘密室やないかいな。わたしこんな部屋引つ張つて来て、旦那さんに叱^{しか}られへん？」「秘密室かってかめへんやないか。あんただけは特別やもん。」「そないいうても、夫婦の寝室は神聖なもんやいう

さかいに、……」「そしたら処女の裸体かつて神聖なもんやよって、ここで見せてもらうのが一番ええわ。今のうちやったら光線の工合もちょうどええよって、はよ見せてほしいわ。」私はそういうて急^せきたてました。「海の方から誰ぞ見てはれへんやろか。」「あほらしい、あんな沖の方にいる船から何が見えるもんかいな。」「そやけど、ここはガラス窓やよってなあ。——そのカーテン締めてほしいわ。」五月いうても眼工痛うになるほどキラキラするお天気でしたから窓はところどころ開け放してありましたが、それすつかり締め切つてしもうたのんで、部屋のなかは汗がたらたら流れるぐらいの暑さでした。光子さんは観音さんのポーズするのに、なんぞ白^{びやくえ}衣の代りになるような白い布がほしいうのんで、ベッドのシート剥^はがしました。そして洋服筆筒^{だんす}の蔭^いで行て、帯ほどいて、髪ばらばらにして、きれいに梳^すいて、はだかの上いそのシートをちょうど観音さんのように頭からゆるやかにまといました。「ちよつと見てごらん、こないしてみたら、あんたの絵工と大分違うやろ。」そういうて光子さんは、筆筒^{とびら}の扉に附いている姿見の前い立つて、自分で自分の美しさにぼうつとしておられるのでした。「まあ、あんた、綺麗な体しててんなあ。」「——わたしはなんや、こんな見事な宝持ちながら今までそれ何で隠してなさつたのんかと、批難^{ひなん}するような氣持でいいました。わたしの絵工は顔こそ似せてありますけ

ど、体はY子というモデル女うつしたのんですから、似ていないのはあたりまえです。それに日本画の方のモデル女は体よりも顔のきれいな人が多いのんで、そのY子という人も、体はそんなに立派ではのうて、肌^{はだ}なんかも荒れてまして、黒く濁ったような感じでしたから、それ見^み馴^なれた眼工には、ほんまに雪と墨ほどの違いのように思われました。「あんた、こんな綺麗な体やのんに、なんで今まで隠してたん？」と、わたしはどうとう口に出して恨みごとというてしまいました。そして「あんまりやわ、あんまりやわ」いうてるうちに、どういう訳や涙が一杯たまつて来まして、うしろから光子さんに抱きついて、涙の顔を白衣の肩の上に載せて、二人して姿見のなかを覗^{のぞ}き込んでいました。「まあ、あんた、どうかしてるなあ」と光子さんは鏡に映ってる涙見ながら呆^{あき}れたようにいわれるのんです。「うち、あんまり綺麗なもん見たりしたら、感激して涙^{なみだ}が出て来るねん。」私はそういったなり、とめどのう涙流れるのん拭^ふこうともせんと、いつまでもじつと抱きついてました。

その六

「さあ、もう分ったやろうち着物きるわなあ」いわれるのんを、「イヤや、イヤや、もつと見せてほしいイツ」と、わたしは甘えたみたいに首振ってせがみました。「あほらしいもない、いつまではだかになつてたかてしょうがないやないか。」「しょうがあるとも。あんた、まだ、ほんとのほだかになつてえへんやないか。この白い物取つてしもたら、——」そういうていきなり肩にかかつてるシートつか掴みますと、「放してほし！ 放してほし！」と、一所懸命に剥はがされまいとしなさるのんで、シートがびりびり破れました。わたしはかあツと逆上してしもて、くやし涙一杯浮かべて、「そんならいらん、うちあんたそんな水臭い人や思てえへなんだのに、もうええわ。もうきよう限り友達でもなんでもないわ」と破れたシートを口でずたずたに引き裂きました。「まあ、あんた、氣イでも違うたんか。」「うちあんたみたいに薄情な人知らんわ。あんた、こないだ、もうお互に一切隠しごとせんいうて約束したやないか。あんたのうそつき！」——その時はよつぽどどうかしてたと見えまして、自分で覚えのないのですけど、まっさおになつてぶるぶる顫ふるいながら光子さんを睨にらみつけた顔つきが、ほんまに氣でも狂うたように思えましたそうです。そういうと光子さんもやつぱり黙つてわたしの顔じーツと視みつめたまま、ふるてなさつたようでしたが、ついさつきまでの氣高い楊柳觀音のポーズ崩くずれて、羞はずかしそうに両方の肩お

さえて、一方の足の先を一方の上に重ねて、片膝かたひざを「く」の字なりにすばめながら立つてなさるのんが、哀れにも美しゆう思えました。わたしはちよつといたいたしい氣いしましてんけど、シーツの破れ目から堆うずたかく盛り上つた肩の肉が白い肌をのぞかせてるのを見ますと、いつそ残酷に引きちぎつてやりとうなつて、夢中で飛びついて荒々しゆうシーツ剥がしました。わたしも真剣なら、光子さんも氣い吞のまれたと見えまして、こっちのするまになりながら、もう何事もいわれませなんだ。ただ両方が憎々しいくらいな激しい眼つき片時も外そらさんと相手の顔いそそいでした。わたしはどうぞ思い通りにしてやつたい勝利のほほえみを、——冷やかな、意地の悪いほほえみを口もとに浮かべて、体に巻きついてるものをだんだんに解いて行きましたが、次第に神聖な処女の彫像が現われて来ますと、勝利の感じがいつのまにやら驚歎の声に変わって行きました。「ああ憎たらしい、こんな綺麗な体してて、——うちあんた殺してやりたい。」わたしはそういうて光子さんのふるてる手頸てくびしつかり握りしめたまま、一方の手工で顔引き寄せて、唇持くちびるって行きました。すると突然光子さんの方からも、「殺して、殺して、——うちあんたに殺されたい、——」と、物狂おしい声聞えて、それが熱い息と一緒に私の顔いかりました。見ると光子さんの頬ほおにも涙流れてるのんです。二人は腕と腕とを互の背中で組み合うて、どっちの

涙やら分らん涙飲み込みました。

その日はわたし、別にどうという考はありませんでしたけど、光子さん連れて来ること夫に黙ってましたのんで、夫の方では学校の帰りにわたしが事務所い寄る思うて、ゆうがたまで待つてましたそうですが、いつまでたつても来ませんのんで、家い電話かけて来ました。「そんなんやつたら、ちよつと知らしてくれたらええのに。えらい待ちぼけ喰うたもんや。」「ついうつかりしてて済^すまんだけど、急に話がまとまってしもてん。」「そんで、光子さんまだいやはんのか。」「いやはるけど、もう直^じき帰りはるやろ。」「まあもうちよつと留めといたげエな、僕こいから直ぐ帰るわ。」「そしたら大急ぎで頼むわ。」

——わたしは口ではそういいましたけど、心のうちでは夫が戻つて来ますのん何や面白う思いませなんだ。さっきの寢室の事あつてから、わたしの胸には幸福の感じが満ち満ちてまして、今日は何という楽しい日イやると、足が地に着かんように浮き浮きして、些細^{ささい}なことにも直ぐに心臓どきツと早鐘^{はやがね}打つようになってましたのんに、夫に帰つて来られてはその折角^{せつかく}の幸福へヒビが入るように感じたのんです。わたしはただもう光子さんと二人きりで、いつまでも話してたかったのんです。いえ、話なんかせえでも構^かめしません、黙つて光子さんの顔さい見てられたら、——自分がその人のそばにいることだけで、

限らない幸福が胸一杯になるのんです。「なあ光子さん、今電話がかかってなあ、うちの人帰って来るそうやねんけど、あんたどないする?」「えー、どうしよう——」と、光子さんは慌^{あわ}てて着物着ながら、——もう夕方の五時時分でしたが、その時まで二、三時間もシーツ一つでいなさったのんです。——「うち会わんと帰ったら悪いかしらん?」「あなたに会いたいというてたけど、……今じつき帰って来るよって待ってたらどう?」「わたしはそういうて引き留めはしましたものの、その実夫が戻らん先に早う出て行ってくれはったらええ思いました。そうというのんが、今日の一日を完全に幸福な一日として終らしたい、折角のうつくしい日の思い出を、第三者のために不純にさしてしまいたくないと願うたのんです。そんな気持があつたもんですから、夫が帰って来ました時には、自然とその不満の色顔い出まして、妙にふさぎ込んでしまいました。光子さんも、わたしがそういう風でしたし、初対面でもありますし、それにいくらか氣イとがめてもいなさったのんでしょう、あんまり物数いわれませんのんで、三人ながら手持^{てもちふたさ}無沙汰で、めいめい何や別な事考えてる、というたようなあんばいでした。そうなるとわたしは、いよいよ邪魔^{じゃま}しられたのんが腹立たしいて、夫憎うさい感じました。「二人で何して遊んでん?」と、夫は光子さんの手前、ぼつぼつそんなこと話しかけました。「今日は寢室アトリエに使^{つか}てしもてん」と、

わたしはわざとあつさりいうて除けました、「——観音さんの絵工画きなおそ思て、光子さんにモデルになつてもろてん。」「ロクな絵工もよう画かんくせに、モデルこそええ迷惑やなあ。」「そやけど、モデルの名誉回復のために画きなおしてくれいわれてんもん。」「お前^{まい}らなんぼ画いたかつてモデルわやくちやにするだけや。モデルの方がずっと綺麗やないか。」「夫婦がそんなことをいい合うてるあいだ、光子さんは羞^はかしそうに下向いてくつくつ笑うてなさるだけで、てんと話はまずに、間ものう帰つてしまわれました。

その七

ここにその時分やりとりしました手紙持つて来ましたから、お読みになつて下さいませ。まだこの外にもたとんとありますけど、とてもみんなは持つて来られしませなんだのんで、これはほんの一部分、その中の面白そうなのん選^よつて来ましたのんです。こつちの方の古いので大体順番になつてますから、どうぞこれから見て下さいませ。光子さんからわたしの方い来ましたのんは一^{ひと}つつ残らず大事にしもて置いたのですが、わたしの方

から光子さんい上げたのんが中に交つてますのんは、それはあのう、あとで話しますけど、少し事情ありまして、あの方の家から取り戻しましたのんです。(作者註、柿内未亡人がほんの一部分だといったところのそれらの文^{ふみから}穀^はは、約八寸立方ほどの縮^{ちりめん}緬^はの帛^{ふくさ}紗^さ包みにハチ切れるくらいになつていて、帛^{はし}紗^さの端^{はし}が辛^{から}うじて四つに結ばれていた。その小さい堅い結び目を解くのに彼女の指頭^{くれないちよう}は紅を潮し、そこを抓^{つか}っているように見えた。やがて中から取り出された手紙の数々は、まるで千代紙のあらゆる種類がこぼれ出たかのようにであつた。なぜならそれらは悉^{ことごと}くなまめかしい極彩色の模様のある、木版刷りの封筒に入れられているのである。封筒の型は四つ折りにした婦人用のレターペーパーがやつと這^{はい}入るほどに小さく、その表面に四度刷りもしくは五度刷りの竹^{たけ}久^{ひさ}夢^{ゆめ}二風の美人画、月見草、すずらん、チューリップなどの模様が置かれてある。作者はこれを見て少からず驚かされた。けだしこういうケバケバしい封筒の趣味は決して東京の女にはない。たといそれが恋文であつても、東京の女はもつとさつぱりしたのを使う。彼女たちにこんなを見せたら、なんてイヤ味ツたらしいんだろうと、一言の下に軽^{けい}蔑^{べつ}されること請^うけ合いである。男も彼の恋人からこういう封筒の文を貰^{もら}つたら、彼が東京人である限り、一朝にしてあいそを尽かしてしまふであらう。とにかくその毒々しいあくどい趣味は、さすがに大阪の女である。

そうしてそれが相愛し合う女同士の間に交かわされたものであるのを思う時、尚なおさら更あくどさが感ぜられる。ここにその手紙のうちからこの物語の真相を知るのに参考になるものだけを引用するが、ついでにそれらの模様についても、一つ一つ紹介するであろう。思うにそれらの意匠の方が時としては手紙の内容よりも、二人の恋の背景として一層の価値があるからである。――)

(五月六日、柿内夫人園子より光子へ。封筒の寸法は縦たて四寸、横二寸三分、鴉とぎ色地に桜ン坊とハート型の模様がある。桜ン坊はすべてで五顆か、黒い茎に真紅まっかな実が附いているもの。ハート型は十箇で、二箇ずつ重なっている。上の方のは薄紫、下の方のは金色、封筒の天地にも金色のギザギザで輪郭が取けいつてある。レターペーパーは一面に極ごくくうすい緑で蔦つたの葉が刷つてある上に銀の点線で罫けいが引いてある。夫人の筆蹟ひつせきはペン字であるが、字の略しかたにゴマカシがないのを見れば相当に習字の稽古けいこを積んだものに違いなく、女学校では能筆の方だったであろう。小野鷺堂おのがどうの書風を更に骨無しにしたような、よくいえば流麗、わるくいえばぬらりくらりした字体で、それがまた不思議なくらい封筒の絵とぴったりに合っている。)

しとくくく……今夜は五月雨さみだれが降っている。あたしは今窓の外の桐きりの花にふりそそぐ雨の音をききながら、あの、あなたが編んで下さった紅あかいシェードの垂たれているスタンドの蔭でじつと机にむかっています。なんだかうつとうしい晩だけれど、軒端のきばを伝う雨の雫しずくに静かに耳を傾けていると、思いなしかそれがやさしい囁ささやきのように聞えて来る。しとくくく……何をささやいているのか知らん？ しとくくく……ああそうだ、光子光子光子、……恋しい人の名を呼んでいるのだ。徳光徳光、……光子光子、……徳、徳、徳、……光、光、光、……あたしはいつの間にかペンを取って、左の手の指の先へ「徳光」という字や「光子」という字を数限りもなく書いていた、親指から小指まで順々に。

堪かん忍にんして頂ちやうだい戴、こんなつまらないことを書いて。

毎日顔が見られるのに手紙なんか書くのはおかしい？ でも学校だと傍へ寄るのがきまりが悪くて妙に気がひけるのだもの。そういえばこんなにならないうちはわざとお互に寄り添はばうてみんなに見せびらかしたのに、噂うわさが事実になつてしもてからかいつて人目を憚はばるようになるなんて、やつぱりあたし気が弱いのかしらん？ ああ、どうかして強くなりた、い、もつと、もつと、……神をも、仏をも、親をも、夫をも、恐れないほど強

く強く、……

明日の午後はお茶の稽古？ そしたら三時にあたしの家に来られない？ あした学校でイエスカノーを知らして頂戴、この間のように合図してね。きつと、きつと、きつと来て！ 今もテーブルの瑠璃るりの花瓶の中で綻ほころびかけた白い芍薬しゃくやくが、あたしと一緒にあえかなためいきを洩もらしながらあなたの来るのを待っているの。失望させると可愛い芍薬の花が泣きます。洋服筆筒だんすの姿見もあなたの姿を映したいといっています。ではきつと！

明日のお昼の遊び時間にあたしはいつもの運動場のプラタナスの下に立っています。合図を忘れてはいけません。

光様

園

（五月十一日、光子より園子へ。封筒縦四寸五分。横二寸三分。オールドローズの地色の中央に幅一寸四分ほどの広さに碁盤目ごばんめが通っていて、その中に四つ葉のクローバーを散らし、下の方に骨牌カルタが二枚、ハートの一とスペードの六が重なっている。碁盤目とクローバ

―は銀色、ハートは赤、スペードは黒、レターペーパーは濃い鳶色とびいろの無地で、その右下の隅すみの所から斜めに白絵の具のペン字で文句が書いてある。筆蹟は園子より拙つたなく、落ち着きのない走り書きのように見えるが、この方が字体が大きく、イヤ味がなくて生き生きとした奔放な感を与える。）

姉ちゃん

光は今日一日機嫌が悪かったの。床の間の花をむしったり罪もない梅（専ら光子かしずに侍さむらいしている小間使こまづかいの名）を叱り飛ばしたり、――光はきつと日曜になると機嫌が悪いの。なぜって一日姉ちゃんに会えないのだもの。なぜハズさんがいると来てはいけないの？でも電話ぐらいならと思つて、さつきかけたらハズさんと一緒に鳴尾なるおへ苺狩いちごがりに行つてお留守！ まあお楽しみ！

ひどい、ひどい！

あんまりやわ、あんまりやわ！

光は一人で泣いています。

ああ、ああ、ああ

くやしいからもうなんにもいわない、

[Ta Soe&ur Clair]

[Ma Che`re Soe&ur Mlle. Jardin]

(上文中の “ [Ta Soe&ur] ” は仏蘭西語で “Your Sister” といふこと、 “Clair” は光の義から転じて「光子」を意味するのであらう。 “ [Ma Che`re Soe&ur] ” は “My Dear Sister” “Mlle. Jardin” は “Miss Garden” にて「園子嬢」の意。「マダム・ジャルダン」といわずに「マドモワゼル・ジャルダン」としたについては宛名^{あてな}の末に下の如く追記してある。
——)

あて姉ちゃんを「マダム」とはいわない。

「奥様」——まあ嫌な！ 思てもぞつとする！

でもこんなことハズさんに知れたら大変ね、

Be careful!

姉ちゃんはなんで手紙に「園子」とサインするの？ なんで「姉より」としてくれな

いの？

（五月十八日、園子より光子へ。封筒縦四寸横二寸四分。図は横に画^かいてある。緋^{ひいろ}色の地に鹿^かの子の絞^こりのよう^{しほ}な銀の点線が這^{はい}入^いつていて、下に大きな桜の花弁の端が三枚見え、その上に後姿の舞妓^{まいこ}が半身を出している。緋、紫、黒、銀、青の五度刷りの最も色彩の濃厚なもの。従つてその表面へ文字を書いても読みにくいので、宛名は裏面に記してある。レターペーパーは丈七寸幅四寸五分ほどの大きさの中に八寸ぐらいの白百合^{しらゆり}の茎^{くき}のたわめられたのが左へ寄せて描いてあり、その周^{まわ}りがうす桃色にぼかしてある。故^{ゆゑ}に罫^{けい}の引いてある部分は僅^{わず}かに紙面の三分の一の面積しかない。それへ四号活字より小さい文字で細く細く書き続けてある。）

とうとう来た、一度は来るとかねがね覚悟していた事が、……とうとう破裂してしもうた。ゆうべは随分猛烈だった。光ちゃんが見たらどんなにびっくりするかしらん。あたしら夫婦——あ、堪忍して頂戴、あたしらだなんて。——ハズもあたしも久しぶりであんな大喧嘩をした。久しぶりどころかこんなことは結婚以来始めてだった。この前問

題があつた時でもゆうべのように激しい合いをしたことはなかった。あのおとなしい優しい人があんなに腹を立てるなんて！　けど無理もないかも知れない、なぜってあたし今考えるとほんとに悪いことをいつたのなもの。どうしてあたしハズに向うとああ強情になれるのかしらん？　それにゆんべは特別に強硬だったの、どういう訳だか。：

：あたし今度は自分でちつとも済まない事をしたという気が起らないの、でもハズだって随分乱暴なことをいつた、不良少女、ヴァンパイア、文学中毒、——ありとあらゆる汚名をあげせて、それでも足りないで光ちゃんのことまでも「寢室のちんにゅうしや闖入者」だの「家庭の破壊者」だのと、——あたし自分のことだけなら堪忍するけど、光ちゃんのことをいわれたのでもう我慢ならなかった。「うちが不良少女なら何でそんな者を妻になさつた。あんたは男らしいもない、あたしの家から学費を出してもらいとうて好きでもない者と結婚しなかつたんか。あたしの我が儘ままは初めから分つてゐるやないか。あんたは卑怯ひきようや、意気地なしや」と、思いきりくさしてやった。そしたらいきなり灰皿を取つて振り上げたのでえらい目に遭あわすか思たら、それを壁へ叩たたきつけたなり、手荒なこともようせんとまつさおになつて黙つてしもた。「うちの体に怪我けがでもさして御覧、覺悟があるよつて」そういうてもやつぱり黙つていた。それきり今日までハズは一ぺんも

口をきかない……。

——その手紙にあるいい合いのことについてはもつと先生に聞いて戴きたい事があるの
 んです。前にもお話しましたかどうか、わたしと夫とはどうも性質が合いませんし、それ
 に何処か生理的にも違うてると見えまして、結婚してからほんとに楽しい夫婦生活を味お
 うたことはありませんだ。夫にいわずとそれはお前が氣儘なからだ。何も性質が合わん
 ことはない、合わさんようにするよつてだ。己の方は合わすように努めてるのんに、お前
 がそういう心がけにならんのがいかん。世間の夫婦でそない理想通りに行てゐるのんあれへ
 んで。ハタから見たら円満のようでも、内情知つたら不平のない奴あるもんか。己らかて
 人が見たら羨ましいように見えるかも知れへんし、一般の標準から思たら實際幸福の方か
 も知れん。お前は世間知らずのいとはんやよつて、自分で自分の幸福が分らんと何や彼や
 贅沢ぜいたくいうのんや。お前みたいな人間はどない申分のない夫持つてもこれなら満足やいう
 時あれへんで。と、いつもそないいうのんですけど、私は夫の世の中悟りしましたような
 諦めたあきらような物のいい方が氣に入りませんよつて、あんたはちつとも煩悶はんもんなんかしたこ
 とないように見える、あんたという人は人間らしい所ところあれへん、と、そういうて攻撃する

のんです。夫の方では私の性質に合わすように努めてるのんですやろけど、それがほんまに気持がびちつと合うのんでうて、こつちを子供扱いにして、ええ加減にあやしてるように思われますのんで、そういう態度が癪しやくに触つて仕方あれしません。あんた大学では秀才やったそうやさかい、あてみたいなもん定めし幼稚に見えるやろけど、あてから見たら化石みたいな人やわ、というてやった事もあります。いったいこの人の胸にはパッションというものがあるのかしらん？ この人でも泣いたり怒おこつたりびっくりしたりする事あるのかしらん？ 私は冷静な夫の性格にやるせない淋しさ感じたばかりやのうて、いつの間にやら一種のわるさじみた好奇心抱いてましたのんで、それがこの前のことや光子さんのことや、いろいろの事件惹ひき起す元になったのんです。

その八

でも前の事件の時分は結婚して間もないことで、まだ処女時代の純真さ持ってましたから、今よりはうぶで、氣イ小そうて、夫に済まんいう心持強いでしたけど、その手紙にも

ありますように今度はさっぱりそんな気持ちになりませなんだ。わたしかつて、ほんまいうたら夫の知らん間にたと苦勞しましたのんで、だんだん擦れて、ずるうなつてたのんですが、夫にはそれ分らんと、いまだに子供や子供や思てます。わたし最初それが口惜しいてなりませんでしたが、口惜しがるとな馬鹿にしられるので、ようし、向が子供や思てるのんなら、何処までもそう思わして、油断さしてやれ、と、次第にそんな氣イになりました。うわべはいかにもやんちや装うて、都合の悪い時はだだこねたり甘えたりして、お腹の中では、ふん、人を子供や思てええ氣イになつて、あんたこそお人好しのぼんぼんやないか。あんたみたいな人欺すぐらいじツきやわ、と、嘲弄するようになって、しまいにはそれが面白うて何ぞいうとすぐ泣いたり怒鳴ったりして、自分ながら末恐ろしいなるほど芝居するのんが上手になつてしもて、……先生なんかこんなことよう分つておられますやろけど、ほんまに人間の心理いうもん境遇によつてえらいえらい変りようするもんですなあ。前でしたら時に依つてははつと思て、ああ、こんな事するのんやなかったと、後悔する氣イになりましたのんに、今では反抗的に、なんじや意氣地のない、これぐらいのこと恐がつてどないすると、自分で自分の臆病あざわらうようになるなんて、……それに、夫に内証で外の男愛したら悪いやろけど、女が女恋いするねんよつてかめへ

ん。同性の間でなんぼ親になったかて夫がそれとやかくいう権利あれへんと、いつもそんな理窟つけて自分の心欺あざむいてました。その実わたしの光子さんを思う程度は、前の人思うたのより十倍も二十倍も、……百倍も二百倍も熱烈やったのんですけど、……

わたしがそない大胆になったもう一つの理由は、夫は学生時代からそれはもうお話にならんキッチン屋のガリガリ屋で、それを父から見込まれましたくらいやのんですから、ほんまに常識一点張りの、ちよつとでも変ったことや普通のことと違ちがてることは分らん人やのんで、わたしと光子さんとの間柄なんでも、なかなか感づかんやろう、やっぱりただの仲好しや思てるやろうと、たかくつてましたのんです。初めは夫もそんなことあるやろうとは夢にも想像してませんでした、そのうちにだんだん、なんやけつたいやなあ思うようになりましたのんですやろ。そらそのはずで、前には学校の帰りがけに事務所い寄って夫誘いましたのんに、近頃ではひとりで先い帰ってしまう。そんで三日に一遍ぐらいはきつと光子さんやつて来なさつて、二人で長いこと閉じ籠こもつてる。モデルに使うねんいうてるけど、何してんのか、何日たつても絵工出来上らんし、おかしい思うのんあたりまえやのんです。「なあ、光ちゃん、この頃あの人ぼんやり氣イつき出して来たよつて、用心せんとあかんねん。今日はあてがあんた所ところい行くわなあ」いうて、わたしの方から光子さん

の家い出かけることもありましたが、……はあ、学校でイヤな噂うわさあつたのんは市会議員の中傷やいうこと分りましたのんで、光子さんのお母さんはちよつとも私疑しぎごうてなされしませなんだ。わたしも信用落したらいかん思て、訪たねるたんびにお母さんの機嫌きげん取つてましたのんで、「柿内の奥さん奥さん」いうて、「ええ友達ともだちが出来てよろしおますなあ」いうてなさつた。それくらいですよつて、毎日ほど遊びに行ても電話かけても差支さしつかいあれしませなんだけど、……お母さんの外にその手紙にある梅つぎいうお附おなごしゆの女子衆おなごしゆもいますし、いろいろハタ眼があるもんですよつて、わたしの家のような訳には行きません。

「あてとこやつぱりあかなあ。折角お母ちゃんが姉ちゃん信用してはんのに、下手へたなことしてしもたら厄介むじやさかい」いうて、「そうそう、宝塚の新温泉どうやる？」と、光子さんがいい出しなさつて、二人で向むこい行て家族風呂い這入はいりながら、「姉ちゃんずるいわ、あての裸ばつかり見せてくれ見せてくれいうて、自分のんちつとも見せん癖に。」「あてずるいことないねんけど、あんたがあんまり白いよつて恥かしいねん。あんた、こんな黒い体見ても愛想尽かさんといてなあ」いうたりしましたが、わたしほんとに、自分の肌初はだめて光子さんに見せた時は、一緒に並ぶのんイヤな氣きいしました。光子さんは色が飛び切り白いだけでのうて、体の釣合つりあいよう取れてて、姿がすらツとしてなさるのんで、それに

比べたら、何や急に自分の体無細工ぶさいくに思われて来て、……「姉ちゃんかつて綺麗やないかいな、あてとちつとも変れへんもん」いわれますと、しまいにはそれを真まに受けて何とも思わんようになりましたけど、……初めはわたし身がちぢむように感じました。

それであのう、その前の日曜に夫と二人で母いちごがり狩かりに行たことが光子さんの手紙にありますでしょう。その日は実はまた宝塚に行きたいなあ思てたとこい、「どうや、今日は天氣ええよつて鳴尾なるおい行てめえへんか」いわれましたのんで、あいさには夫の機嫌取つてやれ思ひまして、イヤやなあ思ひながら出かけたのんですけど、魂は光子さんのところ飛んで行てしもて、ちよつとも興乗のりりませなんだ。恋いしさが募つれば募るほど、なんやかやと話しかける夫がうるそうて、腹立たしいて、ろくさま返事もせんと一日ふさぎ込んでましたよつて、その時からもう夫の方は一ぺん懲こらしてやらんならんと考えたらしいのんです。けど例に依つてなんや浮かん顔してるだけで、喜怒哀楽をなかなか面へ表わさん人やもんですから、わたしの方ではまさかそない怒らしたとは氣きイつけさせなんだ。そして夕方帰つて来ると、留守に電話かかったいうのんで口惜くやしいて口惜くやしいて、夫や家の者たちにぶんぶん当り散らしました。そしたら明るる朝光子さんから恨みの手紙来ましたよつて、すぐ電話で打ち合わして、阪急の梅田で落ち合うて、学校い行かんと、そのまま宝

塚い行てしもて、それから一週間ほどずうツと一日も欠かさんと宝塚い行てたのんです。そうそう、さっきのあの写真、それはちょうどその頃に揃そろいの着物出来ましたのんで、二人で記念に撮とったのんですが、……そして、蕁狩そうりに行た日から五、六日たつてからやつたか知らん、或る日二階でいつものように話してると、三時過ぎ頃に女子衆おなごしゅが慌あわてて段梯子だんば駈かけ上つて来て、「旦那さん帰つて来やはりましたでエー」いいますのんで、「えー、なんでやろこんな時分に！」と、えらいまごついてしもて、「光ちゃん、早はよいいでわ！」いいながら、二人ともけつたいな顔して下い降りて行たことありましてん。夫はその間に洋服をセルの単衣物ひとえものに着かえてしもてまして、わたしたち見た瞬間ちよつとイヤな顔しましたが、すぐ平氣になつて、「今日は僕なんにも仕事なかつたのんで事務所早退はやびきして来てん、お前らも学校怠なまけててんなあ」いうて、「お茶でも入れて何ぞうまいお菓子ンでも出さんかいな、お客さんもあるし、……」と、それなり三人で無駄話しながら何事ものう済みましたけど、その時うっかり光子さんが私のこと「姉ちゃん」いうてしもたのんではつとしました。「あんた、あてのこと『姉ちゃん』いわんと『園ちゃん』いうてくれた方がええなあ、つい口癖になつてしもて誰の前でも出るよつて」と、わたししよつちゆういうてましたのんですけど、そういうといつも光子さん氣イ悪うして、「イヤや、

イヤや、そんな水臭いことあるもんか、姉ちゃんはあるに『姉ちゃん』いわれるのん嫌か？」いいなさって、「頼むさかい『姉ちゃん』いわして！ あて、人のいるときつときつと氣イつけるよつて！」いうてなさつたのんですが、とうどそこで出てしたのんです。

そんで光子さんが帰ってしまいなさつてから、夫も私も奥歯に物挟はさまったような工合ぐあいでした。それからその明るる日の夕方、晩御飯たべたあとで、「僕、どうもこの頃のお前の素そ振ぶり腑ふに落ちんねんけど、何ぞ訳あるのん違ちがうか」いうて、ふと思いついたように尋たねますのんで、「腑ふに落ちてどういう工合に？ うち、自分で一向氣きいつかんけど」いうてやりますと、「お前、あの光子いう児ことえらい仲ええようやけど、一体あの児こどない思てんねん？」いうのんです。「うち、光子さん大好きやわ、そやよつて仲好ようしてんねんわ。」「好きは分つてゐる、どういう意味で好きやねん？」「好きいうことは感情やもん、理由やかいあれへんわ。」——わたし、弱み見せたらいかん思て、故意に挑戦的に出てやりましたのんで、「そうお前みたいにぽんぽんいわんと、もつと落ち着いて分るように話したらええやないか」いうて、「好きにもいろいろの意味があるし、——学校でそんな噂うわさあつたりしたんやさかい——誤解受けたらためにならん思うよつて尋たねてんねん」いいます。「万が一そんなこと世間い聞えてみいな、あの児こよりお前が責任あんでエ。お前の方

が歳上^{としうえ}やし、夫のある身イやし、……そしたらあの児の親たちに対しても申訳立たんやないか。お前だけやない、僕かつて黙って見てたいわれたら、後日になってどないもないやうない。」わたしは夫のいうこと一々胸にこたえましたけど、それでも強情張^{きやう}って、「もう分つてる、うち、そんな、友達のことまで何や彼や干渉されるのん嫌^{きら}いやわ。あんたはあんたで好きな友達持ったらええし、うちはうちで勝手にさしといて欲しいわ。うちかつて自分の責任ぐらい知つてまッせ」いうてやりました。「ふん、そら、普通の意味の友達やったら僕は決して干渉せえへん。そやけど、毎日のように学校休んだり、夫の眼工をかすめたり、こそツと人の居^いん所^{ところ}い閉じ籠^{こも}つたりするようなんは、健全な交際とは認められん。」「へえ、あんた、おかしいこというねんなあ。そんなけつたいな想像するなんて、あんたこそ下等やないか。」「もしほんとに僕の方が下等やつたら、なんぼでも詫^{あやま}る。僕はなるべく僕の想像中^{あたま}らんように祈つてる。けど、お前は僕を下等やいう前に自分の良心に訴えてみる必要ないのんか。自分にちよつとも疚^{やま}しいとこないいえるのんか。」「なんでまた今日そんな事いい出したん？　うちは光子さんの顔好きやさかい、それ元^{もと}で友達になつたいうことは、あんたかつて知つてるやないか。あんた自分で、そんな綺麗な人やつたら会わしてくれいうたやないか。誰かつて綺麗な人好きになるのん当り前やし、女同

士の間やつたら美術品愛するのと同じやんのに、それ不健全いうたら、あんたの方がもつともつと不健全やわ。」「そやかつて、美術品愛するのんやつたら何も二人だけで閉じ籠らんと、僕のいる前でもええはずやが、……いつでも僕が帰つて来ると、お前ら妙にモジモジしてるのんどういふ訳や？ それに第一、きようだいでもないのんに『姉ちゃん』やの『妹』やのいふのんから、氣に入らん。」「あほらしい！ あんた女学生間のことちよつとも知らんねんなあ。誰でもみんな仲のええもの同士やつたら、『姉ちゃん』や『妹』やいふのん珍しいことあれへんわ。そんなこと不思議がんのん、あんたぐらいなもんやわ」その晩は夫もなかなか負けてませなんだ。いつもやつたら私が少しだだ捏ねたら、「しようのない奴^やツちやなあ」いうて、ええ加減にあきらめてしまいますのんに、イヤにねちねち追窮して「うそついてもあかん、僕ちやあんと清^{きよ}に聞^きいてるねん」いうて、絵工書くためでないのん分つてゐる、一体何してるのんか、はつきり説明してみいいいます。「そんなこと説明の限りやない。絵工画くいうても本職の絵かきがモデル使^{つか}て製作すんのんと違^{ちが}うねんもん、どうせ遊び半分やよつて、そないきつちりと真面目^{まじめ}くさつてばっかりもいられへん。」「そんなら二階使わんかつて、下の部屋でしたらええやないか。」「使ても悪いことあれへんやんか。——あんた、一ぺん絵かきのアトリエい行て絵工画^かくところ見て御覽、

本職の人かつて製作するのんにそないむずかしい顔ばかりしてセツセとしてるもんあれへんわ。——休み休み気分の動くのん待つようにして画かんと、ええもん出来^でへんよつてなあ。」「お前そんなえらそうな口きいて、いつぞ一ぺん絵工出来上るつもりかいな。」

「出来る出来んはうち問題にしてえへん。光子さんいうたら顔ばかりやのうて、それもう体じゆう顫^{ふる}い着きたいように綺麗やさかい、観音様のポーズしてもろてそれじいと眺めてると、絵工画かんかつて何時間でも見飽きせえへん。」「あの児はそないして、何時間でもお前に肌見られてて平気やのんか？」「そらそやわ。女が女に見せるねんもん羞^はかしいことあれへんし、誰かて自分の肌褒^ほめられて悪い氣イせえへんやんかいな。」「ななば女同士やかて昼^{ひる}日^{ひなか}中若い女が裸になつたりして、お前らまるで氣違^ぎい沙汰^{ざた}やな。」

「うちあんたのようにコンヴェンションに囚^{とら}われてえへんよつてなあ。——あんた、映画女優の裸体見てつくづく綺麗やなあと感じたことあれへんか？　うちやったらそんな時ええ景色見るのんと同じようにうつとりとして何ちゆうことなしに幸福な、生きがいある感じして来て、しまいには涙出て来んねん。『美』の感覺のない人に説明したかて分れへんやろけど。」「そんなことが『美』の感覺と何の關係あるもんか、そら変態性慾や。」

「あんたこそ頭古いねん。」「馬鹿いいな！　お前は年中しようむない恋愛小説ばかり

読んでるよつて、文学中毒起してんねん。」「うるさいなあ、ほんまに」いうて、私が取り合わんと横向いてしまうと、「一体あの光子いう児も真面目なお嬢さんとは受け取られへん。少し常識のあるもんやつたら、人の家庭へちんにゆう 闖入して平和破壊するようなことする訳あれへん。あらかつと性質ええことない児やで。あんなもんと附き合うてたらお前も今に迷惑するでエ。」——自分のことよ好きな人のこといわれた方がどないに口惜しか知れんもんで、この光子さんの悪口が出ると思わず識しらずむかッとしました。「何やのん、あんた！ あんた何の権利あつてうちが大好きやいう人のこととやかきうのん？ 光子さんほど姿と性質のぴちツと合つた人、世界じゅう捜したかつてまたとあれへん。あんな心の清い人、人間やあれへん、観音様と同じこツちや。悪口いうたら勿もつたい体のうて罰ばちあたるわ！」「それ見い！ そんなこというのんが正気の沙汰やあれへん！ 氣違いのいい草や。」「あんたこそ人間の化石や。」「お前いつの間にや立派な不良少女になつてしもてんなあ。」「どうせうち不良やよつてなあ。——そんなこと昔から分つてんのんに何でそんなもんと結婚しなはつてん？ あんた、うちのお父さんに洋行費出してもらいとうてうち貰もらいなはつたん？ きつとそうだツしやる！」なんぼ人のええ夫でもこんだけいうたら見る見る額に青筋立てて、「なんやと、もう一ぺんいうてみい！」と、珍しいことに

大声で怒鳴りました。「ふん、何べんでもいうたげるわ！ あんたは男らしいもない、お金が欲しいとうちと結婚してんやろ！ 卑怯ひきしょうもん」途端に夫がむくツとすわり直した思たら、なんやシューツと白い物飛んで、カチツと後の壁に当りました。夢中で首ちぢめたのんで私は何ともありませんだが、灰皿取つて投げ付けたのんです。夫が仮にも私に対して手工上げるなんぞいうことは今まで一ぺんもなかったのんで、かっと興奮してしもて、「あんたうちがそないにまで憎いのんか！ うちの体にカスリ傷でもさしたらお父さんにいうたげるさかい、それ承知やつたら叩たたくなど殺すなど勝手にしなさい！ さあ殺して欲し！ 殺していうたら！」夫は「馬鹿！」いうたなり、半狂乱に泣きわめいてる私の姿あき呆あきれて眺めてるだけでした。

夫も私もそなり口ききませんで、明くる日一日睨にらみ合いつつけて、晩に寢室い這入ります時もやつぱり黙ったままでしたが、夜中ごろに夫がくるりと向き直つて、肩い手工かけて、私の体を自分の方へ向け変えようとしますのんで、しられる通りにしながら眠ったふりしてますと、「ゆうべは僕もちよつといい過ぎた。そやけどそれもお前を愛してる結果やいうことはお前も分つてるやろ。僕は態度が無愛想やよつて冷淡なように見えるけど、心は冷淡と違うつもりや。僕に悪いとこあつたら出来るだけ改めるようにするさかい、お

前も僕の意志尊重してんか。僕は決して外の事には干渉せん、ただあの光子いう児とは今後交際せんといってくれ。何卒^{どうか}それだけ約束してくれ。」「イヤや」と私は、眼エつぶったまま強う首振りしました。「それがイヤやったら交際するだけは仕方ないよって、あの児をこの部屋い入れたり、二人だけで何処やかし行かんようにしてくれ。そんでこいからは家出るにも帰るにも僕と一緒にするようにしてくれ。」「イヤや」と私はまた首振りしました。「うち、自分のすること束縛されるのイヤやねん、絶対自由にしてほしいわ。」そういうて私は夫の方い背中向けてしまいました。

その九

一旦破裂してしもたからにはもう恐^{こわ}いことあれへん。どないなつたかて構うもんかと、反動的に一層光子さんが恋しなつて、明くる日早速学校い飛んで行きますと、なんでやその日イ姿見^めえしません。電話かけると今日は京都の親類い行きなさったいわれましたのんで、なおのこと会いと思うにつけても昨夜の喧嘩^{けんか}のこと胸一杯に込み上げて来て、夢中

で手紙書いてしもたんですが、出してしもてから、あんなこと書いて光子さんだない思うかしらん？ 姉ちゃんのハズさんに済まんさかいあて遠慮しようない出しなされへんか思て、急にまた気がかりになりました。ところがその明くる日、運動場のプラタナスの蔭に待つてますと、人目も構わんと「姉ちゃん」いいながら駈^かけて来なさつて、「あて今朝^さあの手紙読んでなあ、姉ちゃんの顔見るまでは心配で心配で、……」と、両手で肩にぶら下るようにしなさつて、下からじつと私を見上げて、涙をためてなさるのんです。「ああ、光ちゃん、あんたかつて口惜^{くや}しやろなあ、うちの人にあんなこといわれて……」いうてるうちに私も涙をぼろぼろこぼして、「あんた氣イわるしてんのん違う？ そやったら堪忍なあ、あてあんなこと書かんといたらよかつてんけど」いいますと、「あてそんなこと、いうてんのん違う。自分のことやったらどないいわれてもかめへんけど、姉ちゃんはハズさんにそないいわれたらきつとあてがイヤになれへん！ なあ姉ちゃん、きつと、きつと、イヤになれへんか？」「あほらしいもない、そんなやつたら昨日もあんな手紙書いたり電話かけたりするかいな。あて、もうこうなつたらどんな事あつたかてあんたと別れるもんか。ぐずぐずいうたらあんな人ぐらい放^ほり出してやるわ。」「姉ちゃん今はそういうてるけど、今にだんだんイヤになつて来て、やっぱりハズさんの方愛するのん違うか

しらん？ 夫婦いうたらみんな何処どこでもそういうもんやいうよって、……」 「あてあんな人と夫婦やあれへん。あてはマドモワゼルやもん。光ちゃんさい承知やったら、もしもの時は二人で何処いでも逃げて行くわ。」 「まあ、姉ちゃん！ それほんまかいな？ きつと、きつと、うそ違う？」 「うそやないとも！ あてもうちやあんと覚悟してるわ。」 「あてかつて覚悟してるわ。姉ちゃんあてが死ぬいうたら一緒に死んでくれるなあ？」 「死ぬわ、死ぬわ、光ちゃんかつて死んでくれるなあ？」 —— そんな工合で二人の間はその喧嘩けんかがあつたためになおのこと深刻になりましたけど、夫は匙さじ投げたんかそんなり何もいいませなんだのんで、こつちはいよいよ凶に乗って大胆になるばかりでした。 「もう、うちの人あきらめてしもてるわ、ちよつとも遠慮みたいなんすることあれへん。」 —— 私がそういうもんですよって、光子さんもだんだんずうずうしなりなさって、二階にいる時夫が帰つて来ましても 「姉ちゃん階下したへ行つたらイヤや」 いうて、自分はもちろん私さえ階下いおろそうとしなされしません。どやすると晩の十時十一時頃までも遊んでなさって、 「姉ちゃん家い電話かけてほし」 いうて、私からお母かあさんを電話口い呼び出して 「今夜は家で晩御飯をたべなさって何時頃に帰りはりますよって」と、その時分にお梅おなごいう女子衆しゅに自動車で迎いに来てもらいます。御飯も二階で二人だけでたべたこともありまし

たけど、夫がひとり手持無沙汰にしていますので、「どやのん、あんたもお相伴^{しょうばん}しやはれへんか」いいますと、「ふん、してもええ」いうて三人でたべること多いでしたが、もうそんな時に光子さんは平気で「姉ちゃん姉ちゃん」いいます。私と話しとうなると、^{よるよなか}夜夜中でも電話りんりんかかって来ます。「何んやのん、今時分？ あんたまだ起きてんのん？」「姉ちゃんもう寝たん？——」「そやかかって二時過ぎやないかいな。——^{ねむ}睡たいわア、あて、——ええ気持ちで寝てたとこを——」「えらい済んまへんなあ、折角仲好うしてはつたとこを、——」「あんた、そんなこといいにわざわざ電話かけたん？」「そらハズさんのある人はええやろけど、あてはひとりぼっちやよって、淋しいて淋しいて何時になつたかつて寝られへんわ。」「しょうむない人やなあ。——^{はよ}だだ捏ねんと早寝なはれ、あした遊んだげるさかいなあ。」「あて、あしたの朝起きがけに直ぐ姉ちゃんとい行くさかい、ハズさんが遅うまで寝てはつたら、^{はよ}早起してさっさと追い出してしてもてエな。」「ふん、よっしゃ、よっしゃ、——」「きつとやなあ？」「ふん、ふん、分つてる、分つてる」いうて、そんなたわいないこと電話口で二、三十分もしやべつてます。手紙なども内証で遣り取りしてたのんだんだんおおびらになって、光子さんから来ましたのん読みさしのまま机の上などい放り出します。——^{もつと}尤も夫は人の手紙を偷み^{ぬす}読みするような人

間と違いますよって、それは安心してましたけど、それでも前には読んでしもたら急いで
 筆筒たんすの抽出ひきだしい入れて鍵かぎかけといたんですのんに。

そないにして、夫の方もいずれまた一と波瀾はらん持ち上ること分つてましたが、さしあたり
 前より都合ようになつたくらいですよって、私はますますのぼせてしもて、情熱の奴隷とな
 つてしもたのんですが、その最中に、私に取つてまるきり寝耳に水の事が、——もうもう
 ほんまに、夢にも思いがけなんだ事起つたのんです。それいうのんがちょうど六月の三日
 のことでした。おひる頃に光子さんが来なさつて、夕方五時ぐらゐまで遊んで帰りなさつ
 たあと、夫と二人で晩御飯たべてしもたのん八時で、それから一時間ほどたつて、九時ち
 よつと過ぎた時分に、女子衆が、「大阪から奥おく様に電話かかつてます」いうのんで、
 「大阪の誰やねん？」いいますと、「誰ともいやはれへんけど、大急ぎで電話口までい
 てはります」いうのんです。「もしもしどなた様さんですか」いいますと、「姉ちゃん、あて
 ——あてや」いうのんが、光子さんより外にそないいようする人はないのですけど、
 それが電話が遠いのんか、小声でいうてるのんか、聴き取れんぐらゐかすかやのんで、何
 や誰ぞにわるさでもしられてるような氣イして、「あんた誰ですねん？ はつきり名前い
 うて頂ちやうだい戴、何番い電話かけなさつたん？」と念押しますと、「あてやわ、姉ちゃん、

あて^{にの}西宮^{のみや}の一二三四番へかけてんねんわ」と家の電話番号をいう声が、聞いているとや
 っぱり^{まぎ}紛れものう光子さんで、「……あてなあ、今大阪の南の方にいるねんけど、えらい
 目に^お遭うてしもて、……着物盗まれてしもてん。」「何^{なん}やて、着物を？……あんた何して
 たん？」「あてお風呂い^{はい}這入^{はい}つててん。……此^{ここ}処^こなあ、南^{なん}地^ちの料理屋で、内にお風呂ある
 よつて。……」「ふうん、なんでまたそんなとこ行てたん？」「そらいろいろ訳あるね
 んけど、……こないだから^ぜ是非^ひ姉ちゃんに聞いてもらわんならん思ててんけど、……ま、
 その話あとでゆつくりいうよつて、……あて今えらいえらい難儀^{なんぎ}してるよつて、……どう
 ぞ助ける思て、あのさつき着てた揃^{そろ}いの着物なあ、あれ大急ぎで届けて欲しいねん。」
 「そんならあんた、あれからずうツと大阪い廻つてたんか？」「ふん、そやねん。」「あ
 んたそこに誰といるのん？」「そら姉ちゃんの知らん人やねん……あてどないしてもあの
 着物なかったら今晚家い帰られへんよつて、どうぞどうぞ一生のお願いやさかい、あれ届
 けてもらわれへんかしらん？」——光子さんは泣き声出してなさるのんですが、私は私で
 あんまり意外やつたんで、胸がわくわくして、^{ひざがしち}膝^{ひざ}頭^{かぶ}までガタガタふるえが来しました。
 何^{どこ}処^こまで届けたらええのんかいいますと、南の太左衛門橋筋^{たさえもんばしすじ}の、笠屋町^{かさやまち}の井筒^{いづつ}いう家や
 いいますねんけど、そんな料理屋聞いたことありません。そして着物の外に帯も、帯留も、

帶上げも、幸いみんな揃いのものがあつたんで、それ持って来てくれというのんは分るのですが、けつたいなんは腰帶やぼてや、伊達巻だてまきや、足袋たびまでも盗まれたいうのんで、「そんなら半襟はんえりは？」いいましたら、「襦袢じゆばんは助かつてん」いうのんです。誰ぞたしかな人に持たして、今から一時間以内、おそても十時までにありますけど、うかつとした者頼む訳に行きませんし、どないしても私が自分で自動車飛ばすより仕様があれしません。「あてが行つてもかめへんか」いいますと、誰ぞさつきからもう一人電話口に付き添うてるあんばいで、それがときどき光子さんに「こないせエ、あないせエ」と指図さしずしてるらしいて、「いつそこないなつてしもたら姉ちゃんが来てくれたかつてええし、……そうと違ふかつたら、お梅が今頃梅田の駅で待つてるはずやよつて、あれに渡してくれたかつてええけど、お梅は所知らんよつて頼むのんやつたらよう場所を教おせてほし。そんでこつちの名は鈴木いうて訪たンねて来てほし。」——そこでまた何ぞこそこそ相談するらしいて、暫しばらくたつてから、「あのなあ、姉ちゃん、……」と、えらいいいにくそうにして、「……あのう、えらい済まんけどなあ、も一人着物ないようにして困てる人あるねんけど、もしどないぞなるねんやつたら、あんたのハズさんの着物、洋服でも日本服でもかめへんよつてなあ、……」いうて、「それからあのう、えらいえらい勝手ばかりいうて申訳ないねんけど、

……おあし二十円か三十円持つて来てくれたらなおのこと有難いねんけどなあ」いうのんです。「おあしの方はどないぞなるけど、まあとにかく待つてなはれ」いうて電話切つてもてから、直ぐに自動車いつけて、夫には「うちちよつと大阪まで行て来ま。光子さんが急用やいやはるさかい」とたつたそれだけいうて、二階い上つて大急ぎで箆笥の中から揃いの着物や何やかんやと、夫が余所行きよそゆの時着る絹セルの単衣ひとえと羽織しほと絞りの三尺とを出して、風呂敷に包んで、それ女子衆に持たして先いそつと玄關まで出さしましたが、「なんやいな今時分からそんな包持つて？」と、さすがに夫は氣になつたらしゅう、自動車い乗ろとする時に奥から出て来ていうのんです。多分私の様子が慌あわてもいましたし、顔色も變つてたですやろし、不斷着のまま髪も直さんと出て行ことするのんが、よつぽどけつたいやつたのんに違いないので、「なんやうちにもさっぱり様子分れへんねんけど、今夜急にこの揃いの着物なあ、——」と、私は知つて風呂敷の結び目から着物の端出はしして見せて、「——これどないしても着んならんことが出来たんで、大阪の店まで届けてほしいうてやんねえ。何ぞ素人芝居しうとでも始まつたんかも分れへんけど、うち自動車待たしといて直ぐ歸つて来るわ」いうて、もう時刻もおそなつてしもてまして、九時二十五分ごろでしたよつて、最初は真つ直ぐ南の井筒いう家い行こ思て出たのんですが、それよりもまあ

梅田い行てお梅どん掴^{つか}まいて見よ、お梅どんに聞いたら何ぞこの訳分るかも知れへん思て、梅田の駅い行て見ますと、まん中の入り口のところ立って待ちどしそうにキヨロキヨロしてますよつて、車の中から手招きして、「お梅どん」と、「やッ、奥様だしたんかいな」とびつくりして照れくさそうにウロウロしてますのんを、「あんた光ちゃん待つてんねんやろ。今えらい事件起つて、光ちゃんから大急ぎで迎いに來てくれいう電話あつてん、あんたも早乗^{はや}んなさい」というて、「えー、ほんまだつかいな」と何や腑^ふに落ちんらしいうぐずぐずしてるのんを無理に乘せて走らしながら、車の中で手短かにさっきの電話の話して「なあ、いったい誰やのん、その一緒に行てる男いうのんは？ お梅どん知れへんのかいな？」——初めのうちは困つたような顔して、言葉に詰まつてましたけど、「あんた知らんいうはずないやろ？ こんなこと今日だけと違うやろ？ うちどんなことあつてもあんたに迷惑かかるようなことせえへんよつて、いうてくれたらお礼は何ぼでもするよつて、——」と、眼の前い十円札出して、紙に包んで、「いえ、いえ、いつもいつも貰^{もら}てばっかりしてまんのんに」と辞退するのんを、「そんなこというてる間に時間立つてしまうやんかいな」と帶の間い押し込んでやりますと、「わたし、奥様と一緒にそんなとこい迎いに行てもよろしおまんねんやろか。あとでとうちゃんに叱^{しか}られしまへんやろか」とい

のんです。「何でやのん？　うちが行けへんかったらお梅どんに来てくれいうてやねんぐらいやもん。」「ほんまにそんな電話かかりましたんだっしやるか？　わたし何やこう心配で、……」それいうのんが、何ぞ私の計略に乗せられへんか思てるらしいのんで、「そんなことあるもんかいな、電話懸^からなんだらうち知ってるはずないやんか。」「そらそうでおますけど、わたし今までにちよつとも奥様氣イついてやおまへなんだのんが、なんでだっしやる思て、空恐ろしいて仕方おまへんでしたのんで、……」「ふうん、そしたらいつからこんな事あつたん？」「いつからいいまして、もう早^はから……四月頃からでおましたやろか、それは私にもはつきり分れしめエなんだが、……」「誰やのん、相手の人は？」「それもよう分れしめへんねん。いッつもおあしくれはりまして、これで活動でも見て、何時頃梅田い来て待つててやいやはりますよつて、何処い行きはりまんのんやさつぱり分らんと、こらきつと何処ぞで奥様と会うてはりまんねんやろ思てましてん。家いおそう歸りましても今日は今まで柿内さんとこで遊んでたようにいえいやはりまんのんで。……」

その十

「そんなこと今までに何べんくらいあった？」「何べんいいましても、とても勘定しきれしめエん。今日はお茶のお稽古けいこや、今日は柿内さんとこやいやはりまして出かけはりまんのんで、そのつもりでお供して行きますと、あのなあ、あてちよつと用事あんねんいやはりまして、えらいそわそわしやはりまして、ひとりで何処ぞい行てしまやはりますねん。」

「それほんまに違いないなあ？」「何で私が嘘うそいまツしやる。——奥様ちよつとも氣いおつきやあれしめエなんだんでつか？ 何ぞ今までにけつたいやなあお思いになりやしたことあれしめエんでしたか？」「そろもうちは阿呆あほうやよつて、そない散々さんざん利用しられて、道具に使われて、踏みつけにしられながら、今の今まで此処ここから先も氣いついたことあれへなんだ。それにしてもまあ何んちゆうことやろ。——」「ほんまに、わたいとこのとうちゃん恐ろしい人だすよつてなあ。……私いつかて奥様の顔見るたんびにえらい済まんような氣いして、お氣の毒でお氣の毒で、——」と、心から同情したようにいうてくれますのんで、そんなお梅どんみたいなもん相手にしたかつてしようむないのんですけど、あんまり口惜くやしいてお腹なかの中引つくりがえるようになってましたよつて、何でも彼かんでも思ふたことをいう氣いになつて、「なあ、お梅どん、あんたかつて察してくれるやろ。う

ちそんなこと夢にも知らんと、こないだからうちの人と喧嘩してまで光ちゃんのために尽してるねん。うちかつてこないにまで上^{のぼ}つてえへんだら、なんぼ脳味噌^{のうみそ}足らんいうたかつて、いつたい何ちゆう氣イやろ？ 人馬鹿にするのんもほどがあるし。「ほんまに何ちゆう氣イでいやりまんねんやろなあ？ よつぽど困りはりましたん違いまツしやろか？」
 「なんぼ困つたいうたかつて、好きな男と料理屋行てるやのお風呂い這^{はい}入つたやのと、そんなこといえた義理かいな、あんたまあ考えてみて欲し！」「それもそうでおまツけど、着物盗まれてしまいはったんでは、裸で帰りはることも出来しめへんしなあ。……」「うちやつたら裸で帰る。あんな恥知らずな電話かけるぐらいやつたら、裸で帰る。」「こんな時に泥坊^{どろぼう}に遇^あうなんぞ、悪いこと出来まへんもんだなあ。」「やつぱり罰^ばツちや。それもお金^{ちん}だけと違^{ちが}て、二人とも素ツ裸にしられてしもて、腰帶から足袋までもないようになるなんぞ、……」「そうでおま、そうでおま、罰でおまツせ。」「ああ、ああ、こんな事に使^{つか}お思て揃いの着物こしらえたん違^{ちが}うのんに、……うち何処まで馬鹿にしられてるねんやろか。」「とうちゃんはまだ、今日あ^けの着物着て行きはつたいうのんはほんまに運が強^{つよ}おまんあ。奥様迎いに行つたげへん、どうなと勝手にせえおいやして構わんとお置

きやしたら、どないなりましたやろか?」「うちかつてよっぽどそないしたげよ思てんけど、最初はさっぱり何のこツちや様子分れへんし、電話口で泣き声出してはあはあいうてやよつて、ただもうびツくりしてしもてん。それになんぼ憎たらし思てもやつぱり心から憎む氣イになれへんさかい、裸でふるてやる姿眼工の前にチラついて、可哀^{かわい}そうで可哀^{あほ}そうでもないも立つてもいられへんようになって、……そらお梅どん、ハタから見たら阿呆^{あほう}らしやろけど、そんなもんやし。」「そらなあ、そうでおまツしやろとも。……」「それにどうやろ、自分のもんばかりか男のもんまで持つて来いいうたり、電話口でこそそこそ相談し合うたり、まるで人に見せつけるような真似^{まね}シして、どんな顔してそんなこといえるのんやろか。人の前では『姉ちゃん姉ちゃん』いうて、『あて姉ちゃんより外に自分の肌見せたことない』いうてたくせに、二人裸にされてる恰好^{かっこう}見てやりたいわ。」「もうその時は無我夢中でいろんなことをしやべつてましたよつて、何処を走つてたのんか分れしませなんだが、堺筋から清水町辺を西い曲つたらしいて、向うに心斎橋筋の大丸^{だいまる}の灯^ひがちらちらしてたのん覚えてますけど、そこを大丸の前まで行かんと、太左衛門橋筋南い曲つた思うとこで、「ここ笠屋町ですが何処い着けます」と運転手がいいますよつて、「何処ぞこの辺に井筒いう料理屋あれへんかしらん?」いうて捜しましたけど分れしません。その

辺の人にきいてみますと、「そら料理屋違いまッしやろ、宿屋でつせ」いうのんで、「何処です」いいますと、「じつきこの先のろうじの奥だ。」——それがあのう、宗右衛門町、や心齋橋筋のつい裏通りですのんに、わりに人通りのない暗い横丁なんでして、芸者の館やの、小料理屋やの、宿屋やのが多いのですが、そういう家がみなしもたやのようひつそりとした間口の狭い地味な構えなんです。そこで教せられたろうじの入り口に行てみますと、「御旅館井筒」と小そうに書いた軒燈が出てますのんで、「お梅どん、あんた此処で待つてでわ」いうて私だけ這入って行て、旅館いうても何や曖昧なややこしい家らしいのんがろうじの突きあたりにあるのんで、格子あけて暫くもじもじしてまして、台所の方で誰や一所懸命に電話かけてるらしいて、なんぼ呼んでも出て来えしません。「今晚は」「今晚は」と大きな声でいうてるうちにやつとのことで仲居さんが出て来まして、顔見るなりこつちがなんにもいわん先にちゃんと心得てる様子で、「どうぞお上り」いうて狭い段梯子を二階い連れて行きました、「迎いのお方はんがお越しになりました」いいながら座敷の襖開けるのんです。這入てみますと三疊ぐらいな次の間やのんで、二十七、八の色の白い男の人がたった一人畏まってすわってまして、「失礼ですが、光子さんの友達の奥さんですか」いいますよつて、「そうです」いいますと、急にしやち

こ張つてぺたツと畳い頭擦りつけて、「今夜の事は何と申し上げたらよいか、お詫^わびのし
 ようもないのんです。いずれこの事につきましては光子さんから申訳せんなりませんの
 んですが、何とも合わす顔ないいうておられますし、それに着物ありませんので、まこと
 に申しかねますけどもとにかく着換え貸してもらて、その上でお目にかかりますよつてい
 うのんです。その男^{まゆげ}いうのんが、いかにも光子さんの好きそうな輪郭の整うた女のような
 綺麗な人で、眉毛^{まゆげ}のうすいのんと眼の細いのんがこすそうな感じ与えますけど、私かつて
 見た瞬間に「美男子やなあ」思たぐらいな顔だちで、この人も着物ないはずやのんに縞^{しまめ}
 銘仙^{いせん}の単衣^{ひとえ}を着てキチンとしてましたのんは、あとで聞きましたのんですが宿^{おとこしゅ}の男衆
 の着物を一時^{いっとき}借つてましたんやそうです。「着換えは此処^{いただ}い持つて来ました」いうて
 風呂敷包渡しますと、「大きに済みませんことです」と押し戴^{いただ}くようにして受け取つて、
 部屋の隅^{すみ}の方の境の襖^{ふすま}あけて奥の座敷い包押し込むと、急いでまたそこ締めてしもたのん
 で、ちらツと枕屏風^{まくらびょうぶ}風が見えただけでしたけど。……

その晩のことそんなふうに一々^{くわ}委しいにいましたらえらい長うになりますのんですが、
 私はその場合届けるもんは届けてしもたし、それに男がいるのんやったら会うてもしよ
 うがない思て、お金三十円紙に包んで、「先イ帰りますよつてこれ光子さんに上げて下さい」

いうたのんですが、「まあ何卒どうぞそないおいにならんで待って下さい、今に出て来られますから」いうて、無理にその男が引き留めるのんです。そうして改まって私の前いきなり直しながら、「実はこの事は、ほんまは光子さんから申さんなんのんですが、僕は僕の立ち場として説明せんなん思いますのんで、一往いちおう聞いて下さいませんか」いうて、——つまり光子さんは自分でやといいにくいもんですよって、着物着換えてる間にその男が代って話するように、段取りがきまつてたらしいのんです。そんでその男、——ああ、そうそう、男はその時「財布を取られてしまったのんで名刺ありませんけれど、僕は船場せんばの徳光さんの店の近所にあります 綿貫わたぬきえいじろう栄次郎 いうもんです」いいました。——その綿貫いう男の話聞いてみましたら、その人と光子さんとは、まだ光子さんが船場の方に住んでなさる時分、去年の暮頃から愛し合うようになって結婚の約束までしたいうのんです。ところが今年の春になってMの方との縁談が持ち上つて来て、とても二人は結婚出来そうにもないようになつたのんですが、それが同性愛うわさの噂のためにええあんばいに破談になつた。——まあそういう意味のことというて、しかし決して自分たちは奥様を利用したと違う、初めは利用したような形になつたけど、光子さんはだんだん奥様の情熱に動かされて、自分を愛するよりもっと熱烈に奥様愛するようになったよって、自分の方がどれぐらい嫉し

妬^{つと}感じたか分れへん、利用しられたとしたら自分の方がしられてるぐらいやいうのんです。それで自分はお目にかかるのんは始めてですが、奥様のことはしよっちゅう光子さんから聞いてた。同じ恋愛でも同性の愛と異性の愛とはまるきり性質違うよって、奥様との仲は許してもらわんと、自分との仲も続けて行く訳にいかんように光子さんいますのんで、自分も近頃は諒^{りようかい}解^{かい}してた。「あての姉ちゃんかつて夫あるねんもん、あてもあんたと結婚することはするけど、夫婦の愛は夫婦の愛、同性の愛は同性の愛やよって、姉ちゃんのこと是一生よう思い切らんさかいそのつもりでいて頂戴。それがイヤやったら結婚せえへん」と、いつでも光子さんはそないいうてるいまして、「そら光子さんの奥様に対する気持ちうたら、全く真剣でしてなあ」いうたりして、大馬鹿^{すき}にしてる思いましてんけど、その男のいいいうたら実際上手で、五分の隙^{すき}もないようなんです。それで男は自分と光子さんとの関係をいつまでも私に隠しとくのんはええことない思て、自分も諒解^{りようかい}してるねんよって私にも諒解^{りようかい}してもらうよう光子さんに話してたのんですが、光子さんかつて勿論^{もちろん}その方がええこと分ってながら、今更私の顔見ると切り出しにくうなつて「折^おがあつたら折があつたら」思てるうちに、とうとう今夜のようなこと出来てしもた。そうしてさっきの電話では盗難^おに遇^あうたようにいうたけど、実はただの盗難ではない。着物を取

ったんは泥坊と違ちがうて博奕ばくちうち打やいうのんです、それがだんだん聞いてみますと、ほんまに悪いことは出来できへんもんで、その晩その宿屋の別の座敷で博奕ばくちしてるもんあって不意に手工が廻まわったんやそうですが、刑事がどやどや踏み込んで来たのんで、二人はびつくりして夢中で部屋跳とび出して、光子さんは長襦ながじゆばん袴はかまのまま、男は寝間ねまき着のまま、屋根から隣りの家い逃もげて物干ものほしの床の下いもぐり込んだ。博奕ばくち打った連中も我われ先さきにバラバラ逃げ出して、大抵上手に逃げてしもたところが、その中に逃げおくれた夫婦者あって、廊下をうろうろしてるうちに光子さんの部屋が開いてたのんで、そこい逃げ込んでみたら、ちやうど二人が抜け出たあとやった。それでこれはしめた思おもて、今度はその夫婦もんが密会者みたいに装ちかうてた。というのんは、同じ刑事でも博奕ばくち打検挙するのんと密会者検挙するのんとは係けいりが違ちがてるんやそうで、その人たちはそれを心得てたらしいのんです。けど刑事かつてそれぐらいなこと分わつてますよつて、その夫婦もん怪あやしいと睨にらんで勾こう引いんしたんやそうですが、その時枕もとの乱れ籠かごに入れてあつた光子さんと綿わた貫ぬきの着物着て、そのまま警察い連れて行かれた。なんでかいと、夫婦は宿屋の浴衣ゆかたを借かつて博奕ばくち打ったところいそういう騒さわぎになつたのんで、自分らの着物に向うの部屋にありますねんけど、何処どこまでも密会者で通とそうとするのんで、枕もとにあるのん着て行かんならんかった。そん

で光子さんたちはやつとのことで逃れたものの、戻って来たら、着物が無い、財布や手提げぐらいそうツと置いてくれたらええのんにそれもない、宿屋の主人まで挙げられてしもて誰に相談しようもないし、帰るにも帰られへんし、それにもう一つ心配なんは、光子さんの手提げの中には阪急の定期券が這入ってましたし、男の方も名刺入れてあったんで、警察から家の方いい電話かかったらえらいこつちやいうのんで、どうにもこうにも思案に暮れて私呼び出しましたんです。で、どうせ此処まで来てくれはる親切あるねんやつたら、奥様かって光子さんのため思てくれはるねんやろよって、御迷惑でもこれから蘆屋まで光子さん送って行つたげて、今夜一緒に映画でも見てたようにいうて、万一警察から電話がかかっても、そこを何ぞうまいこというてくれなされへんかいのんです。

その十一

「なあ奥様、今夜のことさぞかしお腹立ちですやろけど、どうぞどうぞお願いします。」
 そういうて男はまたぱたツと畳い頭擦りつけて、「僕の一身はどないなつても構いません、

どうぞ光子さんを無事に送ったげて下さい。御恩は一生忘れません」いうてしまいいは手
 工合わして拝むんです。わたいいうたらそもうほんまにお人好しですよって、そないし
 られてしもたら何ぼあんまりや思ても「イヤヤ」いう訳に行けしません。それでも口惜くや
 さが一杯でしたよって、暫しばらくの間男あいだがペコペコお辞儀するのんじいツと黙もくって睨にらみつめ
 ましたけど、とうど根負こんまけしてしもて、たツた一と言「よろしいです」いうてしまいまし
 た。すると男は「ああ」とさもさも感激の籠こもったような芝居じみた声出して、もう一ぺん
 頭擦こすりつけて、「ああ、承知して下さいますか、ほんまに有がとございます、これで僕も
 安心です」いうて、それから人の顔色窺うかがうように、「そしたら唯今ここの光子さん呼びま
 すけど、それについても一つお願いして置きたいのんは、今夜のそこはいろいろのことで
 えらい興奮してはりますのんで、どうぞなんにもいわんといて欲しいんですが、どうで
 か、それ暫ちこてくれはりますか？」いうのんです。仕方ないのでそれもよろしいですいま
 すと、直ぐに「光子さん」と呼んで、「もう分つてくれはりましたよって出て来なさい」
 と襖越ふすましに声かけました。その襖の向うでは最前さいぜんこそそこそ着物着換えてるらしい物音が
 してましたのに、もうその時分にはしーんと静まり返つてしもてて、こっちの話に一所懸
 命耳を澄ましてるようでしたが、声かかってから二、三分もたった頃にやっと襖がござッ

いうて、そこが少しずつ、一寸二寸ぐらいずつ開いて、眼工の周り真つ紅いけに泣き脹らした光子さんが出て来ました。

その時どんな顔してなさるか見てやりたい思たんですが、ちらツと視線打つかと慌て俯向いて、男の蔭に寄り添うように音もささんとすわってしまいなさったんで、脹れ上った眼瞼と、長い睫毛と、高く通った鼻筋と、噛みしめてなさる下唇とが見えるだけで、両手をこういう風にこう、——八つ口のところい突つ込んで、体をねじらして、前のはだけたのも直さんと身イ投げ出したようにしてなさるんです。それで私は光子さんのそのうしてなさる姿眺めてるうちに、ああこの着物が揃いの着物やってんなあ思うにつけても、それを拵えた時分のことや、その着物着て一緒に写真撮ったりした事が考え出されて、またジリジリ腹立つて来て、ええ、こんなもん、拵えんといたらよかった、いつそ飛び着いてずたずたに引き裂いてやるか知らんと、——ほんまに男がいエへんかったら、それぐらいなことしたかも分れしませんねん。男はその様子感づいたらしいて、二人がなんにもいわん先に「さあさあ」と追い立てるようにして、自分も着物着換えるやら、私からお金を受け取って宿屋の方では「いりまへん」いうのん無理に勘定済ますやら、「あ、そう」と奥様、まことに恐れ入りますけど、今のうちに奥様のお宅と光子さんのお宅とい電

話かけといて下さいますと、なお都合よろしいですがなあ」いうたりして、ちよつとも隙^{すき}与えんようにするのんでした。私は私で家の方が心配でしたよつて、「うち今直^じツきに光子さん送つたげて帰るけどなあ、光子さんとこれから別に何ともいうて来やはれへんかったか？」と女子衆^{おなごしゆ}呼び出して聞いて見ますと、「はあ、さつき電話がおましたんで、どない申し上げてええのんか分れしまへなんだよつて、何時頃とも申し上げんと、ただお二人さんで大阪い行つておいでですいうときました」いうんです。「そんで旦那はんもう寝やはったか?」「いいえ、まだ起きてはりますせ。」「今すぐ帰りますさかいいうといてんか」いうて、光子さんの家の方へは「今夜松竹い行きましたんですけど、あんまりお腹減^{なか}つてしもたんで、出てからちよつと鶴屋食堂い行きましたん。えらいおそなりましたよつてこれから光子さん送つて行きます」いいますと、お母^{かあさん}様が出て来なさつて「まあ、そうでおまツか、あんまり帰りがおそいのでたつた今お宅様い電話したとこでしてんわ」いいなさる様子が、警察からなんにもいうて来てエへんこと確かでした。そんでそんならええ塩^{あんばい}梅^はや、一刻も早自動車^{はよ}で帰ろいうことになつたんですが、男は三十円のうち半分ばつかり残つたをみんなその男衆や女子衆にやつてしもて、どんな事あつても決して迷惑のかからんようにして欲しい、その筋からこれこれいう取り調べがあつたらこれこれい

うようにいえいたりして、そないな時にもそろもうびつくりするほど細かい所い氣イ廻るのんです。それからようよう、——私はそこい着きましたんが十時ちよつと過ぎた時分で、一時間ばかりぐずぐずしてしまいましたよつて、出たんは十一時過ぎでしたやろう。その時やつとお梅どん待たしたあッたん思ひ出して、「お梅どんお梅どん」いうて、ろうじを往ったり来たりしてるのんを車い乗せたのはよろしいが、「僕も其処^{そこ}まで送りましよう」いいながら、男も平氣でその車い乗り込んで附いて来るのんです。光子さんと私とが奥の方い並んで、お梅どんと綿貫とがスペアシートい腰かけて、四人がむうツと向い合うたなり一と言も口をきかんと、車はどんどん走つて行きました。武庫^{むこ}の大橋いかかったときに男が始めて、「どないします？ やつぱり電車で帰つたようにせんと工合^{ぐあい}わるい思います、……」と、ふつと考えついたようにいい出して、「なあ、光子さん、何処で自動車返したらええか知らん？」いうのんでした。それが光子さんの家いうのんは蘆屋川の停留所から川の西をもつと山の方い行つて、あそこに汐見桜^{しおみざくら}いう名高い桜あるついその近所なんでして、電車筋からほんの五、六丁ですねんけど、途中に淋しい松原などあるのんで、よう追^おい剥^はぎやの強姦^{ごうかん}やのがあつたりしてえらい物騒ですよつて、いッつも晩おそう帰るときにはお梅どんが附いてるときでも停留所の前から俥^{くるま}に乗つて行きますさかい、

あそこまで自動車着けたらええいうたり、いや、そらいかん、俵屋が顔知ってるよって何処ぞもつと手前の方で降りた方がええいうたり、そんなことからお梅どんもぼつぼつものいい出しましたけど、それでも光子さんだけはやつぱり一と言もいいなさんと、ときどきさし向いに腰かけてる綿貫の方をジーツと見つめては、何やひそひそ眼工で物言うて溜^ためいき息してなさるようなんです。すると男が「ふん、そんなら国道の業平橋^{なりひらばし}のところで降りたらよろしいがな」と、同じように光子さんの顔見返しながらそういい出したというのんは、私にはよう分ってるのんですが、あの橋の所^{ところ}から阪急の線まで出る路がまたえらい淋しいて、片ツば側が大きな松のたあんと生^はえてる土手ですよって、あんな所女^{とこ}三人で歩けるはずあれしません。そんで綿貫はちよつとでも長いこと光子さんと一緒にいてたいのんで、自動車降りてからあの路を送って来たいのです。それにしても「船場の徳光さんの近所^{きんしよ}にあります」いうてたのんにそんな橋の名アやあの辺の路知ってるいうのんは、もう今までに何遍も二人で此処^{へん}ら辺散歩したことがあるからなんです。私よつぽど「誰に見られても男の人が附いて来るのんが一番わるい、三人だけやつたらどないでも言^い訳^{わけ}立つよって、あんたええ加減に帰んなさい。私に預けるいうときながら、あんた帰ってくればれへんねんやつたら私帰ります」いうてやろか知らん思たんですが、お梅どんの方は「それがよろ

しおまんなあ」「そうしまよなあ」と何でも彼でも綿貫のいうことに調子合わして、「そんならお気の毒ですけど、阪急のとこまで送って戴^{いた}けまっしゃるか」と、知って男の思う壺^{つぼ}に嵌^はまって行くのんです。考えてみるとお梅どんかってやつぱり光子さんや綿貫とぐるになつてたん違いなんので、やがて橋のところで車降りて土手の下の真っ暗な路いかかりましたら、「なあ奥様、こんな闇夜^{やみよ}に男の人いてくれはれしまへんなんたら、恐^こうて歩かれしまへんなあ」と、用もないのんに私^{つか}掴^{つか}まえて、こないだこの路で何処^{どこ}其^{そこ}処^このとうちやんがこんな目工に遭^あいはつたいうような話休みなしにしかけて、なるだけあとの二人より離れて歩くようにするのんです。二人は五、六間うしろの方からまだ何や知らん相談しながら来るらしいて、「ふん」とか「はあ」とかいふ光子さんの声がかすかに聞えてるのんです。

停留所の前で男が帰ってしましますと、また三人は黙^{くる}り込んで、あそこから俾^まで光子さんの家まで行きました。「まあ、まあ、ほんまに、何でこないにおそおましてん」いいながらお母様が出て来なさつて、「いつもいつもお邪魔に上りまして御厄介になりますばかりで」と、えらい私に氣の毒がつていろいろお礼いいなざるのんですが、こっちは私も光子さんもけつたいな顔してますのんで、長いことしゃべってたらぼろ出る思て、自動車

呼びましよういってくれはりますのんを「いいえ、俾待たしてあります」と逃げるように出て来まして、また阪急で 夙川^{しゆくがわ}まで後戻りして、あそこからタクシーで香櫨園^{かうろえん}まで帰って来ましたら、ちょうど十二時になってました。「お帰りやす」いうて玄関い出て来た女子衆に「旦那はndonないした？ もう寝やはったか？」いいますと、「ついさっきンまで起きていやりましたけど、もうちよっと前お休みになりはりました」いいますのんで、まあよかった、なんにも知らんと寝てくれたらええ思いながら、出来るだけそうツとドア開^あけて、忍び足で寢室い這^{はい}入^いつてみますと、寢台の傍のテーブルに白葡萄酒^{しろぶどうしゅ}の壺置^{びん}いたあつて、夫は頭から布団被^{ふとんかぶ}つてすやすや寝てるらしいのんです。お酒には極く弱い方で、寝しなにそんなもん飲むいうことなんぞめったにあれしませんのんに、きつと心配の余り寝られへんのんで飲んでんやな思て、静かな寢息乱さんように恐る恐る横になりましたけど、なかなか寝られるどころやありません。考えれば考えるほど、口惜^{くや}しさと腹立たしさとが何遍でも湧^わき上^あつて来て、胸の中が搔^かきむしられるようになります。ええ、もうほんまに、どないして復讐^{ふくしゅう}してやるか、どんな事あつてもきつとこの讐取^{かたき}つてやる、と、思うと同時にかつとなつて、夢中でテーブルい手工伸ばしてグラスに半分ほど残つてた葡萄酒ぐうツと一と息に飲み乾^ほしました。何しろその晩はさつきからの騒^{さわ}ぎでえら

い疲れてましたところいきして、私かつて不断ちよつとも飲んだことあれしませなんだよ
 って、見てる間に酔い廻つて来て、——それもええ心持にぼうツとなるのんと違て、頭が
 破れるようにがんがんにして、胸のあたりがむかつて来て、体じゅうの血イ一遍に髪の毛
 の方い上つて来るような氣イするのんで、はあはあ苦しい息吐きながら、「ようもようも
 みんなで大馬鹿にして、今にどうするか見てたらええ」と、口い出していわんばかりに
 一途にそのこと考えつめてますと、激しい動悸が、樽の口から酒がこぼれるような音立て
 てどきんどきん鳴ってますのんが自分にもちやんと分るのんですが、氣イついてみますと
 いつの間にやら夫の胸も同じようにどきんどきんいう音立てて、はあはあ熱い息吐いて、
 互の呼吸と動悸とが一緒に時を刻みながらだんだん強うなつて行つて、二人の心臓が一時
 に破裂せエへんか知らんと思われた途端に、いきなり私は夫の腕でぎゅうツと抱きしめら
 れました。次の瞬間に夫のはあはあいう息が一層近よつて、燃えるような唇が耳たぶに触
 れて、「お前、よう帰つて来てくれたなあ——と、そないいわれたはずみに、どうした
 加減か急に涙がこみ上げて来て、「くやしいツ」と、身イふるわして泣きながら、今度
 はこつちからしがみ着いて、「くやしいツ、くやしいツ、くやしいツ」と、夫の体掻きむ
 するように揺さ振りました。「何や、何でそない口惜しい？」夫は出来るだけ優しいに、

「え？ 何が口惜しいのかいうてみい、泣いてたら分れへんがな、え？ どないしてん？」
いうて手のひらで涙拭^ふいてくれて、なだめたり、すかしたりしてくれますので、なお悲し
ゆうなつて、あーあ、やっぱり夫は有難い、自分は罰^{ばち}中^{あた}つたんや、もうもうあんな人の
こと思い切つて、一生この人の愛に縋^{すが}ろう、——と、一途^{いちず}に後悔の念湧^わいて、「うち今夜
のことみんないうてしまうさかい、きつと堪忍しとくなはれなあ」と、とうど夫に今まで
のことすっかり話してしまいました。

その十二

私はすっかり心入れかえた氣イになつて、明るる朝は夫より二時間も早起^{はよ}きて、台所い
出^でて行^いつて朝御飯の用意したり、夫の洋服ちゃんとしといたり、いつもほったらかしたま
ま女子衆まかせにしときますのんを、自分が先い立つてせつせと働きました。「お前、今
日は学校い行^いけへんのか」と、夫は出かける時間になつて鏡の前でネクタイを締めながら
いいましたけど、「うち、もう学校は止め^やよ思^{おも}てんねん」いうて、うしろから上衣着^{うわぎ}せた

げて、そのままそこに、脱ぎ棄^すてた着物たとみながらすわってました。「なんでやねん、
 学校止めんでもええやないか?」「あんな学校行つたかつてしようむない。……会いとも
 ない人と顔合わすのんイヤやしなあ。……」「ふん、そうか、そんなんやつたら止めても
 ええなあ」と、夫は感謝の籠^{こも}つた眼つきでそういうたものの、またなんや知らん物足らん
 ような、気の毒そうな恰好^{かつこ}で、「そやけど、なんにもあんな学校に限ったことあれへん、
 絵工習いたかつたら研究所いでも行つたらどやねん? 僕かつて毎朝一緒に出かけた方が
 ええしなあ」いうてくれますねん。そんでも「うちもうどっこも出とないわ、何処行たか
 てどうせ口くなこと覚えへんねよつて」いうて、自分ではその日から一^{ひと}廉^{かど}のハウスワイ
 フになつたつもりで、一日家の中で一所懸命仕事しました。夫の腹の中いいましたら、あ
 ないに我が儘^{わまま}やつた私がまるで生れ變つたみたいに態度改めましたのんが、どない嬉しい
 か分れしません。いうてまた、二人で仲好う大阪^{かよ}い通てた先度^{せんど}ごろの生活を取り返してみ
 たいような氣イもしますねん。そら私かつてちよつとでも余計夫の傍に引つ着いてたい、
 離れたらその間に邪念妄想が起る、夫の顔さい見てたらあの人のこと忘れられるやろ思い
 ますよつて、一緒に着いて行きたいですけど、いや、そやない、もしひよつとして途^{みち}であ
 の人と会うたりしたら?……もうそんなことあつたかて物いエへん氣イやけど、そんでも

ばったり顔見合わしたらうちどうするやろ？ 青なつて、ぶるぶる顫て、一と足も出んようになつて、門で倒れてしまふかも分れへん思いましたら、外い出るのが恐うて、大阪どころやあれしません、つい電車路ぐらいまで行きましたかて、そやない人の影見てもはつと襲われたみたいに、慌てて家い飛んで逃げて、どきどきする胸おさえながら、いかん、いかん、ちよつとでも出たらいかん、ここ暫くは死んだ氣イになつてすツ込んでよ、水仕事でも拭き掃除でも何でも構わんと精一杯働いてよと、自分で自分にいうて聞かすのんです。あの筆筒の抽出しにしもてある手紙なんぞ焼いてしまお、それより一番さき観音さんの絵工の方でないぞしてしまおと、それも私には毎日ぐらい氣イになつて、今日こそ焼こ、今日こそ焼こと、筆筒の傍まで行きますけど、手工取つてみたら中が見となるやろな思たら、やつぱり恐うてよう開けませんねん。一日じゆうそないして暮らして、ゆうがた夫歸つて来ますと、「ほんまによかつた」とほつと重荷イおろします。「うちこのごろ朝から晩まであんたのことばかり思い詰めてて、ほかの事なんにも考エへんようにしてんねよつて、あんたかつてきつとそうしててくれるわなあ」と、私はぎゅツと頸のまわりに抱きついて、「うちの心にちよつとの隙も出来んように、いッつも、いッつも、可愛がりつづけに可愛がつてくれなイヤやわ」と、今では夫の愛情だけがたった一つの頼りでした。

「もつと可愛がつて、もつと可愛がつて……」と、私のいうのんはそればかりでした。或る晩なんぞは、「まだ愛しかたが足らん」いうて、氣違ひみたいに興奮しましたのんで、「お前は極端から極端やなあ」と、夫はなだめるようにいうて、私のあんまりな上せかたに今度はかいって面喰^{めんくろ}てるぐらいでした。

もしもその時分にひよっこりあの人^{たず}が訪ねて来たら、否^{いや}でも応でも物いわんならんようなハメになるよつて、それが何より氣がかりやつたんですけど、なんぼ厚かましいいうてもさすがよう寄り附かんかして、ええあんばいにあんなり何もいうて来^けえしません。私は心のうちに神様や仏様祈つて、結局運命がそんな工合^{ぐあい}になったのんを有難いことや思いました。ほんまに、あの晩のような出来事でもなかつたら、なかなかこない綺麗さっぱりと切れるいう訳に行けしませんのに、これも神様の思^{おぼしめし}召^めやろ、口惜しいことも悲しいことも済んでしもたことはみんな夢とあきらめよと、ようよう幾分か落ち着いて来ましたのんは、あれから半月も立つた六月の下旬ごろのことで、——去年の夏は空入梅^{からつゆ}でしたよつて、毎日々々日照りがつづいて、家の前の海岸に泳ぎに来る人がちよいちよい見えました。夫はいつも暇ですのんに、その時分珍しい頼まれた事件あつて、もうちよつとしたら手工^て抜けるさかい、そしたら何処ぞ避暑になど行こいうたりしてましたが、或る日私が台所で

桜ん坊のジェリーこしら抱えてる時でした、「大阪のSK病院から奥様おくさんに電話だす」いい嘛
 のんで、虫が知らしたのんか、何やけつたいに思いながら、「誰ぞ入院してんねやろ、も
 一ぺん聴いてみなはれ」いい嘛と、「いえ違います、病院が直接奥様に話したいいうた
 はります、男の人の声みたいだす」いうことで、「ふん、おかしいなあ」いうて電話口い
 出る時から、何でか知らん胸騒ぎして受話器を持つ手工妙に顫ふるてるのんです。彼方あつちでは
 「あんたは奥様ですか」と二へんも三べんも念押してから俄にわかに低い声になって、「突然
 甚はなはだ失礼ですが、あんたさんは英語の避妊法の本を中川さんの奥様にお貸しになったこと
 ありますか」とけつたいなこと尋たねます。「はあ、その本は私たしかに或る人に貸しま
 したけど、中川さんの奥様いう方はよう知りません。多分私から借った人が又また貸したん
 やろ思います。」そないいうと直ぐ、「はあ、はあ」と向むこではうなずいて、「奥様がお貸
 しになったのは徳光光子さんでしょうな？」いうのんです。私実さいはもう最前さいぜんから予期し
 てたものの、その名アいわれた瞬間に何や電気みたいなのが体じゅうビリビリ伝わるよ
 うな氣きいしました。はあ、その本といいますのんは、一と月ほど前光子さんに貸しました
 のんで、光子さんのお友達の中川さんの奥様いう人が子供生むのんイヤやイヤやいうては
 るいうような話から、「姉ちゃんうまはきつと巧い方法を実行してんねんやろなあ」いい嘛

よって、「ほんまいうたら、あてええ本持つてんねん。亜米利加^{アメリカ}で出版しやはった本で、それ見たらそもう何ぼ通りでも書いたあるわ」いうて、その時貸したげたまま忘れてしもてたんだした。ところが病院ではその本のことから或る重大な結果起つてえらい迷惑してる。電話ではそれ以上申し上げること出来んが、そのことについて中に挟^{はさ}まった徳光さんのお嬢様もいろいろと心配してはりまして、どうしても一ぺん奥様にお目にかかつて秘密に相談せんならん思て、こないだから何遍でも手紙差し上げたそうですが、奥様の方から何とも返事してくれはらんいうて難儀してはる。そこでこの場合、是非とも徳光さんに会^あうてみて下さい。病院の者が直^じかに伺^ううては面白^{おもしろ}ない事情がある。病院は表面^{おもて}ぞ知らん体^{てい}にして徳光さんと会^あうてくれはるのが一番よろしい。万一会^あうて下さらんと、病院はこの事件について奥様の方いどんな迷惑がかかっても一切責任負^おうこと出来んいうのんです。私はそれも光子さんや綿貫の仕組^だんだ計略で、なんぞまた人欺^{だま}すのんやないかと半信半疑でしたけど、何せその時分は墮胎^{だたい}事件がやかましいて、何々博士が掴^{つか}まえられた、何々病院がやられたと、ようそんな記事が新聞に出ましてん。そこで前にもいうたようにその本の中には薬剤^{やくざい}に依^よる方法やら、器具に依^よる方法やら、法律に触れるようなことまでたあんと書いたあるのんでして、中川の奥様いう人は何ぞへまなこととしてえらい間違^{まちが}い引き

起して、しろとの手工で収まり付かんようになったんで病院い担^{かつ}ぎ込まれたん違うやろかと、想像されるのんです。それに私は、光子さんから手紙が来てもきつと私に見せたらいかん、みんな焼いてしもてくれいうて、女子衆^{おなごしゅ}にいいつけてありましたもんデツさかい、そんな事件が起つてようとは今日までちよつとも知りませなんだ。病院の方ではえらい急^せいて、どうしても今日じゆうに会うてもらわなにかんいいます。電話で夫に相談しましたら、「そういうこつちやつたら会わんいう訳に行かんやろ」と、夫もいいます。それでとうとう承知した旨答えますと、これから直ぐに伺うように病院から光子さんの方いい知らすいうことになったのんです。

その十三

ところがその電話のありましたのが二時頃のことデ、それから三十分もした時分にもう光子さんが来やはりましてん。私はまた、なんぼ病院が急^せいてたかて、いッつも出る時には一時間も二時間も寔^{やつ}しやはるよつて、どないしても来るのは夕方か晩ぐらいになるや

ろ、まさかこないに早いとは思ひもよりませなんだのんに、門のベルがジイジイ鳴って、上り口のコンクリの上踏む草履ぞうりの音が、……玄関から奥の間まですっかり開け切っておりましてよつてすうツと表から吹き込んで来る風と一緒に、なつかしい香においが廊下つと伝て来ますねん。あいにく夫はまだ帰つて来てませんし、立ち上ったまま何処ぞ逃げ道でも捜すみたいにうろうろしてますと、取次に出た女子衆がバタバタ走つて来て、「奥様おくさん！ 奥様！」いうたなり顔の色変えてるのんで、「分つてる、分つてる、光子さんやろ」いいながら自分で玄関い出て行ことして、「あの、ちよつと、ちよつと、……」と誰を呼ぶのか分らんこといいながら、「あの、……ちよつと待つとくなくなはれいうて、下の八畳い通しという」といい附けというて、二階い上つて寢室のベッドの上で暫く動悸しぱちのしずまるのん待つてから、やつと起き上つて、顔色隠すために頬ほお紅べに少し濃いめにつけて、白葡萄酒一杯飲んで、思ひ切つて降りて行きましてん。

わたしは仕切りの簾すだれの向うに派手な模様がチラチラして、ハンカチで汗をおさえながらすわつてはるらしい姿見ると、もうまた胸がどきんどきんいうて来ましたが、光子さんの方でも簾越しにこつち見てなさつて、這入はいつて行くのん待ち構えたように、「今日は」いうてニコニコ笑いなさるのんです。「あて、姉ちゃんにあんまり御無沙汰してしもて、悪

いとは思ってんけど、あれからあとにいろいろな事あったりして、……それに姉ちゃんあの晩の事どない思てはるねんやろ、きつと腹立ててはれへんやろか思たら、つい鬨しきいが高なつてしもて、……」と、遠慮しいしいこつちの顔色うかごうてはそないいいなざるのんが、やっぱり馴なれ馴なれしい昔の口調で、「なあ、姉ちゃん、あんた今でも怒ってなはんの？」と、私の眼工の中を覗のぞき込みなざるのんです。私は無理に「徳光さん」と改まって呼びかけて、「今日はそんなお話するつもりでお目にかかったんと違います」いうてやりましてん。「そうかて姉ちゃんがあの時のこと堪忍したげるいうてくれへんなら、あてかて話出来でへんもん。」「いいえ、いいえ、私は中川の奥さんのことについてS K病院から頼まれましたさかい、そのことだけ聞くように夫の許し得たあるのんです。そやよつてに何卒どうぞその外の話はせんといて頂戴。それからあのう、先度せんどのことはみんな自分が阿呆あほうだしてんよつて、誰恨んだり怒ったりすることあれしませんけど、あんたも今更わたしのこと『姉ちゃん』やなんていわんといて頂戴。そうでないと、私ここにいられへんようになりますさかい。……」、そないにいうと今度はさすがに萎しおれ返つて、うつむいたまま縄なわのように捻ねじくつたハンカチをぐるぐる指に巻きつけながら、思わせぶりに涙ぐむような風して見せて、そんなり物をいいなされしませんねん。「あんたかつて、めつたにそんな話はなししに來

たんと違いますやろ？ さあ、用件の方聞かして頂戴。」「あて、姉ちゃんにそないいわれたら、……」と、やっぱり光子さんは「姉ちゃん」いう言葉使て、「……いいたいことも胸につかえてしもてちよつとも出エへんねんけど、ほんまいうたら、さっきのあの電話のことなあ？……あれほんまは、中川の奥様と違いまんねん。」「ふーん、そんなら誰のことですねん？」——その時光子さんは眼工と眼工の間に皺しわを寄せてくすツとけつたいな笑いようをしたと思たら、「あてのことやわ」いうのんです。「そしたら、病院に入院してるいうのんは、あんたの事だつか？」——まあ、この人は、……何処まで厚かましいねんやろ！ 自分が綿貫の種宿たねしてどうにも始末に困つたのんで、またしてもうちを利用しに来るとは！ さんざん人に苦水にがみず飲ましときながらまだ足らんのか。——私は体じゅうが顫ふるて来るのんじつと押し鎮しずめて出来るだけ空惚そらとぼけて聞いてやりました。「ふん、そやねんわ」と、光子さんは頷うなずいといてから、「入院さしてほしいいうてるねんけど、入院さす訳に行かんいわれてんわ」と、なんや棲目つまめの合わんこというて、それからぼつぼつ話し出すのん聞いてみますと、あの私から借った英語の本見て幾通りもの方法やってみたところどが孰どれもあんじよう行かんらしいので、ぐずぐずしてたら人目につくようになって来るし、気が氣どでのうて、綿貫の知つてる人に道修町どしやうちの薬屋の番頭ばんとうさんあるのん幸い、その

本に書いたある処方に従うて、薬をもらて飲んだんやそうです。尤も番頭さんには事情を明かしたんやのうて、ただ必要な薬品だけもらて、それをええ加減に調合したのんで、間違うてたんかどうか、よんべ俄かに^{にわ}お腹痛^{なか}なり出して、お医者さん呼んでる間にえらい出血した。そんでお医者さんに訳話して、どうぞ家の者に内証でどないぞして欲しいいうてお梅どんと二人で頼みますと、出入りのお医者さんでんねけど、「難儀ですなあ」いうてためいきつくばかりで、「これはどうも私には困ります。きつと手術して出さんといかんでしようが、何処ぞ専門の病院で心やすい所があつたらそこ行つて相談して御覧。私は応急の手あてだけしときます」いうて^{てい}体よう逃げてしもたのんで、SK病院やつたら院長さん知つてるからどないなとしてくれはるやろ思て、今朝^{けさ}になつてから出かけて行つて診察してもらたら、そこでも同じこというてなかなか聴いてくれはれへん。なんでもそのの院長さんいうのんは今の病院建てる時に徳光さんのお父さんからお金出してもらはつたんやそうで、光子さんとお梅どんとで手工合わすようにして頼むと、「弱りましたなあ、弱りましたなあ」いうて、「前やつたらこんなぐらいのことは何処の医者でも引き受けたのんですが、御承知の通りこの頃は世間がやかましいのんで迂濶^{うかつ}なことすると私一人やない、お宅の不名誉になるような事起らんとも限らんのんで、そうなつたらお父^{とう}様^{さん}に對し

て申訳ありません。それにしても何で今まで放つといたんです、こないならんうちやつたら、——せめて一と月も前やつたらどないなとされたのに」いうのんですけど、そないしてるあいだも時々お腹痛なかとなつて出血するのんで、ここで何ぞの事でもあつたら病院に嫌疑んぎがかかりますし、そうかて苦しんでるもんを黙つて見てるいう訳に行かんし、「いったい誰に教おせてもろてどんな薬飲んだんかいうて下さい。それ聞いたかて出来るだけ秘密にはしときますけど、万一問題になつた場合にその人が証人にさいなつてくれたら手術したげる」いうもんですかい、私から本借つてこうこうしたいこと話して、私がいつつもその本の方法実行して目的達してるもんですから、自分もあんじよう行くやろと思たいようなことしやべつてしもた。そしたら院長さん暫しばらく考えてて、こないな事はお医者さんやのうても、経験のあるしろの方がかいって手軽うちうに埒うちようやれる、西洋の女やはこないこないして、人の手工借らんと自分で始末してしまうのんが常識みたいになつてさかい、私が熟練してるのんならいつそ私にしてみろたらええのやけどいうたりして、とにかく事件がむずかしなつても私が責任負うてくれたら手術したげる、それがイヤやつたら本貸したのんが災難やと思てどないぞしてくれたらどやろ。お医者さんと違ちがて私やつたら知れる心配も少いし、知れたとこで大した問題になれへんやろ。——そないいわれたんや

と、まあ光子さんはいうのんです。「なあ姉ちゃん、あて姉ちゃんにそんなことしてもらおとは思てエへんけど、こんなにしといたら時々痛み出してたまらんし、恐い病気になつたりすることもあるいわれたのんで、姉ちゃんが責任負ういうてくれたら手術してもらえるのんやけど、……」「責任負ういうたかつて、どないしたらええのん？」と聞いてみましたら、病院い行て、院長さんの前で誰ぞ第三者に立ち会うてもろて約束するか、そうでないのんなら後日のためにちよつと一と筆書いて欲しいいうのんですが、そんなことうつかり出来しませんし、それに光子さんのいうことが何処までほんまか、よんべ出血したいう病人が別に寔れたふうものうて出歩いてるのんもおかしいし、さっきの電話は病院で医局の人にかけてもろたいのんですけど、そんな人が中川の奥様の名ア騙るはずもなし、何ぞまた訳でもあるような氣イしてめつたなこといわれへん思てるうちに、「ああ痛、……また痛なつて来た」いうてお腹さすり出しなさつたのんです。

その十四

「どないしなはってん？」いうてるうちに見る見る顔が青なつて来て、「姉ちゃん、姉ちゃん、早便所い連れてエな」いいなさるのんで、どないな事になるのやらこつちも慌あわてて、畳の上這はい廻るようにしてはるのん抱き起すと、はあはあいいながら肩に凭よりかかつて歩きやはるのんがやつとですねん。私は便所の外に立って、「どうだんねん、どうだんねん」いうてましたが、呻うなりごえが段々しんどそうになつて、「うーん、くるしいッ、姉ちゃん！姉ちゃん！」いいますよつて、夢中で中い駈かけ込んで、「しッかりしなはれ！しッかりしなはれ！」と、肩撫なでたげて、「なんぞ下り物もんでもしたんかいな」いうと、黙もくつて首振うつて、「あて、もう死ぬ、死ぬ、……助けてほしい」と、ほんまに消えてしまいそうな虫の息で、「姉ちゃあん、……」と一と声大きく呼びながら、両手で私の手頸てくびにしがみ着きますねん。「こんなぐらいな事で死んだりするかいな、光ちゃん、光ちゃん」いうて力つけたげても、もう眼工見えんようにどろんとなった瞳ひとみ上げて、「姉ちゃんあて堪忍こらしてくれるわなあ。あてこないして姉ちゃんの傍そばで死ぬのんやったら本望やけど、……」と、そないにいうのんがちよつとぐらい狂言としたかつて、握つつてる手工次第に冷めつとなつて来るような氣きイしますし、そうかて「お医者はん呼んだげよか」いうても「姉ちゃんに迷惑めいわくかかるよつて呼んだらいかん、死ぬのんやったらこんなに死なして」いいますし、

……^{どつちみち} 執方道^{どつちみち} そんなりにしとかれしませんでしたので、女子衆^{おなごしゆ}に手ツ伝^とてもろて二階の寢室に運びましてん。なんせ、咄嗟^{とつさ}の場合ですよって布団敷^{ふだん}いてる間^まアもあれしませんが、寢室に入れるのんはどや知らん思たんですけど、下はみんな見透^{みとお}される夏座敷^{なげ}ですし、しよことなしにそないしたのんですが、ようよう寝台^ねい臥^ねさしてしもてから、直きに夫とお梅^{おとめ}どんとこい電話^{でんわ}かけに行^いことしますと、「姉ちゃん何処^{どこ}も行ったらいかん」いうて、袂^{たもと}をぎゆツと握^{にぎ}つたままちよつとの間も放^{はな}しなされしませんが、尤^{もつと}もそないしてらうちに幾分か落ち着^おいて来^きたらしゆう、もうさっきのように苦しがらんようになりはつたので、まあこの分^{ぶん}ならお医者はん呼^よばいでもよかったと思うと、その時だけはほんまにほつとして助^{たす}かったような氣^きいしましてん。

そんな工合^{こうがう}で私は傍離^{ぼうり}れること出来^でしませんよって、「お便所^{よじ}汚^{よご}れてるさかい直ぐ掃除^{そうじ}しといて」いうて女子衆^{おなごしゆ}下^{した}いやつてしもてから、何ぞ薬^{くすり}でも思^{おも}ひましてんけど、「いらん、いらん」と、イヤイヤしなさつて、「姉ちゃん帯^{おビ}ゆるめてエな」いいなさるのんで、帯^{おビ}ほどいたげたり、血^ちイの附^ついた足袋^{たび}脱^はがしたげたり、アルコールと脱脂綿^{だつしめん}持^もつて来て手^てエや足^{あし}拭^ふいたげたりしましたのんですが、そのうちにまた発作^{はつさく}起^おつて、「くるしいッ、くるしいッ、水、水、……」いいながらシーツや枕手^{まくら}あたり次第^{しだい}に搔^かきむしつて、体を蝦^{えび}のよう

に曲げて悶えなさるのんです。私はコップに水酌くんで来て、えらい暴あばれてて飲まされし
 さんのんを無理におさえつけながら口移しに飲ましたげると、おいしそうに喉のどをぐいぐい
 いわしながら、飲んでしまふとまた、「くるしい、くるしい」いうて、「姉ちゃん、後ごしよ
 生うやよつてにあての背中の上い載つてぎゅツと押してエな」いうたり、何処もを揉もんでほ
 しい、彼処かしこを撫なでてほしいいうのんで、いわれる通り揉もんだりさすったりするのんですけ
 ど、ちよつと直つたか思うとまた直ぐ「痛い、痛い」いうて、なかなか治まりそうもあれ
 しません。それで暫くでも楽になつたあいだには、「ああ、ああ、こんな苦しい目工めくに遇
 うのんもみんな姉ちゃんの罰ばちやなあ。……これで死んだら姉ちゃんかってもう堪忍かんなしてく
 れるか知らん」と、独りごとのようにいうてさめざめ涙流すのんです。それからまたして
 も痛いたなり出して、今度は前よりもつと苦しうにのた打ち廻まわつて、何や血かたまりの塊かたまりみたいなも
 んが出たらしいいうたりするのんですが、何遍も何遍も「出た、出た」いうたんびに調べ
 てみたかて、ちよつともそないな氣けエあれしません。「神経でそんな氣けイするねんわ、な
 んにも出てへんやないかいな。」「出てくれへなんだらあてもう死ぬわ。姉ちゃんはおて
 が死んだらええ思てんねんやろなあ。」「なんでそんなこというのん?」「そうかて、あ
 てにこんな地獄じごくみたいな苦しきとさんと、早はや樂らくにしてくれたらええのに、——姉ちゃん

んやったらお医者はんよりよう知つてくるくせに、……」そないいい出したいうのんは、いつや私が「ほんちよつとした器具さいあつたら何でもない」いうたことあつたよつてですけど、もう私にはさっきの「出る出る」いう騒ぎの時分から、今日のことがみんな狂言やいうことが分つてましたのんで、……ほんまいうたら、実はその前からだんだん氣イ付いて来てながら、知つて欺^{だま}されてたのんで、光子さんかて私が欺^{だま}されてる振りしてるのん見抜いてながら、何処までもずうずうしゅう芝居してはりましたん。そんで、それから先はお互が自分で自分欺^{あざむ}き合うて、……もうそんなこと、先生はよう分つてはりますやろけど、結局私は、見す見す光子さんの仕掛けた罠^{わな}い自分を落し込んでしまいましたん。……はあ、その赤いのんは何を使ったのんか聞かんとしまいましたんで、今でもときどき不思議に思いますのんですが、何ぞ芝居に使う血糊^{ちのり}のようなもん隠しといたのんと違いますやろか。……「姉ちゃん、そんならもうこないだのことちよつとも怒つてへんわなあ、きつと堪忍してくれるわなあ？」「今度こそ欺したらあてあんたを殺してやるわ。」「あてかてさっきみたいな薄情なことしられたんやったら、生かしとけへん。」——ほん一時間ぐらいのあいだにすつくり元の馴^なれ馴^なれしさに戻つてしまいましたのんですが、そうなると私は、急に夫の帰つて来るのが恐^{こお}うなつて来ましてん。一旦ああいふ訳になったのんが、よりが戻

つてみましたら、その恋しさは前より増して、もうちよつとの間も離れとないのんに、さしあたり、これから先、どないしたら毎日会えるねんやろか。「ああ、ああ、どないしよう。光ちゃん明日も来てくれるわなあ?」「此処の家うちに来てもええの?」「ええか、わるいか、もうそんなことあてに分らん。」「そんなら一緒に大阪い行けへん? 明日姉ちゃんのええ頃に電話かけるわ。」「あての方からも電話かけるわ。」「そないいうてる間に直じツきに夕方になつてしもたのんで、「今日はもう帰るわなあ、ハズさんが戻つて来やはるさかい、……」と、身支度しようとしなさるのんを、「もうちよつと、もうちよつと」いうて何遍も引き留めましてんけど、「まあ、やんちゃこ児やなあ、そんな分らんこというたらいかん、明日きつと知らしたげるさかい大人おとなしいして待つてなはれや」と、今ではあべこべに私の方がたしなめられて、五時頃に帰つて行きやはりましてん。

夫はその時分大概帰りが六時頃でしたけど、その日はいくらか心配して早はよ帰るか知らん思てましたのんに、やつぱりこないだじゅうからの事件が引き続いてると見えて、それから一時間ぐらい立つてもまだ帰つてけえしません。私はそのあいだに部屋片附けたり、寝台綺麗きれいに直したりして、床の上に落おつてた光子さんの足袋拾ひろて、——帰りしなに光子さんは私の足袋穿はいて行きなされたのんです。——そのしみの痕視あとみつめながら、まだ何や知

らん夢みてるみたいにぼんやりしてましてん。夫にどないいい訳しよう。この部屋使ったこと
 といおか知らん。いわんとか知らん。どないいうといたらこれから先会うのんに都合え
 えか知らん。……と、そんなこと考えてたら、俄かに「帰りはりましたで」と下から知ら
 しますのんで、足袋^{たんす}筆^{ひきだ}笥^{ひきだ}の抽出^{ひきだ}しいしもて降りて行きますと、「どうしたんや、さっきの
 電話のことは？」と、出会いがしらにすぐそないいうのんです。「うちほんまに難儀した
 わ。あんた何でもつと早^{はよ}帰^{かえ}つて来てくれへなんだん？」「僕^{ぼく}かてそう思^{おも}てたんやけど、生^あ
 憎^{にく}と用^{もち}が片附^{かたづ}かなんだのんで、……一体どないしたいいうのんや？」「何でも彼でも直^ち
 病院まで来てくれいうねんけど、そんなことしてええか悪いか分^われへんし、とにかく明日
 まで待つとくなはれいうたんやけど、……」「それで光子^いさん行^いにやはったんか。」「明
 日は非一緒に行^いつてくれいうて帰^{かえ}りはりましてん。」「お前^{まへ}があんな本貸^かすよつて悪いの
 やないかいな。」「誰にも見^みせへんいやはったよつてに貸^かしたげたんやけど、ほんまにう
 ち、えらい事^{こと}してしもたわ。まあ何にしても明日見舞^{みま}いに行^いてこう、中川^{まんざ}の奥^{おく}様^{さま}から満^{まん}
 更^{さら}知らん仲^{なつ}と違^{ちが}うし、……」私はそないいうて、何は放^{はな}つといても早速明日の口実^{こうじつ}を拵^{こしら}
 えましてん。

その十五

その晩わたしは夜の明けるのん待ちどしいて、八時に夫が出かけてしもたら、飛び着くように電話口い走って行きましてん。「姉ちゃん、えらい早いなあ、もう起きたん？」と、受話器通して聞えて来るのんが、昨日も聞いた声ですねんけど、眼工の前で聞くのんとは違^{ちが}たなつかしさにわくわくしながら、「光ちゃんまだ寝てなはったんか？」「あて今電話で起されてんわ。」「あてもういつでも出られるわ、あんたも直き出てくれへんか？」

「そんなんやつたら慌^{あわ}てて搾^{こし}えするよつて、九時半に梅田の阪急い来てくれへんか？」

「九時半に、きつとやなあ？」「きつとやとも」「今日は光ちゃん一日暇やねんわなあ？ 帰り遅^{おそ}なつてもかめへんやろ？」「かめへんとも」「あてもそのつもりで行くさかい」

いうて、ちよつきり約束の時間に行つてましたら、なかなか来なされしませんので、またいつもみたいに寢^{やつ}してなさるのんか思たり、欺^{だま}されたのん違^{ちが}うか思たり、自動電話かけみよとして、その間に行んでしまいなさつたら難儀や思て止^やめてしもたり、ひとりでジリジリしてますと、やつと十時過ぎに、「姉ちゃん大分待ったん？」いうて、改札口から

息せき切つて走つて来なさいましてん。「何処行こ？」「光ちゃん何処ぞええとこ知らん？——静かな、誰もいへんようなところで一日ゆつくりしてたいわ。」「そんなら奈良に行こやないか」いわれたのんで、ああ、そやそや、二人が始めて仲好^よう遊びに行つたのんも奈良やつた、あの思い出多い若草山のゆうがたの景色、……何で今までの記念の土地忘れててんやろ。「ほんまにええとこ思いついたなあ、また若草山に登ろなあ」いうて、ほんまにその時のうれしさいうたら、……感激した時の私の癖でもうちやんと涙ぐみながら、「早行^{はや}こ、早行こ」と急^せぎ立てて、大タクの案内人に手工取られてタクシーに乗るまでは、足が土に着けしませんねん。「あてゆんべから何処にしよう思ていろいろ考えて、奈良が一番ええ思てんわ。」「あてかてゆんべまんじりともせえへんねけど、いったい何考えててんやろ。」「あれからハズさん直き帰つて来やはつたん？」「一時間ぐらいしてからやつてん。」「どないいうてはつたん？」「もうそんなこと聞かんといてエな、今日は一日家のこと忘れてたいわ。」——奈良に着いたら直きに大軌^{だいき}の終点から乗^{のり}合^{あい}に乗つて、若草山の麓^{ふもと}まで行つて、何しろこの前の時と違^{ちが}て薄曇^{うすぐも}つた暑い日で行てんけど、びつしより汗掻^かきながら頂^{てつ}辺^{ぺん}まで登つて行つて、それから山の上にある茶店で休んでるうちに、前の時蜜柑^{みかん}転^{ころ}こぼしたりしたのん思い出して、ちょうど夏蜜柑売^うてるのん買^かうて、

二人でころころ転こぼしましたら、下にいる鹿がビックリして逃げますねん。「光ちゃん、お腹減つてエへんか。」「減つてるけど、もうちよつと此処にいてたいわ。」「あてかていつまでも山の上のにいてたい、なんぞお菓子ンでもたべて辛抱しとこう」いうて、昼御飯の代りに煮抜きたべながら、大仏殿の屋根から生駒山の方見てますと、「この前蕨や土筆たんと採ったわなあ、姉ちゃん」いうて、「もう後の山行ってもなんにも生えてエへんやろか。」「そら、今頃行たかてなんにもあれへん。」「そんでもこないだ行たときに行てみたいわ」いいなさつて、あれから後の山いつづく谷の方い下りて行きましたら、春でもあの辺はあんまり人の行かんとこですよつて、夏はなおさら淋しいて、木や草ばっかり仰山繁つてて、なかなかそんなとこ、一人やつたら来られへんような物凄い氣イするのんですけど、二人は結局誰も見てる者ないのんええことにして、草のぼうぼう伸びてる蔭に、それこそほんまに、大空の雲よりほかに知ってる者のない隠れ場所見つけて、「光ちゃん、……」「姉ちゃん、……」「もうもう一生仲好うしようなあ。」「あて姉ちゃん」と此処で死にたい。」——と、お互にそないいうたなり、それから後は声も立てんと、どのくらいそこにいたのんやら、時間も、世の中も、何も彼も忘れて、私の世界にはただ永久にいい光子さんという人があるばかり。……そのうちに空がすっかり曇つて、冷

こいものがポタリと顔に落ちましたので、「雨降って来たな。」「憎い雨やなあ。」「濡れたらしょうがない。本降りにならん間にはよ下りよ」いうて、慌あわてて山下りてしまいましたら、ほんのバラバラ落ちただけでもうちやんと止んでしもてますねんがな。「こんなぐらいやつたらもつといてたらよかつたなあ。」「ほんまに、何ちゆう意地悪い雨やろ」いいましてんけど、下りてみたら俄かに二人共お腹減って来ましたのんで、「ちようどお茶の時間やさかい、ホテルいでも行ってサンドウィッチたべよか」いいますと、光子さんが「あてええとこ知ってる」いいなさって、大軌の直ぐ傍にある新温泉い行って、——彼あそこ処は私初めてですもんけど、宝塚と同じような家族温泉や何やあって、光子さんはちよいちよい行きなさと見えて、仲居なかいさんの名アやら、中の勝手やら、よう知ってなさるのんです。そんでその日一日遊んで、大阪に戻って来ましたのんは八時頃でしてんけど、そいでまだまだ別れるのんがイヤでイヤで、何処までも引つ着いて行きとうて、一緒に阪急で蘆あ屋川しやがわまで送って行きながら、「ああ、また奈良い行きたいなあ。光ちゃん、明日出られへん？」「明日はもつと近いとこにせえへんか、久しぶりで宝塚はどやろ？」「そんなきつとやで」いうて別れて、帰って来ましたら十時近くになってるのんです。「あんまり遅いので、さつき病院い電話かけたとこや」いわれて、私ははつとしながら咄とっさ嗟に巧いこ

と考えついて、「電話かけても分れへなんだやろ」いいますと、「ふん、中川いう人入院してへんいうのんで、何ぞ訳あつて隠してるのんか思たのやけど。……」「それがなあ、行てみたら中川の奥さんやあれへん、光子さん自身のことやねんわ。そないいうと昨日来やはった時も何や様子けつたいな思ててんけど、自分のことやいうたらうちが会えへんやろ思て、中川さんの名前借つたいうねんわ。」「そんならあの児が病院い這入^{はい}つてんのんか?」「病院なんか這入つてはれへん。こつちはそんな事とは知らんと、一緒に見舞いに行くつもりで誘いに行つたら、『まあちよつと上つとくなはれ』いうよつて、上つたことは上つたけど、いつまでたつても出かけよとしやはれへんのんで、『はよ行こうな』いうたら、『実はあんたに頼むことあるねん』いい出して、『きんのもその話しよう思て行つたんやけど、……』いうて、——『どうもこの頃体の工合が普通ではない、妊娠したのんかも分れへんよつて、そんな事にならんうちに、何ぞ智慧^{ちえ}貸してくれへんか、あの本読んてみたけど、なんや英語で分れへんし、やり損^{そこ}うたら恐い思うし』いうねん。」「ふうん、呆^{あき}れた児やなあ、そんだけの事に昨日みたいなうそつくやなんて、失敬やないか。」「うちもさんざん心配さされて、人馬鹿にしてる思てんけど、『何とも外に工夫つけへんのんで、あんなうそついてしもたんやさかい、どうぞ悪^{わる}思わんというて』いうて、お梅どんも出

て来て詫^{あや}まるよつて、……」「それにしたかて外に何とかうそのつきようもあるやないか、あんまりやり方がエゲツない。」「ふん、ふん、そらそうに違いないねけど、昨日の電話も男の声やつたし、きつとあの綿貫いう人なあ、あの人が蔭で指図^{さしず}したのんにきまつてるわ。なんぼなんでも光子さんだけやつたら、あんなややこしいうそつくはずあれへん。うちも腹立つて腹立つて、『そんな頼み聴く耳持つてエしません、これで失礼します』いうて帰ろとしたら、『まあそないいいわんと、どうぞ助けて頂^{ちやうだい}戴^{だい}』いうて右と左から袂^{たもと}おさえて、『こんな事から秘密親たちに知れでもしたら、どうぞして綿貫と一緒にになりたい思てるのんがみんなあかんようになってしまう。そしたらあて生きてられへん』いうて光子さんは泣きやはるし、『どうぞどうぞうちやんの命助ける思て、どないぞ心配したげとくなはれ』いうてお梅どんは手工合^あわして拝^おむし、そないしてもろたらどないしてええか分れへんようになってしもて、もうもう往^{おうじやう}生^{せい}したわ。」「そんでどうした？」「そんでもうちめつたなこと教^おせられへんよつて、『私なんにもそんな方法知れしません。あの本貸したげただけでも悪い事した思てますのんに、そんな恐い事なんで出来まますかいな。誰ぞ知つてるお医者はん頼んだらよろしいがな』いうてんけど、そないしてる間に俄^{にわ}かに光子さん苦しみ出しやはつて、えらい騒ぎになつてん。……」「そんな風に、しゃべつてゐる

うちに傍^{そば}から傍^{そば}からいろいろな作り事考え出して、昨日の出来事をええ工合に織^まり交ぜて、——光子さんはあの本の処方で昨夜の間にそうつと薬飲んだらしい、それがちょうどその時利^きいて来てだんだん痛みようが強^{つよ}なつて、——と、そこは昨日見た通り詳しいに話して、そないなつて来ると自分にも責任あるよつて帰るに帰られへん、そんでどうとう今まで傍^{そば}についたげてたんやと、うまいこといい抜けしましたのんです。

その十六

「今日もちよつと見舞いに行つてくるわ、放つといても気がかりやし、乗りかけた船やよつてしょうがない。……」いうて、それから五、六日のあいだというものの毎日のように何処ぞで会つてましてんけど、「何処ぞ人に見つけられへんところで、毎日二、三時間ぐらい会えるところあつたらええのになあ」思てますと、「そんなやつたら大阪の市中の方がええし、……静かなところよりかいって町中のゴタゴタしたところの方が人目に附けへんし」いいなさつて、「……いつや姉ちゃんに着物持つて来てもろた家なあ？ 彼^{あつこ}処^こやつたら気分

もよう分つてるし、安心やねんけど、……彼処にせえへんか？」いやはりますねん。あの
 笠屋町の宿屋いうたら、私に取つたら忘れられへん口惜しい口惜しい思い出あるとこです
 のんに、まるでこつちの感情も何も踏み付けにした話ですねんけど、そないにいわれても
 「ふん、そやなあ、なんや極まり悪いけど、行てもええなあ」いうて、腹立てることも出
 来んとおめおめ引つ着いて行つたぐらい、すっかり足元見られてしもてましたのんです。
 それに極まり悪いいうても初めの日イだけで、馴れてみましたら女子衆やかいも心得て
 て、帰りがおそなつた時やは、家の方い電話かけて棲目合うようにしてくれますし、…
 …そんな訳で、しまいには別々に出かけて行つて彼処から電話で呼び出したり、何ぞ急用
 出来た時にはお梅どんから知らしてもらたり、……ま、それもよろしいのんですけど、光
 子さんの家ではお梅どんだけやのうて、お母さんも、外の女子衆も、みんながその家の
 電話番号知つてゐるらしいて、ときどき私や光子さんにかかつて来ることありますのんで、
 何ぞ家の方ええように欺^{だま}したあるに違いない思てたのんですが、或る日一人で先行^いて待っ
 てたあいだに、「へえ、そうだす、……へえ、いいえ、あのう、さつきから待つておりま
 すけど、まだ来やはれしまへん。……へえ、へえ、そないいうときます。……いいえ、ど
 うしまして、……私の方こそいつも奥様出やはりましてえらいお世話になりました、……」

と、電話口でそない仲居さんがいうてるのんが何や知らんけったいなんです。「今の電話、徳光さんそこから違いますか？」いいましたら、「そうだす」いうてクスクス笑わろてるのんです。「あんた今、『いつも奥様が出やはりまして』いうてはりましたなあ？ 一体あれ誰のつもりでいうてなはったん？」いうとまたクスクス笑て、「奥様知りやはれしまへんのんか、奥様とこの女子衆のつもりでいうてますねん」いうやありませんか。それからよう聞いてみましたら、その家が私おんとこの大阪の事務所やいうことにしたあるのんやそうですね。「仲居さんがこれこれいうてたけど、ほんまかいな？」いうて、光子さんに尋たねましたら、「ふん、そやねん」と、平気な顔して、「姉ちゃんとの事務所、今橋と南と二つあるいうて、此処おの番号教おせたあるねん。姉ちゃんかつて何ぞ家の方いそないいうといたらどやのん？ 船場せんばの店の出店やいうてもええし、あての家でいかなんだら、ええ加減な名アいうといたらえやないかいな」いいなさるのんです。

そないして、だんだん私は抜き差しならん深みい陥はまって行きましてんけど、「こいではいかん」思たところで、もうそうなたらどないすることも出来しません。私は自分が光子さんに利用しられてることも、「姉ちゃん姉ちゃん」いわれながらその実馬鹿にいられてることも、感づいてましてん。——はあ、そら、いつや光子さんがいうてなさったの

んに、「異性の人に崇拝しられるより同性の人に崇拝しられる時が、自分は一番誇り感じる。何でやいうたら、男の人が女の姿見て綺麗思うのん当り前や、女で女を迷わすこと出来る思うと、自分がそないまで綺麗のんかいなあいう氣イして、嬉^{うれ}してたまらん」いうのんで、たしかにそういう虚栄心から、夫に対する私の愛を自分の方い奪いなさることに興味持つてなさったのんでしょうが、それにしたかつて、光子さん自身の心は綿貫^{わたぬき}の方へ吸い取られてたことは、よう分つてましてん。けどもう私は、どんな事あつても二度と別れるいうこと出来^{でき}へん氣持になつてましたよつて、分つてながら分らん風して、お腹^{なか}の中ではなんぼ焼餅^{やきもち}焼いてたかて、「綿貫」の「わ」の字も口い出さんと、そ知らん顔してましたのんで、そんな工合に弱点見抜かれてしもたら、姉ちゃんいうても私の方が妹みたいに機嫌取るようになってしもて、或る日いつもの家で会うてますと、「姉ちゃん、あんな一ぺん綿貫に会うてくれる氣イないか」いいなさるのんです。「——あの人、姉ちゃんどう思てるか知らんけど、いつやあんなりになつてしもてて、何や氣持が済まんよつて、是非姉ちゃんに会わしてほしいいうてんねん。ちよつとも悪い人違うし、会うたらきつと姉ちゃんかて氣に入る思うねんけど、……」「ほんまに、そやなあ、あんなりいうのんもけつたいなし、向^{むこ}がそないやはんねやつたら、あても会うとききたいなあ。光ちゃんの好

きな人やつたら、あてかつてきつと好きになれる。」「ふん、そらきつとそや。そしたら
 今日でも会うてくれるか?」「いつでもかめへんけど、あの人何処にいてんの?」「さっ
 きから此処ここの家に来てんねん。」——私も多分そんなこつちやろ思てましたのんですが、
 「そんなら此処い呼ばなあ」いいなさつて、「あの人に來てもろて頂戴」いうと、直きに
 綿貫が這入はいつて來ましてん。「やあお姉さんですか……」と、この前の時は「奥さん」い
 うたのに「お姉さん」いう言葉使つかて、私を見たら恐縮したみたいにズボンの膝ひざそろえて畏
 まつて、「あの時はまことにえらい失礼しまして、……」いうて、——なんせいつやらは
 夜おそうもありましたし、それにあんな訳で人の着物借り着してましたし、その日は明
 るい真ア昼間まびるまのことですのんで、紺の上衣うわぎに白セルのパンツ穿はいてるのんが、違ちがた人のよ
 うな印象受けたんですけど、歳は二十七、八ぐらいで、この前の時の感じよりもつと顔の
 色白うて、やつぱり「美男子やなあ」とは思いましたけど、正直のところいうたら、表情
 が乏しいて、絵工に画かいたように綺麗なばかりで、ちよつとも近代的なことあれしませ
 ん。「この人岡田時彦おかだときひこに似てるやろ?」と、そない光子さんはいいなさるのんですが、
 時彦よりもつとずつと女性的で、眼工が細うて眼瞼まぶたが脹はれてて、眉まゆの間を神経質らしゆう
 ピクピクさす癖あつて、なんや知らん陰険らしいのんです。「栄ちゃん、何もそない堅かな

らんかてええし、姉ちゃんちよつとも氣イにかけてはれへんさかい——」いうて、光子さんは一所懸命執り成しなさるのんですけど、私は私で、どうも虫の好かん奴ツちゃ思たらどないしても打ち解けられしませんし、綿貫の方もそれ感づいたのんか、無愛想な顔ニツコリともささんと、いつまでたつても膝崩そうともせえしませんのに、光子さんだけは何や独りで面白そうに笑いなさつて、「どないしたん？ 栄ちゃん。あんたけつたいな人やなあ」いいながら、むずかしい顔してる綿貫の方を意味ありそうに上眼で睨んで、「そんな顔してたら姉ちゃんに悪いやないか」いうて、指の先で頬べた突ついたりして、「あんなあ姉ちゃん、ほんまいうたら、この人焼餅焼いてんねんし、——」いやはりますねん。「あ、嘘です、嘘です、そんな事あれしません、そら誤解や。」「嘘やあれへん、そんならさつきの事いおか？」「さつきどういうた？」「僕は男に生れたのんが口惜しい、姉ちゃんみたいな女に生れたらよかったいうたやないか。」「そらいうた、——そやけどそら焼餅やあれへん。」そないいい合してるのんが、私にお世辞使うためにちゃんと二人で相談しといていうてるのんか分れしませんし、相手になるだけ阿呆くさい思て黙ってますと、「まあ、まあ、姉ちゃんの前でそないに僕に恥掻かさんでもえやないか。」「そんならもつと機嫌ようしたらどやねん？」いうて、ずるずるべつたりに焼餅喧嘩止めてしもて、そ

いから帰りしなに三人で鶴屋食堂い行ったり、松竹見たりしましたけど、それでも三人とも心からシツクリとはしませなんだ。

その十七

そう、そう、そこで私、最^{さいぜん}前^{まえ}いうのん忘れましてんけど、家^{いえ}の方は光子さんのお父さん^{おとうさん}のてかけはんのとこやいうて、笠屋町の電話番号教^おせときましてん、それいうたら、ほんまにおかしなことですねんけど、光子さんは「船場の支店やいうたらどやのん？」いなさるのんですが、そんなとこい行てなさるいうのんけつたいたなし、いつそ病院い入院しなさつたいうたらとも思たのんですが、病院やつたらいつまでも退院せえへんいう訳に行かんし、それに夫が事務所の帰りにでも迎いに来たら直^じき分るし、何^{どこ}処にしようなあ思て難儀してますと、「こないしたらどうだす」いうて、お梅^{うめ}どんが考えつきましてん。尤もそれには光子さん妊娠しやはつたいうことにせんと工^ぐ合^{あい}わるいので、お薬飲んでも巧いこと行かんし、お医者はんも手術してくれへん、そのうちにだんだんお腹^{なか}大きくなって来

るよつてとうとうお母ちゃんに打ち明けてしもた、そいでお父さんのてかけはんの家い子供生れるまで引き取られてる。そのてかけはんの家いうのんは笠屋町の井筒いう宿屋で、電話番号は何番でと、ちゃんとほんまの名前教せといたら、電話帳見たかてその通りやし、迎いに来られても褌目合^{つまめ}うし、「そしたらあて、姉ちゃんとこい遊びに行く時^{ふところ}懐い綿でも詰めて、お腹大きして行かんならんわなあ」いうて大笑いになりましたんけど、それやったら一番分る氣づかないいうのんでそないしましてん。「そうか、光子さん腹ぼてになつたんか」いうて、夫はすっかり真アに受けて、さすがに氣の毒そうな顔しますのんで、「そいでもあんた、そんな悪いこと手^てツ伝^とたらいかんいうたやろ。そやよつてうちどない頼まれても教せたげへんなんでん。そいで子供出来るまでは一と足も外い出たらいかん、じつとすつ込んでなはいわれて、押し込めみたいにされてるのんで、退屈で退屈でしようがないさかい、毎日でも遊びに来とくなはいやはるねんけど、どないしよう知らん? —— うちかてきつと恨まれてるか分れへんで、放つといたら寝ざめ悪いしなあ。」「それもそやけど、また係り合いになつたら難儀するぜ。」「ふん、ふん、うちもそない思うねんけど、今度ちゆう今度はいろいろ苦労したせいか大分人間変つて来てはんねん。それにそないなつたら、もうどないしても綿貫と一緒になるより外ないいうて、わりに落ち着い

てはるし、家の方でも結局そないさすようになるらしいねんけど、何せ今のとこ誰一人訪^たンねたげる人もないのんで、『頼りにするのん姉ちゃんだけや』いわれると、なんぼ自業^{じごう}自得^{じとく}や思ても可哀そうになつて来るねん。『なあ姉ちゃん、あてにやや兎出来たら、まさか姉ちゃんかて誤解されるはずないやろ？ あてそのうちに綿貫と一緒に姉ちゃんの旦那さんとこい詫^{あや}まりに行くさかい、これからほんまのきようだいまいに付き合うてくれへん？』——こないだもそないいうてたし、——「夫はそれでもまだ心から納得せえへん様子でしたが、「なるだけ氣イ附けた方がええで」いいながらそんなり大目に見てしまいましたのんで、それから後は「奥様いやはりますか」いうて笠屋町からおおびらに呼び出しかかつて来る。こつちからも遠慮のうかけられる。晩御飯^{ばんごはん}ごろまで遊んでると、「ええ加減に帰つてけえへんか」いうて夫からかかつて来ることもある、——いう工合で、ほんまにお梅どん巧いこと考えてくれた思^{おも}てましてん。

それからさつきの綿貫のことは、そんな調子で、折角引き合わせてもろても何やお互に探り合^{さぐ}ひしててちよつとも氣イ許せしませんのんで、その日イーペン会^{どっち}うたなり、孰^{どつち}方^かからも「会^あお」いい出したことあれしませんし、光子さんも二人を仲好^{なつこ}うさすことはあきらめてしもたらしいのですが、なんでも三人で松竹^{しょうちく}い行^いた、——あれから半月ぐらい後で

したやろか、ゆうがた、五時半ごろまで遊んでましたら、「姉ちゃん先行いんでくれへん？
 あてもうちよつと用あるよつて」と、追い立てるようにしなさるのんで、常時じょうじのこと
 ですよつて腹も立てんと、「そんなら先行いぬわ」いうてその宿屋のろうじ出ましたら、小
 声で「お姉さん」と後から呼ぶもんあるのんで、振り向いて見たら綿貫いですねん。「お姉
 さん、今お帰りがけですか」いいますよつて、「へえ、そうです、光ちゃん待つてはるさ
 かい早行はよつたげなはれ」と、わざと皮肉にいいながら、私はタクシー掴つかまえるつもりであ
 の通りを宗右衛門町の方い歩いて行きますと、「ちよつと、……ちよつと、……」いうて
 引つ附いて来て、「僕、実はお姉さんに聞いてもらいたいことあるのんですが、差支さしつかい
 なかつたら、一時間ぐらいこの辺散歩してくれませんか。」いうのんです。「そら、どん
 なお話か聞かしてもろてもよろしですが、さつきからあんた待つてなさるで。」「ナニ、
 それやつたら何処ぞから電話かけときます」いうて、二人で彼処あそこの「梅園」い這入はいつてぜ
 んざいたべながら電話借つて、それから太左衛門橋筋を北の方い歩き歩き話しましてん。
 「僕今電話で、急な用事が出来たのんでここ一時間ほどおそなるかも知れへんいうて置い
 たのんですが、お姉さんとお目に懸かつたこと内証にしといてもらえまへんやろか？ それ
 約束してくれはらんと、お話すること出来んのですけど。」「私は人にしやべるないわれ

たらどんなことあつてもしやべれしません。けど自分だけ正直に約束守つてると、ときどき人に嵌められて馬鹿な目に遭うことあるのんで、……」そないいうてやりましたら、

「ああ、お姉さんは、なんでもかんでも光ちゃんのした事僕の指し金や、僕が操つてののんやとお思いですやろ？ そら、そう思われてもしようがない訳あるいうことはよう分つてます」いうて、下向いてためいきついて、「お話したいいうのんも実はそのことなんです、が、いったいお姉さんは、僕とお姉さんと執方が余計愛されてる思います。お姉さんとしたら何や僕らに馬鹿にしられてる、利用しられてると思ひですやろけど、僕かてやつぱりそんな氣イしてるのんです。僕はほんまに嫉妬感じてるのんです。そら光ちゃんにいわしたら、姉ちゃんいてた方が家の方胡麻化すのに都合ええさかい、あの人道具に使うてのんやいいですけど、もう今になって人を道具に使う必要がありますやろか？ そんなもんあつたらかいって邪魔になれしませんやろか？ ほんまに僕を愛してるのんなら、そないしてる間アに結婚してくれたらええやありませんか。」——私はちよつとも油断せんと思ひてましたけど、態度がえらい真剣らしいて、いうことも一通り尤ものように思われますねん。「そいでも結婚出来へんいうのんは、何ぞ光ちゃんの家の方に反対あるのん違いますやろか？ いつも私には、自分は早結婚したいいうてはりますで。」「そら、口で

はそないいうてます。家で反対するいうこともほんまには違いないのです。けどそれにしたかて自分が真面目まじめにその氣イになつたら、何とかして親たち説き伏せる方法ないことないやろ思います。まして今ではただの体と違ふのんに何処どこい行くこと出来ますか知らん？——はあ、そないいますのんで、そしたらやつぱり光子さんはほんまに妊娠してはるのんやろか、けつたいなこというなあ思いながら聞いてますと、「——内の娘は百万円以上の資産家の所でないとやられん、一文なしのすか貧びんの男みたいなんにやる訳に行かん、子供生れたら何処どこいなとやつてしまふというて、お父さんかんかんになつて怒つてるいうのんですが、そんな無茶な話ありますやろか。第一子供が可哀あはれそうで、人道問題やありませんか。お姉さんどう思われます？」いいますさかい、「それより私、光ちゃんに子供出来たいうこと初耳はつみみですけど、なんぞそんな氣け工くでもあつたんですか」いいますと、「へえ？ 初耳？——」いうて、疑うたががい深ふかそうに私の顔モジモジと孔あなの開あくほど視みつめてますねん。「へえ、初耳はつみみです、そんなこと光ちゃん私にいうたことあれしません。」「そうかて、——そしたらいつやお姉さんのとこい避妊避妊の方法聞きに行つたことあれしませんか？」「そらありましたけど、妊娠したなんていうのん根工ねくも葉はアもないウソばかりで、私に近寄るためにそんな口実くじこしらえて来たのんと違いますやろか。尤も私の家の方は、

光子さん妊娠してはる、そいでちよいちよい見舞いに行くのんやいうたあるのんですけど。
 「すると綿貫は、「ふうん、そうですか」いうたなり、いつの間にやら血走った眼工して、唇の色まで変えてるのんです。」

その十八

「なあ、お姉さん、何でそないに妊娠したいうこと隠すのんでしょう？ 殊にお姉さんにもでウソつかいでもよろしいやありませんか？ ほんまにお姉さん知りやはれしませんのんか？」いうて、何や疑うてる様子で、何遍でも念押すのんですけど、ほんまのそこ私は聞いたことあれしません。綿貫の話ではもうちゃんと三月ぐらいになつてて、お医者はんにも見てもろたいいうのんですが、それやったら、いつや出血騒ぎの時にもそやつたはずです。すねんけど、三月やそこらでは素人に分れしませんし、それにその後で「自分は子供出来るはずない」いうことを、たしかに光子さん自身の口から聞いてますし、あの時のことは芝居打つてたに違いない思てましたのんに、綿貫のいう通りやとしたら、やつぱり私に気

がねしてはったんのんか知らん？「何で子供出来るはずないいましたか、あの本の通り
を
実行して
る
いう
の
ん
で
す
か、そ
や
な
か
つ
た
ら
そ
ん
な
体
質
や
い
う
ん
で
す
か」と、綿貫はせ
え
だ
い
聞
く
の
ん
で
す
が、そ
ら
私
か
て、光
子
さ
ん
の
前
で
は
出
来
る
だ
け
綿
貫
の
こ
と
に
触
ら
ん
よ
う
に
し
て
ま
し
た
よ
つ
て、そ
な
い
委
し
ゆう
問
う
た
こ
と
あ
れ
し
ま
せ
ん
し、……そ
や
け
ど、こ
な
い
だ
も
て
ん
ご
に「姉
ち
ゃ
ん
の
家
い
行
く
時
は
お
腹
に
綿
で
も
詰
め
て
行
か
ん
ら
ん」い
う
て
は
つ
た
ぐ
ら
い
や
し、妊
娠
し
て
は
る
と
は
思
え
し
ま
せ
な
ん
だ
い
い
ま
す
と、光
子
さ
ん
は
真
面
目
で
結
婚
し
よ
う
い
う
気
い
な
い
の
ん
や、そ
い
で
も
し
も
子
供
出
来
た
い
う
こ
と
分
つ
た
ら
ど
な
い
し
て
も
一
緒
に
さ
さ
れ
る、そ
れ
が
イ
ヤ
や
よ
つ
て
隠
さ
れ
る
だ
け
隠
し
て
る、「僕
は
そ
う
に
違
い
な
い
思
い
ま
す」
い
い
ま
す
ね
ん。綿
貫
の
考
で
は、光
子
さ
ん
ち
ゆう
人
は
異
性
の
愛
よ
り
同
性
の
の
方
が
好
き
で、綿
貫
よ
り
私
の
方
が
ず
つ
と
愛
さ
れ
て
て、そ
の
た
め
に
結
婚
し
た
が
れ
へ
ん。——子
供
出
来
た
り、結
婚
し
た
り
し
た
ら、私
が
逃
げ
て
し
ま
う
か
も
分
れ
へ
ん
思
て、一
日
延
ば
し
に
延
ば
し
と
い
て、そ
の
う
ち
に
お
腹
の
見
え
え
よ
う
に
す
る
と
か、綿
貫
に
イ
ヤ
気
お
こ
さ
す
と
か、ど
な
い
ぞ
し
よ
う
思
て
る。
——私
は
ひ
が
ん
で
る
せ
え
か、ど
な
い
し
て
も
自
分
の
方
が
そ
な
い
愛
さ
れ
て
る
思
え
し
ま
せ
ん
の
に、
「い
や、そ
う
で
す、た
し
か
に
そ
う
で
す、お
姉
さ
ん
は
仕
合
わ
せ
で
す」い
う
て、「あ
あ、あ
あ、
そ
れ
に
引
き
か
え
て
僕
は
何
ち
ゆう
不
幸
な
運
命
の
下
に
生
れ
た
の
ん
で
し
よ
う」と、芝
居
の
セ
リ
フ

みたいに節つけていいながら、泣きそうな顔するのんです。それが、始めて会った時から女みたいな男やと思てましてんけど、そないいうて話してみますと、表情や物のいいようまで女の腐ったんみたいにねちねちしてて、何やうるさいほど執拗^{ひつこ}うて、横眼でジロジロ邪推深そうに人の顔色うかごうたりして、なるほどこれやったら、光子さんかてそない好きと違うんかなあいう氣イしますねん。そいからいつや笠屋町で着物取られた時にしたかて、綿貫は私呼ぶのんに反対やつた。もうあないになつてんやつたら度胸きめて、仲居さんの着物借つて帰つたらええ、そんで「こないこないの訳で深う約束した男あります」いうたら、出来たことしようがないよつてかいって早結婚^{はやこ}出来る、出来なんだから駈^かけ落ちする覚悟きめたら、ちよつとも恐^{こわ}いことあれへんのに、あんな時に何も知らんお姉さん呼ぶやなんて、そんな厚かましいこと出来るもんか、第一呼んだかて来てくれへんにきまつてるいうてんけど、光子さんは「着物なかつたら今晚家^い行なれへん」いうてどないしても聴きはれへなんだ。「それやつたら、いつその事いから何処ぞい逃げよやないか」いうても、「そんな事したら後のために悪いさかい、あてが巧アいこというて姉ちゃん呼んで見せる。あてがいうたら、あの人『イヤヤ』いうこといわれへん。ちよつとぐらい怒られたかてどないなと胡麻^{ごま}化してやる」いうて、自分で電話かけに行きやはつた。「それでも

あの時、誰ぞもう一人電話口に立つててコソコソ相談してたみたいでしたがなあ」いいましたら、「そら僕かて心配やさかい、傍に附いてたんです」いいますねん。

そんなこといろいろ話しもつて知らん間に三休橋渡つて、本町筋まで来てしまいましてんけど、私も綿貫も「もうちよつと話しまひよなあ」いうて、電車道越えて北浜の方に行きましてん。何せ私は今まで光子さんちゆう人を通してばっかり想像してて、何かにつけてただもう男が悪いのんや思てましたが、さっきからの様子見てましたら、そないウソつきみたいとも違いますし、女性的なとこや疑がい深いとこあるのんも、生れつきにも依るとしたかて、光子さんの態度がそないさしてしもたのんかも分れへんし、……私にしたかて今まで大分欺されたお蔭で僻んでるとこあるねんし、……それ考えたら無理もないとこもあるのんで、まあちよつとぐらい邪推交つてるとしたかて、とにかく本気で私に同情求めてるみたいに思われますねん。尤も自分より私の方が愛されてるというのは、どないしても私には信じられしませんのんで、「そら違いますやろ、そら綿貫さん、あんまり氣イ廻し過ぎますで」いうて慰めたげたのんですが、「いやいや、僕かてそない思いたいのですけど、絶対にそんなことあれしません。お姉さんはまだほんまの光ちゃんの性質知りやはれしませんのんです」いうて、——光子さんは私に対しては綿貫を愛してる

みたいに見せかけ、綿貫に対しては私を愛してるみたいに見せかけてる、そんなことするのん好きなたちなんや。けど孰方どっちやいうたら、私の方余計愛してるのんで、そやなかったらあんなり絶交したみたいになつてたのんに、わざわざ病院の名前騙かたつたりして会いに行く訳ないやないか。「いったいあの時、光ちゃんはお姉さんとい行てどんな工合にいたのんですか、どんな事からより戻つたのんですか、僕は後から聞いたのんで委しいことは知らんのんですが」いいますよつて、あの出血騒ぎの一件みんな話して聞かしますと、

「ふうん、ふうん」いうて一と言一と言ビックリしながら、「そんな騒動したいいうこと、僕は夢にも知りません。そら、お腹なか大きかったのんはほんまです。しかし僕は子供出来るのんやつたら出来た方がええいう意見で、薬飲んだり不自然な手段取つたりしたらいかんいうてたのんに、自分勝手にお姉さんのとこい相談しに行つたいうのんで、後で怒つたぐらいですねん。そやけど、僕に内証で薬飲んだことあつたにしたかて、そない苦しんだり出血したりしたいいうことウソに違いあれしません。いったい、その血イみたいなもん何ですやろ」いうて、そないまでして仲好ようなりたいうのんは、私愛してるのんでないと出来んことやいうのんです。なるほどそれもそうですけど、そんなら何で綿貫と会うてはるねんやろ？　ほんまに私好きやつたら、もうとうに綿貫放つてしまうのん当たり前やないか

？　それがおかしいいましたら、光子さんいうたら自分がどない「好きやなあ」思てもその弱点見せんようにして、向むこが自分を慕しとうて来るように仕向けたがる。自分は絶世の美人やよつて、いつも高う止まつてて、誰ぞに崇拜しとささんと淋しい。自分の方からいい寄つたりしたら値打ち下る思い込んでは。そやさかい私に嫉妬しと起さして、自分が優越な地位にいるために綿貫いうもん利用してるのんや。「それに一つは、別れるやなんていい出したら僕が何するか分れへん思て、恐がつてるのんです。今更そんなこといえる関係やあれしませんがのんに、もしもそないなつたら、僕は名誉と生命を賭かけてあらゆる復讐ふくしゅうしてやります」いうて、蛇へびみたいな眼工で人の顔ジロジロ睨にらむのんです。

その十九

「どうです、お姉さん、まだちよつとおよろしいですか？」　「ええ、ええ、私やつたらかめしません。」　「そしたらまたもの方い戻りまひよか」　いうて北浜の通りから南の方い今歩いて来た道帰りながら、「結局僕とお姉さんとは敵かたき同士にさされてるのんですが、僕

が負けるのんにきまっています」いいですよって、「私はそない思えません。光ちゃんと私とはなんぼ熱烈に愛し合うてたかて自然に背^{そむ}いてるさかい、もし執^{どっち}方ぞが捨てられるいうことになったら私の方が捨てられます。光ちゃんの家の方にしたかて、あんたには同情しやりますやろけど、私に同情してくれる人誰もあれません」いいですよと、「けどお姉さんのは、その不自然という点に強味あると思います。何でやいうたら、異性の相手^{さが}搜^{さが}そ思たら僕以外にもなんぼでもあるけど、同性の相手やったらお姉さんの代りになる人外にちよつとあれしません。そやさかい僕はいつでも捨てられるけどお姉さんは捨てること出来ません」いうて、——あ、そうそう、そればかりやあれへん、同性の愛やったらどんな男と結婚したかて、続けて行かれる。夫が何人変ったかてちよつとも影響せえへん、そしたらお姉さんと光ちゃんの愛は夫婦の愛よりも永久不変やいうて、「ああ、ああ、僕は何ちゆう不仕合わせな男でしょう」と、またしても例のセリフ繰り返すのんです。それから暫^{しばら}く考えてて、「なあ、お姉さん」いうて、「僕、お姉さんに正直なところ聞かしてもらいたいのんですが、光ちゃんが僕を夫に持つのと、外の男持つのと、執^{どっち}方の方をお姉さんは望めますか」いいですよって、そら私かてどうせ光子さん結婚しやはるのんやったら、前から事情知つててくれる綿貫と一緒にやりはる方が都合ええのんにきまっ

ますさかい、そないいますと、「そしたら僕とお姉さんとは敵同士になる理由あれしま
 せんやないか」いうて、もうこれからは同盟しよう、そして焼餅みたいなん焼くのん止め
 て、お互に助け合うて馬鹿な目工に遇あわされんようにしよう。——なんせ今までは二人離
 れてたために光子さんの思うままに利用しられた。そやさかいこれからはちよいちよいそ
 うツと会うようにして連絡取つて行こやないか。尤もそないするのんには二人が完全に諒り
 解ようかいし合うて、互の立ち場認めんといかん。光子さんのいいぐさ真似まねシするのんやない
 けど、同性の愛と異性の愛とはまるきりたちが違う思たらなんにも嫉妬することあれへん。
 ぜんたいあんな綺麗な人たつた一人で愛するというのんが間違もつたいうてる。五人も十人も崇拜する
 人あつたかて当り前やのんに、二人で占領するいうのん勿もつたい体ない。それも男やつたら自
 分一人や、女やつたら私だけやいう工合に考えたら、世の中に自分らほど幸福なもんあれ
 へんやないか。二人ともそない思て、その幸福いつまでも自分らだけが握つてて外の人
 に取られんようにしたらええのんやいうて、「どないです、お姉さん」いいますよつて、
 「あんたさいその氣イなら、私かて約束守ります」いましてん。「僕、お姉さん味方にな
 ってくれなんたら、ぱつと世間に知れ渡るようにして、自分もあかんようになる代り、
 お姉さんかてあかんようにしたげよ思てたのんですけど、それ聞いてほんまに安心しまし

た。光ちゃんのお姉さんやったら僕に取ってもお姉さんです。僕女きようだい一人もない
 のんで、お姉さん親身の姉や思て大事にしますさかい、お姉さんもうぞほんまの弟や思
 て、何でも思い余ることあつたら遠慮のう打ち明けて下さいませんか。僕ちゆう人間は、
 敵になつたらどんな恐いことでもする代り、味方になつたら命投げ出してもお姉さんのた
 めに尽します。お姉さんのお蔭で光ちゃん嫁に持つこと出来たら、夫婦のことやかい後
 廻しにしてもお姉さんのため謀ります。」「きつと、きつと、そないしてくれはる？」

「きつとですとも、僕かて男です。一生お姉さんの御恩忘れるようなことせえしません。」
 ——そんでとうとう、また「梅園」の前まで歩いて来てしもたのんで、そしたら今度、い
 つでも必要なこと出来たら「梅園」で待ち合いしまひよいうて、堅い握手して別れまし
 てん。

私は一人で帰つて来る途々何や知らん胸がわくわくするぐらい嬉しいて、光子さんは
 そない私を愛してくれる？ 私の方が綿貫よりずっと愛されてる？ まあ、そんなこと、
 夢やないのんか？——つい昨日までは二人のために玩具にしられてる思い込んだのん
 に、急に形成變つてしもて、まるきり狐につままれたみたいな氣イしましてんけど、そい
 でも綿貫のいうたこといろいろ考えてみましたら、好きと違たらあんな騒動するはずない

いうのんもほんまやし、そやなかつたらちゃんとした人ありながら私と会ういう訳ないし、——それに、今になってから初めごろのことだんだん思い出してみますと、あの観音様のモデルのことでやかましい噂^{うわさ}立った時分、光子さんかて私がどんな気持でいたか大方素振^{そぶ}りでも察^さしついてたですやろし、道ですれちごた時やかいに「この人うちに気イあるねんなあ」思て、今に誘惑してやろと待ち設けてなさったのんかも分れしませんねん。そないいうたら二人が始めて物いうたのんも、いい出したのんは私ですけど、いつでも済ましてなさるのんにニツコリ笑いなさったのんで、つい釣り込まれて口きいたのんやし、裸体の姿見た時にしたかて、見せてくれいうたのんは私ですけど、そないいわすように持ちかけなさったのんやし、——ぜんたい私、なんぼ光子さん崇拜するいうたかて、どんなことから今みたいな仲になつてしもたのんか、それにはいろいろ夫に対して不満あつたところ、学校であんな噂^{うわさ}立てられたのんが反動的に作用したこともありますやろが、私にそんな可能性あること見抜いて、知らん間アに暗示かけてなさったのんかも分れしませんし、それ考えたらあのM家との縁談の事にしたかて口実みたいに思われますし、——なんせ自分の仕掛けた罠^{わな}い私おとしいれながら、うわべはいつでも私の方から手工出した形にさされてたいう気イしますねん。そら綿貫のいうたことかて一から十まで信用出来^できませんし、あ

の着物取られた晩でもたしかに綿貫が指図^{さしず}したのんと違うかしらん。S K病院から電話かかった時にしたかて、あの男の声綿貫でのうたら外にそんな事頼まれる人あるかしらいう工合に、疑がい出したら腑^ふに落ちんこともあるのんですけど、——第一子供生れるいうこと、なんで私に隠してなさるのんか、あんな心配さしときながら、そんな水臭いことするやなんて、やっぱり私の方が侮^{あなど}られてること知れたある、ひよツとしたらあないに秘密打ち明けて私と光子さんとの仲い水さという気やないのんか？　そうか今のうちは邪魔されんように味方につけといて、結婚したら放^ほつてしまうつもりやないのんか？——そない思たら、だんだん疑がいも濃うなつて来るのんですけど、それから四、五日たった或る日、またろうじの外で待ち受けてて「ちよつと、ちよつと、……」いうて、「僕今日お姉さんに相談したいことあるのんですが、『梅園』まで来てくれませんか」いいますよつて、一緒に附いて行きましたら、二階の座敷い上つて行つて、「ただ口でばっかりきようだいの約束するいうても、お姉さんかてなかなか僕を信じるいう訳に行きますまいし、僕かてやつぱり何や心配ですさかい、お互に疑念残らんように誓約書交^{かわ}そうやありませんか。実はそのつもりでこんなもん書いて来たのんですけど」いいながら、懐^{ふところ}から二通の証文みたいなもん取り出すのんです。……あ、そう、そう、ちよつとこれ見て下さいませ、これがそ

の時の誓約書ですねん。（作者註。彼女が示した誓約書の内容は話の順序として茲（ここ）に紹介する必要があるばかりでなく、この文案を作製した綿貫なる男の性格を想像せしむるに足るから、煩（はん）を厭（いと）わず原文のままを左に掲載するであらう。――）

誓約書

現住所

兵庫県西宮市香櫨園××弁護士法学士

柿内孝太郎妻

柿内園子

現住所

大阪市東区淡路町五丁目××番地会社員

綿貫長三郎次男

明治卅七年五月八日生

綿貫栄次郎

明治卅四年十月廿一日

生

右柿内園子ト綿貫栄次郎トハソノ各々ガ徳光光子ニ対シテ有スル緊密ナル利害關係ヲ考

慮シ昭和某年七月十八日以降左ノ条件ノ下ニ骨肉ト変リナキ兄弟ノ交リヲ諦^{てい}スベキコトヲ誓約シタリ

一、柿内園子ヲ以^{もつ}テ姉トシ、綿貫栄次郎ヲ以テ弟トス、栄次郎八年長ナレドモ園子ノ妹ノ夫タルベキ者ナレバナリ

二、姉ハ弟ガ徳光光子ノ恋人タルノ地位ヲ確認シ弟ハ姉ト徳光光子トノ姉妹愛ヲ確認シタリ

三、姉ト弟トハ徳光光子ノ愛情ガ第三者ニ移ルコトナキヨウ常ニ結束シテ防^{ぼうぎよ}禦シ、姉ハ弟ト光子トヲ正式ニ結婚セシムルタメニ努力シ、弟ハタトイ結婚後トイエドモ姉ト光子トノ既ニ確立セラレタル關係ニ対シ何ヲ異議ヲ申シ立ツルコトナシ

四、モシ兩人ノイズレカガ光子ニ捨テラレタル場合ハ他ノ一人モソレト進退ヲ共ニスベシ、即チ弟ガ捨テラレタル時ハ姉ハ光子ト交リヲ絶チ、姉ガ捨テラレタル時ハ弟ハ光子トノ婚約ヲ破棄シ、結婚後ニオイテハ離別スベシ

五、兩人ハ他ノ一方ノ承諾ヲ經ズシテ無斷ニ光子ト逃亡シ、所在ヲ晦^{くら}マシ、モシクハ情死スル等ノ行為ヲナサズ

六、兩人ガコノ誓約ヲナセルコトハ光子ノ反感ヲ挑発スルコトアルベキヲ以テ発表ノ

必要ニ迫ラルルマデハ絶対ニ秘密ヲ嚴守スベシ、モシ兩人ノイズレカガ光子ニ対シ、アルイハ他ノ何^{なんびと}人カニ対シ発表セント欲スル時ハ予^{あらかじ}メ他ノ一方ト協議スベキ義務アルモノトス

七、モシ兩人ノ一方ガコノ誓約ニ違背スル時ハ他ノ一方ヨリアラユル迫害ヲ受クルコトアルベキヲ覺悟スベシ

八、コノ誓約ハイズレカガ任意ニ徳光光子トノ關係ヲ放棄セザル限り有効トス
以上

昭和某年七月拾八日

姉 柿内園子 印

弟 綿貫栄次郎 印

（これだけの文句がかんぜよりで綴^とじた二枚の改良半紙へ、頗^{すこぶ}る丹念な毛筆の細字で、せこましい字配りで、一点一画の消しもなく書かれているのである。二枚の半紙の四分の一以上も余白が残っているのを見ると、こんなに細かく書く必要はないのであるが、けだし平素からこういうコセコセした字を書く癖があるのであろう。書体は毛筆を使い馴^なれな

い現時の青年の筆蹟としては決して拙くないけれども、何処かに商店の番頭の字のような品の悪い達者さがある。最後の二人の署名だけは、梅園の二階で万年筆で記したもののだが、これも柿内未亡人の署名の方が不釣合いに字体が大きい。そして何より無気味なのは、署名の下に小さな花卉を押し込んだようにひろがっている茶褐色の斑点であつて、同じものが半紙の綴じ目の割り印を捺すべき所にも二つぼたぼたとにじんでいる。それが何であるかは未亡人自らが語るであらう。――「どうです、お姉さん、この条件でよろしいですか？ よろしかったら此処い名ア書いて判おしてくれませんか？ それとも何ぞ足らんとこあるお思いになつたら、遠慮のういうてみて下さい」いいいますよって、「これだけちやんときめたあつたら結構ですけど、それでも子供生れた場合に、あんたも光ちゃんも家庭が大事やいう氣イになりませんやろか。なんとか其処のともうちよつと考えて欲しい」いいましたら、「それは第三に規定したある通り、『弟ハタトイ結婚後トイエドモ姉ト光子トノ既ニ確立セラレタル関係ニ対シ何ラ異議ヲ申シ立ツルコトナシ』やさかい、家庭のためにお姉さん犠牲にするようなこと絶対にあれしませんけど、子供生れるいうことそない心配やつたら、どうでもお姉さんの氣イ済むように此処い書き加えときますが、どないしたらええのんです？」いいいますのんで、「今光ちゃんのお腹にある子は結婚するのんに

必要やさかい、それはしょうがないとして、結婚してからは子供生まんようにして頂戴」
 いいましてん。そしたら暫く^{しばらく}考えてて、「よろしいです、そないしましょう」いうて、
 「どんな工合^{ぐあい}に書いときましょか、こないこないの場合もありますし、こないこないの場
 合もありますし」と、いろいろ私の氣いつかなんだことまで考えてくれて、——その、二
 枚目の紙の裏のといペンで書いたあるのん見て下さいませ、それがその時の書き入れて
 すねん。（作者註。前掲の誓約書の最終の紙面に、「追加条項」として下の文句が附記さ
 れている。——「弟ハ徳光光子ト結婚後ニオイテハ常ニ光子ヲ妊娠セシメザルヨウニ注意
 ス、モシ聊^{いささ}カニテモ妊娠ノ疑イアル時ハソノ処置ニ関シ姉ノ指揮ヲ受クルモノトス、——
 ——この文句を記したあとでまた思いついたものらしく、更に次の二箇条が規定してある。
 ——「結婚前ノ妊娠トイエドモ、ソノ妊娠中ニ結婚シ、結婚後ナオ避妊ガ可能ナル時ハ為^な
 シ得ル限りノ手段ヲ取ルベシ、」「弟ハ妻ガ協力シテコノ追加条項ヲ忠実ニ履行スル保証
 ヲ得ルニアラザレバ、光子ト結婚スルコトヲ得ズ、」——そうして此処にも茶^{ちや}褐^{かつ}色^{しよく}の
 しみが点々と捺^おされているのである。——それ書いてしまうと、「こいだけ極^きめといた
 ら安心です、これ読んでみたらお姉さんの方が僕よりよっぽど有利なくらいです、これで
 僕の誠意のあるところお分りになったでしょ」いうて、「さあ、サインして下さい」いいま

すねん。それで私、「サインするのはしてもええけど、判持ってエしません」いいましたら「きょうだいの約束するのんに普通の判では役に立てしません、お気の毒ですけど、ちよつとばかり痛いのに辛抱してくれませんか」いうて、ニヤニヤ笑いながら袂たもとの中から何か出すのんです。

その二十

「どうぞ此処のここ出して下さい、痛いいうてもほんちよつとの間です」いうてるうちにもうシツカリ手エ握にぎつて、指の先か思てましたら、肩の方まで袖そでまくり上げて、二の腕の上と下とをハンカチで括くくろとするのんで、「判おすのんにそんなことせえでもええやあれしませんか」いいましたら、「判おすだけと違います。きょうだいの約束するんです」いうで、自分も同じように腕まくつて、私の腕と一緒にそろえて、「よろしですか、お姉さん、声出したらいけませんで。……あれいう間に済んでしまいますよって、眼エつぶつてなさい」いいますねん。「イヤヤ」いうたらどんな目に遇うか分れしませんし、逃げよ

思ても手頸てくび握られてますし、光る物見たら気が顛倒てんとうしてしもて、眼工つぶってる間に、咽喉のどでもないぞしられるのんやないかと生きてる心地こころせえしませなんだけど、殺されたら殺された時思てあきらめてますと、肘ひじの上のとこスルスルと鋭利な感覚がした思たら、ぞうツとして脳貧血起しそうになりましたが、「しつかりしなさい、しつかりしなさい」いうて、自分の腕出して、「さあ、お姉さんから先イ飲んで下さい」いうのんです。それから、「此処と、此処と、此処判おすのんです」いいながら自分で私の指つかんでペタおしてしまいました。

私は綿貫いう男がつくづく恐い氣イしましたので、正直に約束守るつもりで、その誓約書は大事に筆筒たんすの抽出ひきだしい鍵かぎかけてしもといて、光子さんには済まん思いながら素振りにも悟られんようにしてましてんけど、それでも隠し事してると何処ぞオドオドした様子出るのんか、明くる日不思議そうに私の顔見てなさって、「姉ちゃん何で、ここのとこ傷したのん？」いいなさるのんです。「ああ、これどないして出来たのんか、ゆんべあんまり蚊かアに喰くわれて、夢中で掻かきむしツたのんか知らん」いいますと、「おかしいなあ、栄ちやんもちょうどそれと同じもん出来てるねんわ」と、そないいわれたら、ああ、悪い事出来んもんやなあ思うて急に私の顔色変つて来ましたのんで、「姉ちゃん何ぞあてに隠して

るのんと違う？ それどないして出来たのんか、ほんまのこというて頂戴」いいなさって、
「隠したかて大概分つてゐる、姉ちゃんはあてに内証で何ぞ栄ちゃんと約束したことあるねんなあ？」——そら、光子さんいうたらそういうことには早う氣イ廻るのんで、そない図^ず星刺^{ぼし}されたらもう惚^{とほ}けること出来^{でけ}しませんけど、それでも真^まつ青になりながら黙^もつてますと、「きつとそうに違^{ちが}ひないやろ？ なんでそれいうてくれへん」いうて、——だんだん聞いてみましたら、きのう綿貫はあれから歸りに、腕の傷コツソリ光子さんに見られてしもてて、その時から何ぞ訳あるのんやなあと思てた、そないに二人同じ日に同じとこへ傷出来るはずあれへんいいなさって、「姉ちゃんはあてと栄ちゃんと執^{どつち}方が大事や」とか、「隠す以上はあてに知れたらいかんことあるねんやろ」とか、しまいには私と綿貫との間にイヤなことでもあつたように「それ聞かんうちはどうないしても歸せへん」いいなさるのんですが、そんな時にも光子さんは一杯涙ためたなりじつと落ち着いてなさって、恨めしそうに睨^{にら}んでなさるだけですもんけど、その眼エえらい妖^{ようえん}艶^{えん}で、何ともいえんなまめかしい風情^{ふぜい}あつて、「なあ姉ちゃん」いいながら甘えるようにその眼工使われたら、なかなか魅力に逆^{さか}らういうこと出来しません。それにそこまで感づかれたらいずれ一と騒ぎ持ち上ること極^きまつてますし、隠すだけ疑^ぎがわれること分つてますもんけど、綿貫に相談せん

うちはウツカリいう訳に行きませんので、「どうぞ明日まで待つて頂戴」いいますと、明日いわれることが何で今日いわれへん、人に相談していうぐらいやったら聞かいでもええ、自分にだけそうツと教^おせてくれたら迷惑かかるようなことせえへんいうて、どないしても聴きなされしませんさかい、「光ちゃんそないいうけど、あんたかつてあてに隠してるのとあるやろ」いうてやりますと、「あてが何隠してる？ 何でも正直にいうたげるよつて、そない思うことあつたら聞いて頂戴」いいなさいますねん。「ふうん、きつと隠してることないなあ？」「きつとあれへん。そら隠すつもりやのうて、いわなんだことあるかも知れんけど。」「あんたあてに、何んぞ体のことについて隠してることあるやろ？——」

「何いうてるのん、姉ちゃん？」「あのなあ、いつやあんた家い来て苦しがつたわなあ、あの時ほんまにお腹^{なか}の中に子供あつたん？」「ああ、あの時のこと」いうて、さすがに極まり悪そうに赧^{あか}い顔しなさつて、「そらあの時は姉ちゃんに会いとうてわざとあんな真似^{まね}してん。……」「あてそんなこと聞^きいてるのんやあれへん。あの時はほんまに子供出来たのんかどうか、それ知りたいねん。」「そら、出来てえへんなんだ。」「そんなら今でも出来てえへんの？」「そんなこと極まつてるやないか、なんでまたそれ疑^{うたが}ごうてるのん？」「なんでいうことないねんけど、疑^{うたが}がうだけの訳あるねん。」「ああ、姉ちゃん」と、

その時光子さんは「もう分ってる」いう顔しなさつて、「姉ちゃんきつと、あて妊娠してるいうこと栄ちゃんにいわれたのんやろなあ？ あの人きつとそんなこというねん、ほんまいうたら子供生ます能力もないくせに、——」と、そないいいなさるか思たら、一所懸命歯ア喰いしばつて、眼工に一杯たまつた涙が急にポトポト頬^ほべた伝^{つと}てるのんです。

私はビツクリして、「何やて、光ちゃん？」いいながら自分の耳疑^ぎごうてますと、そのあいだにもうさめざめ泣いてなさつて、実は今まで、自分のことについては何一つ隠してえへんけど、綿貫には人にいわれん秘密あつて、それ知られたら自分も恥かしいし、あの人も気の毒な思ていわんといた。けど姉ちゃんに蔭でいろいろな中傷したりするのんやつたら、もうあんな人、可哀そうなことも何もあれへん、自分が今みたいになつてしまったのんも元はいうたらあの人や、自分の不仕合わせはみんなあの人の仕業^{しわざ}やいうて、またえらい泣きなさつて、それから綿貫ちゆうもん知つた時のことから始めて委^{くわ}しいに話しなさつて、なんでも二年前の夏、浜^は寺^{までら}の別荘^い行てた時分、お互に物いうようになって、或る晩散歩に誘い出されて、海岸に置いたある漁船の蔭に連れて行かれた。そいで夏過ぎてからも、大阪の家が近いとこにあつたさかい常時執方^{どつち}ぞから呼び出しては逢^あうてたら、或る時女学校時代のお友達から綿貫のことについて妙な噂^{うわさ}あるのん聞いた。そのお友達いうの

んは、いつや二人が宝塚歩いてるとこ見たことあるのんで、そののち朝日会館の映画の夕
 の時やったかに、光子さんが一人で屋上庭園に出てなさったら、「徳光さん」いうて後か
 ら肩たたいて、「こないだあんた綿貫さんと歩いてたなあ」いうのんで、「あんた綿貫さ
 ん知ってるのん？」いうたら、「うち直接には知らんけど、あの人えらいシヤンやいわれ
 て、みんなが騒ぐのんやてなあ、あんたみたいに綺麗かったら一緒に歩いててもちようど
 ええけど」いうて意味ありげに笑^{わろ}てるさかい、そないに深い関係やない、あの時ちよつと
 歩いただけやといい訳しなさつたら、「そない弁解せんかて、あの人やったら誰も疑がう
 はずあれへん、あんたあの人の仇名^{あだな}知ってる？」いいますよつて、「知らん」いいなさる
 と、『百分百安全なるステッキ・ボーイ』いうねんし』いうてクスクス笑てるのんやそうで
 す。それが光子さんには何の事やらさっぱり分れしませんでしたので、根工掘り葉ア掘り聞いて
 みましたら、綿貫いう人は無能力者で、中性の人間やいう噂ある、しかもそれにはちゃん
 とした証人あるのんやいいますねん。

なんでもそれ分つたいのんは、その光子さんのお友達の知ってる人が綿貫と相愛の仲
 になつて、人頼んで結婚申し込んだところが、何や向うの親たちがええ加減なこと
 てちよつともハッキリせえへんのんで、本人同士は真面目に結婚望んでるさかい是非承知
 して下さいいうたら、栄次郎は実は訳あつて一生嫁持たさんつもりですいうのんで、だ
 だん調べたら、子供の時分にお多福風にかかったのんが元でたふくかぜ 辜丸炎こうがんえんになつた、——私、
 そんなことよう知りませんけど、お医者はんに聞きましたら、お多福風から辜丸炎になる
 いうことかてあるもんやそうですなあ？ 尤もそないいうてるだけで、ほんまは極道ごくどうし
 たのんかも分れしませんけど、とにかくそこから娘さんえらい綿貫憎んで、——そ
 ら考えたら可哀そうでもありますねんけど、そんなんやったら人に交際求めたりイヤらし
 い手紙くれたりせなんだらええのんに、「あんたは理想の妻や」とか何とか巧いことい
 てたばかりやない、散歩いうたらきつと暗いとこい連れて行ったりしたのんは、今から
 思たら自分がそんな体やさかいそないな事で満足してたのんで、つまりいうたら恋愛の仮
 面被かぶつて人玩具おもちゃにしてたのんや。けど綿貫はそういう時に、「僕は結婚せん先に肉体的
 の関係結ぶいうのん罪惡や思います」いうのんで、しツかりした人や思て感心してたのん

がなお腹立つ。そいでその娘さん「どうぞ秘密にしてやって下さい」いわれてましてんけど、口惜くやしまぎれにいろいろな人にしゃべったところが、外にもそんな目工に遇おうた人たあんとあるということ分つて来て、それが綿貫は、自分がええ男で異性に好かれるいうことよう知つてますさかい、何処いでも女の集りそうなどこいずうずうしいに出て行くのんで、誰でも一ぺんは引っかけりますねん。そやけどプラトニツク・ラヴやいうてどない熱烈に愛されても純潔守つてるのんで、大概のものは人格者やいうてなお崇拜して、何処までも釣られて行つて、際きわどいとこまで引つ張られてから極きまってぽんと捨てられてしまう。

「ふーん、あんたかつてそうやったのん？」「ふん、ふん、うちもそやってん」と、そないうう人方々から出て来て、誰に聞いてみても同じように、或る程度以上になったら妙にコソコソ逃げてしもて、そないうたらその様子が何や知らんけつたいやつた、ほんまのプラトニツク・ラヴやつたら接吻せつぶんするのんかて矛盾してるのんに、あれやつたらなにも純潔なことあれへん。みんな欺されてたあいだはそれに氣イつきませなんだけど、分つてしもたら、誰も彼もそないいい出して、その人らの捨てられたいうのんが型に嵌はまつたように、結婚申し込んだら、何やすうツと消えるように逃げられてしもた」いいますねん。そいで中には同情する人もありましてんけど、本人はそない仰ぎようさん山に自分の秘密知られ

てる思わんと、それから後も次から次い処女弄もてあそんで、知らん人は今でも常時じょうじ引っかけられてますのんで、「またステッキさん、あんな人掴つかまえてるし、……」「あのステッキ・ボーイやったら誰も羨うらやましいことないなあ」いうて、知ってるもんはええ笑い草にしてる。「うちこないだ、徳光さんきつとまだ知らんのやなあ思て、いつぞいうたげよ思ててんし。うそや思うのんやったら誰それさんにかて誰それさんにかて聞いて御覧。」「へーえ、そんなけつたいな人！　うちまだ接吻せつぶんしられたことないねんけど、そしたらもう直きしられるやろか」と、光子さんはわざと空惚そらとぼけて、その場アそいで済ましてしもてから、「今日友達にこないこないわれてんけど、ほんまやろか？」いうて、家い行んでからお梅どんに話しますと、「ほんまかうそかうそかうちやん知りやはれしまへんのか？」いうて、あべこべにお梅どんから尋たねられた。——そらお梅どんにしたら、もしもそんなことあったらそれ光子さん知らんといた訳ない思うのんでしょうけど、光子さんは異性に接触するいうこと始めての経験ですし、「子供生れたらいきませんから」いうてるのんで、別に不審にもせんといた、そやさかい友達にそないわれてもほんまかうそか自分には分らんいうのんで、お梅どんも始めてビックリして、「とうちゃんとお方ほんとやったらあんまり揃そろい過ぎてお雛ひなさんみたいやさかい、水さそ思てそんな悪口いうのん違いますやろ

か。誰ぞに調べてもらう訳に行きまへんか」いうて、それから内証で秘密探偵に調べさしたら、性的に欠陥あるのんはやっぱり事実に違いないいうて来たのんですねんて。尤も^{もつと}お多福風の結果かどうか分りませんねんけど、とにかく子供の時分からそうやつたらしいて、それがどないして探偵に知れたいうたら、光子さんとそないなる前^{なんち}南地で隠れ遊びしてたいうこと突き止めて、その方面調べてみたら、くろとの女でも一ぺん綿貫に引つかかったら大概なもん夢中になる、なんぼ男前ええとしたかてあんまりおかしい、何ぞ秘伝でもあるのんやないかいうて、一時はえらい評判になつて、関係あつた女たちに聞いてみても、誰も絶対に秘密しやべらん、そいで噂ひろがって行つて、いろいろな方法で詮^{せんさく}索するもん出来て来て、分つたところでは、初めごろ綿貫は自分に欠陥あるいうこと隠して遊んでましてんけど、そのうちに或る女が秘密嗅^かぎつけたいうのんは、その女もやっぱり同性愛の習慣あつたのんで、一人前の男やのうても女に愛されるいうこと綿貫に教^おせ込んだらしい。

そいから綿貫のこと「男^{おとこ}女^{おんな}」やとか「女^{おんな}男^{おとこ}」やとかいうようになったのんやそうですが、そないいわれる時分にはぶつり遊び止めてしもて、何処のお茶屋いも姿見せんようになつた。——私、その探偵の報告書あとで見せてもらいましたら、ずいぶん細かいところまでも行き届いて調べられてて、そんなこと委しいに書いてありましてん。

そいで隠れ遊びしてる間に、「自分かて何も悲観することない」いう自信ついて、今度
はしろとの女捜してるとこい光子さんが網に引っかけりなさった。――これは想像です
ねけど、きつとそうに違いないやろいうのんで、そんな人間の玩具になった思たら、も
う生きていられん氣イして、ほんまにその時光光子さんは死んでしまおか思いなさ
ったそうです、死ぬのんやつたら恨みいうてから死んでやろいう覺悟しなさって、
正式に結婚してくれへんか、あんたさいよかつたらこつちはちゃんと親の許し得た
あるねんし、と、そないいうたら何ちゆうか思ていいなさると、「僕かて望むとこ
ですけど今は都合悪い」とか、「もう一、二年たつてから」とか、何の彼のい
うて胡麻化^{ごまか}すのんで、「あんたほんまは、何年たつても結婚出来へん
のんやろ」いうてやりなさった。そしたら急に顔の色かえて「何でです？」
いうよつて、「何でや知らんこないこないの噂^{うわさ}ありますねんけど」い
いなさつて、こうなつたらうちもあんた捨てる訳に行かんよつて、一緒
に死んで頂戴いなさつたら、そいでもまだ「そんな噂^{うわさ}うそや」いうて
ましてんけど、探偵の報告書出して見せなさつたのんで、その時
いうたらなんともいえん顔つきして、「悪かったです、堪忍して下
さい」いうて、「一緒に死にます」いいましてんと。けどなかなか死ぬ
訳に行けしませんし、さんざん恨みいうてしもたらまた可哀そうにな
つて来て、ついぐずぐずに会う

てなさった。そういうのが、光子さんかて心の底ではやっぱり綿貫のこと忘れること出来んと、一日も長う一緒にいたいという氣イあったのんですやろが、綿貫の方でもそれ見取つて、自分は今まで、自分の体の秘密知れたら、どない愛してくれてる人でもきつと自分を捨てるやろ思て隠してた、自分に欠陥あるということ承知して愛してくれるのんやつたら、自分かて何で隠すもんか、自分はこんな体になったのん不仕合わせやとは思うけど、そない重大な欠点やとは思てえへん、それで男子の資格ないいうたら、男子いうもののほんまの価値何処にあるのんや、男子ちゆうたら外に現われた恰好かつこばかりできめるのんか、そんなんやつたら男子でのうてもちよつともかめへん、深草ふかくさの元政げんせい上人しようにんは男子の男子たる印しるしあつたら邪魔になるのんで、灸やいとすえたいうやないか、男子の中で一番えらい精神的な仕事した人は、お釈迦しゃかさんでもキリストでも中性に近かつた人やないか、そやさかい自分みたいなんは理想的人間や、そないいうたらギリシャの彫刻かて男性でも女性でもない中性の美現わしてあるのんやし、観音さんや勢至せいし菩薩ぼさつの姿かてそうやし、それ考えても人間の中で一番氣高いのん中性やいうこと分つて、自分はただ愛する人に逃げられるのん心配して隠してたんや、ほんまいうたら、恋愛にしたかて子供生んだりするのん動物の愛で、精神的恋愛楽しむ人にはそないなことやかい問題やあれへん。……

その二十二

……はあ、そろもう綿貫ちゆうたら、そんな工合ぐあいに議論し出したらなんぼでも都合のええ理窟りくつならべて、つべこべつべこべ果てしないのんです。そいでいいますのんに、光子さん死にやはるのんやったら、自分かて一緒に死ぬのん躊躇ちゆうちよせえへんねんけど、自分は死ぬだけの理由見つかれへん、ここで死んだら、ふん、あの男、不具者やいうこと悲観して死によつたいわれるのん口惜くやしい。自分はこれぐらいのことで死ぬような意気いき地じなしやあれへん、なんぼでも生きてて、立派な仕事して、普通の人間よりずっと偉大な超人やいうこと見せてやりたい、光子さんかて死ぬぐらいな決心するのんやったら、自分と結婚してくれたらええやないか、今もいう通り、自分みたいなもん夫にするのん恥や思うのん間違うてるし、一層高尚な精神的結婚やいうように考えたら、——尤もつともそないいうたところで世間の奴らは理窟分らんと、いろいろな妨害するやろさかい、自分がこんな人間やいうこと無理にこつちから広告して歩かいでもええ、一人や二人噂するもんあつたにしたかて、

誰もちやんとした証拠握つてるもんないねんよつて、もしもそんなこと尋^たねるもんあつたら、完全に一人前の男やいうて欲しい、——それが考えたらほんまに矛盾してますのんで、「ちよつとも悲観することない、超人や」いうぐらいやつたら、何にもそないに秘密にせんかて大手振つて歩いたらええのんに、何は措^おいても邪魔這^{はい}入らんうちに無事に結婚してしまお、それが第一の目的やさかいその目的果たすためには世間欺^{だま}すいうこともやむをえん、自分らは誰にも退^ひけ取らんいうことお腹^{なか}の中でさい承知してたら差し支いないいますねん。けど、世間はいつでも親たちまでそないあんじよう欺^{だま}す訳に行けへんいいなさつたら、自分の親は承知で嫁に来てくれる人あつたら、どんなに結構や思うか分れへん、反対するのんは光子さんの方の親たちだけやよつて、事情打ち明けても許してくれへんこと極^きまつてるのんなら、やつぱり隠しとかんといかん、光子さんさいその氣イになつたら隠しとかれへんいうことあれへん。「そんなことして分つた時どないするのん？」

「分つたら分つた時のことやあれしませんか、そないなつたら堂々と正義の立ち場説いて聴かして、絶対に外の人とは結婚せんいうて、それでも許してくれなんたら、その時こそ二人で姿隠しても一緒に死んでもええことあれしませんか。」それが本人は、自分の秘密仰山の人に知られてて、仇名^{あだな}まで附けられてるいう風に思えしませんのんで、くろとの女

別としたら感づいてるもんちよびツとよりないやろ思てますさかい、巧いこと隠し通せる
思てるらしいのんですが、そない都合よう親欺して結婚するいうこと、実際にはなかなか
出来ません。綿貫の方には親いうてもお母さんと、後こうけん見してる叔父おじさんとかあるだけ
やさかい、一ぺん光子さんが会うてくれて、「こないこないの訳ですよって、いずれ家か
ら表向きに申し込んで来たら黙って承知して下さい」いうたら、お母さんはよう分つてく
れる、叔父さんかて、わざわざ人の欠点あばいて折角の縁談ワヤにするようなことせえへ
んいうのんですけど、光子さんの考えでは、結婚申し込む先に身元調べるに違いないよつ
て、どないしたかて知れる、そんなことして平地に波瀾はらん起すより当分内証で会うてる方え
えやないか、ゼンたい綿貫の方には別に結婚せんならん理由ないので、そんな体で無理
な相談やいうこと自分かて分つてますねんけど、光子さんの方がそないいつまでも一人
でいられるはずないさかい、こんなりでいたらもうつい逃げられへんやろか、それが心配
で仕方あれしませんねん。それに口でいうのんとお腹の中とはまるきり反対で、出来るも
んなら一人前の男と同じに奥様持つて暮らして行きたい、世間欺すばかりやのうて、自
分の心まで欺して、ちよつとも外の男と違ちがたとこないように思てたいいう氣イあるばっか
りか、光子さんみたいな人一倍綺麗な奥様持つて、世間の奴らアツといわしてやりたい

う虚栄心まであるのんで、せえだいい焦^{あせ}つて「そんな一時逃^{のが}れいうて、ええ縁談あつたら行くつもりやろ」いうようなイヤ味いいますねん。それで光子さんは、どない親にいわれともきつと余^よ所い嫁に行けへん、今のとこ差し迫った縁談あるのんでもなし、そのうち自分も二十五になつたら自由結婚出来るようになるし、きつとええ折あるやろさかいあまあもうちよつと辛抱してて、……そやなかつたら死ぬより外に道ないいうて、ようよう納得さしましてんと。

光子さんのその頃の気持、「ほんまのとこ自分にも分らん」いうてなさるのんですが、初めのうちはそないいうて宥^{なだ}めといて、どないぞして切れてしまいたい思てなさつたのんは確かですねん。会うたあとではいつでも後悔しなさつて、ああ、ああ、自分は仰山の女の中でも人に羨^{うらや}ましがられる器量持つてながら、あんな男に見込まれるやなんて何ちゆう情^{なさけ}ない身の上やろ、もうもう止めてしまいたい思いなさるのんですけど、そら不思議と、また二、三日も立つうちに自分の方から跡追ひ廻すようになってしまふ。そうかいうて、それほど綿貫恋しいのんかいうたら、精神的にはええ思うとこ一つもない、顔見るのんさいムカムカするような氣イして、卑^{いや}しい奴^やツちや、見下げ果てた奴^やツちや、いう風に、お腹^{なか}の中では常時激しいに輕^{けい}蔑^{べつ}してる。そいで毎日のように会うてるとは会うてるけど、

二人の気持シツクリすることめつたにのうて、いつでも喧嘩^{けんか}ばかりしてて、その喧嘩いのんが、自分の秘密人にしゃべったやろとか、いつまで待たす氣いやとか、例のキマリ文句で、愚にもつかんようなこと取り上げては疑がい深いにちやにちやした口調でいいますのんで、……光子さんかて、そない厭^{いや}がること用もないのんに人に話したら綿貫だけの恥やあれしませんし、そんなくらいなこといわれいでも分つてましてんけど、そうかてお梅どんだけにはいわんちゆう訳に行かんのでいいなさったのんを、「何で女子衆みたいなもんにしやべった」いうて、その時ばかりはえらい喧嘩になつて、光子さんもちよつとも負けてんと、「あんたは偽善者や、いうこととすることまるきり違てるうそつきや。あてらのしてる事にほんまの恋愛らしいところだけでもあれへん。」と、思い切りいうてやりなさつたら、とうとう文句に詰まつてもて、血相変えて「殺す」いいますのんで、「殺すのんやつたら殺したらええ、あてはどうから死ぬ覺悟きめてる」いいなさつてじつと眼エつぶつたなり、動こともしなされしませなんだ。そしたら綿貫の方が氣い吞^のまれてしもて、「悪かつたよつて堪忍して下さい」いいますのんで、「あてあんたみたいな恥知らず違うよつて、こんなこと世間に知れたら、あんたよりあての方がどない難儀するか分れへん、もうもういつでもそんない係りいわんといて頂戴」いいなさつて、ぎゅうぎゅ

ういう目に遇わしなさった。そいから綿貫だんだん頭上らんようになりましてんけど、それだけかいつて陰険になって、蔭では一層疑がい深ふぶこなりましてん。

ところがちようどそないなつてゐる時にM家との縁談持ち上った。——その時分光子さんがあの技芸学校に行つてなさつたいうのは、綿貫と会う機会作るためやったのんですが、私との間に同性愛やいう噂立つたのんは実は誰の仕業しわざでもない、光子さん自身がそないいい触らしなさつて、匿とくめい名のハガキ投書しなさつたのんですねんて。何でそんなことしなさつたいうたら、縁談のこと聞いてからいうもん綿貫の焼餅が激しいて、そんなことあつたら唯ただでは置かん、今までの関係一いっさいがっさい切合財新聞い素ツ葉すは抜いてやるいうて脅迫しますし、それでのうても競争の形になつてゐる市会議員の家の方で手工廻して、光子さんのアラ捜しして、こつちの縁談滅茶々にしようとかかつてゐるのんで、自分はもちろんM家に行こいう氣いなきかい競争に負けるのんかめへんけど、そんなことから綿貫との秘密探り出されて、ぱつと知れ渡るようになったら、それが何より恐い。そいでつまるところ、ほんまのこと知れんように、わざと同性愛の噂立てた。まあいうてみたら、私ちゆうもん利用して世間の眼工くらましなさつた。光子さんとしたら、「ステッキ」やとか、「男女」やとかいわれてるものと噂立つより、同性愛やいわれる方が辛抱出来る、人に後うしろゆび指ささ

れたり物笑いの種にならんと済む思いなさいましてん。そんな工合で初めはただ、私が光
 子さんモデルにして絵工書いてるいうこと聞きなさったり、道で擦れ違^{すちご}た時の素振^{そぶり}や何か
 から、ふつと思いつきなさっただけですねんけど、私の方があんまり真剣で熱烈でしたさ
 かい、だんだん利用する心持からほんまの愛情に変わって行きなさった。そら私かて全然純
 真なとこばかりやあれしませんが、それでも綿貫とは比べ物にならんほど精神的な気
 持ありましたよつて、知らん間にそれに絆^{ほだ}されなさつて、——それと一つには、綿貫みた
 いな誰にも相手にしられんような人間の慰め物にしられるのんと、同性の人から観音様の
 絵にまで画^かかれて崇拜^{はい}しられるのんとはえらい違いですよつて、私というもん出来てから
 持ち前の優越な感じ、——自尊心戻^{もど}つて来て、始めて世の中が明^あなつたような氣イしたい
 いなさいますねん。そいで綿貫にはこないこないの噂あるのん幸いにこないな人道具^{つこ}に使^{つか}
 てる、そないした方が家空^あけるのんにも工合ええさかいいうてなさったのんですが、それ
 をそんまり真^まに受けるような綿貫と違いますよつて、うわべは「そうですか、そらその方
 がええでしょう」いいながら心の中では嫉妬^{しつと}の刃研ぎ^{やいば}すましてて、何ぞ事さいあつたら私
 との仲割^さいてやる思てたのんに違いないいうのんは、あの笠屋町で着物盗まれた事件にし
 たかて、今考えたらどうも怪しい、あの特別の座敷で博奕^{ばくち}打^{うち}てるもんあつたとか、刑事

乗り込んで来たとかいうのんはみんな根工も葉アもないことで、あそこ彼処の家に頼んで不意に光子さんビツクリさして、逃げてる間に着物すつくり隠すように初めから段取り極めきといた。——それが、あの日の昼、私のとこい来なさる前に三みつこし越い買い物に行きなさつたら偶然綿貫に会いなさったので、こいから柿内の姉さんとこ行て帰りにずっと笠屋町い廻るさかい待つて欲しいうて別れなさった。そいで綿貫は揃いの着物着てなさったこと知つてましたよつて、こりやええ機会や、あの着物ないようにしてやつたらどうしても私のとこい電話かけるようになる、そしたら私かて愛憎あいそ尽かすやろいうように考えて待つてる間にあの家のもん買収してこないこないせえいうといた。——綿貫やつたらそのくらのこと企たくらまんとも限らんし、企らむだけの時間もあつた。そやなかつたら何ほ何でも人の着物着て警察い連れて行かれるいうことあんまりおかしいし、光子さんとこいも綿貫とこいも、そんなり警察からなんにもいうて来なんだいう訳あることない。けどその時はまさか計略にかかったとは思いなされしませんさかい、どないしてええのんか顛倒てんとうしてしもてると、「こないなつたら、柿内さんとこい電話かけて揃いの着物取り寄せるよりしよがないでしょ」と、綿貫の方からいい出した。——綿貫の話とはそこえらい違ちがてて、光子さんはもう取られたのんが揃いの着物やつたいうことさい忘れてたくらい慌あわててなさ

って、なかなかそんなこと考え出せるどころやなかった。綿貫にそないいわれてからも
 「姉ちゃんに頼める義理やない」いいなさいましてんけど、「それ厭いややったら僕と一緒に
 逃げてくれますか、それとも電話かけますか」いわれて、絶体絶命の場合になって、こん
 な男の道連れになるのん死ぬよりイヤや思いいなさらしたら、後あと先さきの分ぶん別べつもないよになっ
 て夢中で電話口い走って行つた。それでもあの時、近所のカフェエに来てもらうとか、綿
 貫先帰してしまうとか、あんなとこ私に見せんかて何とかもうちよつとええ工夫あつたや
 ろのんに、うろたえてたらそんなこと思いつけませんし、そこが綿貫の狙ねらいどころですよ
 って「早はやしなさい、早はやしなさい」いうて急せぎたてますし、そのうちに私に来られてしても
 「合あわす顔かほない」いいなさらしたら「僕ええようにいますさかい隠れてなさい」いうて、
 いかにも自分は光子さんの恋人やいう顔つきして、いろいろなこと私にカマかけて聞いて
 しました。「ふん、そやねんし。ほんまいうたら、あの人あの時まで姉ちゃんのことそな
 いよう知つてエへんなんでん」いいなさいますねん。

その二十三

「へーえ、そしたらあの時カマかけられてたのん？『そら光子さんの奥様に対する気持ちいたら、全く真剣でしてなあ』いうて冷やかしたりして、人馬鹿にしてる思ててんけど。」

「ふん、ふん、わざとそんなこというて、なるだけ姉ちゃんに腹立たそとしててんし。あて襖ふすまの蔭で聞いてて、まあ何ちゆううそつきやる思てんけど、あんな時に弁解したかてなかなか信用してもらわれへんしなあ。……」そいで光子さんは、計略にかかったいうことに氣イつきなさつたら、忌いま忌いましいてならんとい、それからちゆうもんもう邪魔なもんないようになつたのんでおのことひつこうに附まき纏まとて、何ぞいうたら「あんたこそうそつきや、巧いこというて僕だ欺ましてたやないか」いうて、私とのこといつまでも根工に持つて、「きつとあんなことぐらいで絶交するはずあれへん、今でも何処ぞで会うてんとは限らん」いうて、自分で会わさんようにしといたくせに、何処までも疑うがわんといられん性質やのんか、それともわざと空そら惚とほけてそんな嫌がらしいうのんか、「あんたも男らしいもない、済んでしもた事そないくどくどいわいでもええ」いいなさつても、「いやいや、済んでしもたことやない、きつとあの人に僕の秘密知らしたあるやろ」いうて、ほんまのそこはそれ一番恐こわがつてて、私に知れたら復讐ふしう的にどんな妨害するか分れへんいま

すのんで、「邪推もええ加減にして欲しい。あんたちゆうもんあることさい隠してたのんに、なんでそんなことしやべる隙ひまあるやろ。あんた姉ちゃんに会うたんやったら大概様子で分つたやろのんに。」「いや、その様子に怪しいとこあつた」いうて、自分がカマかけたりしますさかい人の態度まで疑ごうて、——それが、ただの嫌がらしと違ちがて、綿貫にしたら疑がう訳あるいうのんは、自分かて光子さんと私との仲感づいてたように、私にしたかて綿貫と光子さんとの仲知らんといたいいうはずがない、知つて今まで焼餅も焼かんといたのんは、「あの男は不具な人間や」いうこと聞かされて安心してたのんやろ、そやなかつたらまさか黙つてる訳あれへん、そない思て、それがお腹なかにありますのんで、私を笠屋町の宿屋に呼んだいうのんも、自分はしよつちゆうこんなとこで光子さんと会うてるぐらいで、性的欠陥のある男やないいうこと見せつけるつもりもあつたのんです。光子さんかて、「どうぞ姉ちゃんと別れて下さい」と正面から手工ついで頼まれなさつたら、「イヤ」とはいえん義理ですのんに、あんじようペテンにかけられた上にそないエゲツのう疑がわれたら、意地でも謀はかりごとの裏かいてやりとうなりなさるし、あんな心にもないことして仲悪なかわるなつた思いなさつたら、なおのこと未練残つて、どないぞして仲直りしたい、せめて一ト眼だけでも会いたい思いなさいましてんけど、訪たねて行つてもたやすうは会うてもらえ

んやろし、会えたところでどないいうていい訳しよう、今更何いうたにしても氣持直してもらえへんやろと、いろいろ考えなさった末あの本のこと思い出しなさって、……あれはほんまに光子さんには用のない本で、やつぱり中川の奥様に貸しなさったのんやそうですが、あの時のことは、ふつとそれからヒント得なさったのんで、SK病院の名前騙^{かた}つてこない電話かけよ、こんな時にはこないしという工合^{ぐあい}に、何日もかかって一所懸命考え抜きなさった。もちろん誰にも相談せんと、自分ひとりであんだけの段取り工夫しなさって、ただ電話かけるのんに女の声やつたらいかん思て、お梅どんに訳話^{わけ}して出入りの洗い張り屋の男頼んだ。「あてかてあの時姉ちゃんを取り戻^{もど}きという一心で有るだけの智慧^{ちえ}絞^{しぼ}つてんし。今考えたらあんなえらい騒動して、眼工^{めく}吊^つり上げて見せるやなんて、役者でもないのんにようあんなことしたなあ」いいなさって、そら、あの時のことは確かに私を計略^{けいりゃく}にかけた。欺^{だま}したいわれても仕方ないけど、それも自分がどんな氣持でしたかいうこと直きに分つてもらえるやろ、そしたら私かて可哀^{かな}そうなところ思えきつと憎いとは思えへんやろと、そない考えてたいいなさいますねん。

ところが私と仲直りしたいということそれから間ものう綿貫に知れた。光子さんかてもとと綿貫のたくらんだことあべこべに引^ひつくり覆^{かえ}して見せつけてやろという氣イあるのんで、

別に隠そともしなされへんばかりか、知れたらどんな顔するやろ思て待ち構えてなさつたところですさかい、「あんたこの頃、またあの人とより戻ったんやろ、空^{そらとほ}惚けててもちやんと分つてゐる。」「ふん、そんな事ちよつとも惚けてエへん」と、落ち着き^{はう}払てなさつて「会わんといたかてどうせ疑がわれるぐらいなら、会うた方が優^ましや思てん。」「何で僕に内証でそんなことした？」「内証やあれへん、あてどない邪推しられたかて、せエへんことはせエへんいうけど、したことはしたいいうし。」「そうかて今日まで黙つてたやないか。」「そらいうまでもない思たさかい黙つてた、何も一々自分のしたこと報告せんならん思てエへんもん。」「こんな大事なこと報告せんちゆう法あるもんか。」「そやさかい、したことはしたいいうてるやないか。」「ただ『した』だけでは分らん、孰^{どつち}方から仲直りしたのんかちやんとはつきりいうて見なさい。」「あての方から訪^たねて行つて、悪かつたいうて堪忍してもろてん。」「何やて！ なんて詫^{あや}まりに行くことある？」「何でいうて、こんなとこいあんな時間に呼び出しといて、着物借つたりお金借つたりして、放つとくいう法あるかいな。そんな義理の悪いこと、あんたは出来てもあてはようせん。」「借つた物はあの明くる日、僕が郵便で返してやった。あんな汚^{けが}らしい女にそれ以上礼いう必要あるもんか。」「ふーん、そしたらあの時姉ちやんの前で何ちゆうた、『僕の一

身はどないなつても、この場アさい無事に済んだら御恩は一生忘れしません』いうて、その汚らしい人に頭下げて、手工合わして拝んだやないか。そやのんに今頃ようそんなこといえるなあ。第一借ったもん郵便で返すやなんて、もし旦那さんの手工にでも渡ったらどない迷惑しなさるか、汚れてたかていエへんかて世話になったもんは世話になったもんやのんに、何ちゆう恩知らずやろ。あんたそんなこというたら、あの晩のことかて手妻の種^{たね}見えるような氣イするし。…「そないいうてやりなさったら、ぎよツとした顔して、

「手妻の種て何のこつちや」いいますので、「何のこつちや知らんけど、何もあれから絶交したともいエへんのんに、あんた独りで絶交したもんと極^きめてるいうのんけつたいやないか。そない自分の思う壺^{つぼ}に嵌^はまる思たら間違^{まちが}てるし。」「何や一体、あんたのいうてること僕には分らん。」「あのなあ、あの時の着物あんなり警察から戻つて来エへんのん何でやろ?」「今そんなこと問題にしてエへん。」「そないいいながら、チクリと痛いところ刺されたのんで、「何をいうのんか今日はあんた興奮してるで。まあまあ、その話ゆつくり聞こ」いうて、照れ隠しにニヤニヤ笑て胡麻^{ごま}化してしもた。けどそんなりで放つとくよくなあつさりした男違いますよつて、二、三日したら直きまた持ち出して、今度は下手^{したて}に出て光子さんの機嫌取りながら、「あの奥様よつぽど怒つてたはずやのんにどんなことい

うて丸めたのんか、後学のために聞かして欲しい」とか、「そんな優しい顔しててあんたはえらい手管上手や」とか、「くろとも及ばん凄腕や」とか、いろいろなこというておだてたり皮肉いうたりしますのんで、ええ加減なところで妥協しといた方がええ思いなさつて、実はこないこないの計略で仲直りしたいこと話してやりなさった。「あんたそんな狂言書いて人欺すこといつの間アに覚えてん?」「そらあんたに教^おせてもうてん。」「阿^あ呆^ほいいなさい、僕にもちよいちよいその手工使てるねんやろ。」「ほらまた邪推始まった。あてこんな人の悪いことしたん今度だけやわ。」「そないまでしてあの奥様ときようだいになりたいいうのん、僕には分れへん。」「けどあんたかてこないだ姉ちゃんに『僕はちよつともかめしません、これから三人仲好うしましょ』いうてんやないか。」「そらあの時あの人怒らしてしまたら難儀やさかい、あないいうとてん。」「うそいうてるわ。あんた姉ちゃんにカマかけたんやないか。あの晩の細工ちゃんとあてに分ってるし。」「そんなこと僕一向知らん。」「あんたよう聞いて頂戴や、一寸の虫にも五分の魂いうことあるよつて、蔭い廻つてけつたいな事しられた思たら、誰かってそんなりにしとけへんさかいになあ。」「僕がけつたいな事したやなんて、何ぞ証拠でもあるかいな。あんたこそ邪推してるやないか。」「邪推なら邪推にしといたらええ。けどあんたかってそないいうの

んやったら、ちゃんと、約束した通り姉ちゃんと付き合うたらええやないか。あんたは疑ごうてるか知らんけど、あてかてあんたのイヤがるようなこと決して姉ちゃんにいエへんし。……」そこで光子さんは即座に氣転利かしなさつて、私のとこいあんなこというて来たのんも一つは綿貫のイヤがつてること何処までも隠して、一人前の人間やいうこと私に信じさすためやった、自分はそないまでして綿貫の名誉守つてゐるねんさかい、綿貫さいもうちよつと寛大な氣持になつたら、この先三人が仲好うして行かれへんいうはずないやないか——と、一方では綿貫の痛いとおさえて、賺かしたり威嚇したりしなさつて、

「あんたと此処で会うてゐる以上は、姉ちゃんにも来てもらう」いいなさつて、私との交際には絶対に嘴入れんといほしい、ぐずぐずいうのやったら綿貫捨てても私捨てへんいう覺悟見せなさつたのんで、とうとう泣き寝入りになつてしまひましたん。

その二十四

「……なあ、姉ちゃん、なんぼ親しい間柄かてこんなこというたら自分の恥やし、愛

憎^{いそ}つかされるかも分れへん思てじつと辛抱^{しんぼ}しててんけど、もうもう今日は何も彼もいうてしもてんし。あてぐらい不仕合せなもん世の中にあるやろか。」——そないいいながら私の膝^{ひざ}の上い打つ伏しなさつて、涙でそこがびしょびしょに濡^ぬれるぐらい激しいに泣きなさるのんで、あんまりのことに何ちゆうて慰めたげたらええのんやら、——なんせ私の知つてる今日までの光子さんいうたら、花やかで、勝ち気で、いつもプライドに充^みちた眼工^{かが}耀^{かが}やかしてなさつて、そんな辛^{つら}い思してなさつたとばかりとも見えませんのに、その高慢な、女王みたいにエラそにしてなさつた人が、プライドも何にも放つてしもて泣き崩れてなさる様子だけでも、ほんまに思いの外ですねん。光子さんにいわしたら、自分は強情張りやよつてどない苦しいことあつても人に見透^{みす}かされんように努めて来てんけど、それでも姉ちゃんいうもんなかったらもつと陰気になつてたやろのんに、姉ちゃんのお蔭で暗い運命に打ち克^かつだけの勇氣出た、いつでも姉ちゃんの顔さい見てたら氣が晴れ晴れして一切のこと忘れてたけど、今日ちゆう今日はどういう訳か悲しい思ひ込み上げて来て、意地にも辛抱出来んようになって、長いあいだ泳^{こら}えてた涙の堰^{せき}が一ぺんに切れた。「なあ、姉ちゃん、どうぞどうぞ、……頼りにするのん姉ちゃんばかりやさかい、こんな話聞いても愛憎^{あいそ}尽かさんといてエな。」「なんで愛憎^{あいそ}尽かすもんか。いいにくいことよういうて

くれたなあ。あてかてそない頼りにされたらどない嬉しいか分れへん。」そしたら光子さん氣イ弛ゆるみなさったのんか、一層止めどものう泣きなさって、自分の一生は綿貫のお蔭で滅茶々にしられた。もう行末に何の望みも光明もない、生涯埋うもれ木で暮らすばかりやいいなさって、自分は死んでもあんな男と結婚せエへん、どうぞ助ける思てあの男と手エ切れるようにしてくれへんか、何ぞええ工夫あつたら教おせて頂戴いいなさるのんで、「こないなつたらあてかて正直なこというけど。ほんまいうたらあて栄ちゃんかきつけと兄弟の約束してしもて、こないこないの書付かきつけまで交かわしてんし」と、昨日の出来事みんな話したげたら、大方そんなことやる思てた、綿貫の奴、何処まで行つても知られてエへんかいうこと疑ごうてて、わざとそないなこというて姉ちゃん試ためしてみといてから、自分捨てられたら姉ちゃんも一緒に抱き込んでやろいう氣イや。……そないいうとなるほど、「光ちゃんに子供出来たいうこと初耳です」いうたとき、「へえ？ 初耳？」いうて血走つた眼工して、

「何で子供出来るはずないいいましたか、そんな體質やいうのんですか」と唇の色まで変えてたのんが、あの時にもけつたいな人やなあいう感じしましたし、それに思い当るのんは、話の中途でためいきついては、「ああ、ああ、僕は何ちゆう不幸な運命の下に生れたのんでしよう」と、二へんも三べんも芝居のセリフみたいな節つけて繰り返したあの言葉、

——あの時はなんや、人の同情求めるためにわざとあんなセンチメンタルな声出してる思
 いましてんけど、それがやつぱり、なんぼずうずうしい男にしたかてお腹なかの中では自分の
 不仕合わせ嘆いてるのんで、人にいわれん淋しい氣持が自然と外に現われたのんかも分れ
 しません。けど「何でそないに妊娠したこと隠すのんでしよう？ お姉さんにまでウ
 ソつかないでもええやありませんか」とか、「子供生れたら何処いなどやってしまういう
 て、光ちゃんのお父さんかんかんになつて怒つてる」とか、巧いこというて探り入れて、
 ——それもええけど、「これ読んでみたらお姉さんの方が僕より得してる、僕の誠意のあ
 ることこれでも分りましたやろ」いうやなんて、もともと起る氣づかないのんやったら、
 どんな条件かて書けるやあれしませんか。そんなありもせんこと種つこに使て、こつちの信用
 つないだりして、どないな氣イやろ？ どんな場合にあの約束役に立たすつもりやねんや
 ろ？ そらきつと「姉ハ弟ト光子ト正式ニ結婚セシムルタメニ努力シ」いうのんと、「弟
 ガ捨テラレタル時ハ姉ハ光子ト交リヲ絶チ」いうのんと、「兩人ハ他ノ一方ノ承諾ヲ經ズ
 シテ無斷ニ光子ト逃亡シ、所在ヲ晦くらマシ、モシクハ情死スル等ノ行為ヲナサズ」いうのん
 とが、——殊にこの一番しまいの条件が眼がん目もくやのんで、その外のことは勿もつ体たいらしいに
 見せかけるための附け足りやと、光子さんはいいなさいですけど、そいだけのことにわざ

わざこんな尤^{もつと}もらしい形式取り交して、あんな大騒ぎせいでもよさそうなもんですのんに、そんな法律くさい文句並べるのんがあゝの男の癖なんやそうで、そないいうたら、この頃光子さんの綿貫に対する態度だんだん焼け糞^{くそ}になつて来なさつて、どないなとなれいうような素振^{そぶり}見せなさるもんですさかい、綿貫の方も近いうちにただでは済まんような事起るいう予覺感じてて、蔭い廻つて何ぞ悪さするような様子見えてた。そいでこないだ三人で松竹座い行つた時にしたかつて、「あんたそないひがんでんと一ぺん姉ちゃんに会うて御覽、そしたら姉ちゃんどんな人やか、あんたの秘密知つてるかどうか、大概話しぶりでも分るやろ」いうて連れ出しなさつて、そないしといたら、内証^{うちしやう}でけつたいなこいわれたりする危険ないやろ思いなさつたのんですけど、あんな工合^{ぐあい}に妙にこじれて口も利かなんだのんですと。「そしたらあない空々しいしてて、蔭でそうツと手工握^てろいうことあの時から考へてたのんか知らんで」「そらどや知らんけど、あてがあの人放^{はな}つたらかして姉ちゃんと逃げるのんやないかいいうで、常時^{じようじ}心配しててんし。」「きつとあてを道具に使て結婚さいしてしもたら、もうあんたみたいなもん用ないいうて放り出すつもりやつてんなあ。」「結婚々々いうてるけど、それかて自分で自分欺^うくためやのんで、ほんまに結婚出来るとは思てエへんねん。あんまり無理なこというたら、あて生きてエへんこと分つてるし、姉

ちゃんちゆうもんある方が外の男に取られる気づかない思て、今のまま出来るだけ続けていたいねんし。」……そいで光子さんは、今日も綿貫が待ってるねんけど、今日ばかりはどないしても会うのんイヤやいいなさつて、何ぞ工合いよう行いなしてほしいいいなさるのんですが、今急にそんなこというても怪しまれるばかりやし、後がかいつて悪いさかい、そないいわんと今日のとは何もこんな話せなんだことにしときなさい、そのうちにあてがきつときつと手切れるようにしたげる、あて死んでも光ちゃんの命助けんと置かん、まさかの時はあの男殺してやるいうて、私も一緒に泣きながら力づけたげて別れましてん。

それが、……そう、そう、その誓約書の日附け見たら分るんですが、……そうです、そうです、これが七月十八日ですよつて、光子さんとそんな話しましたのんが多分明くる日の十九日のことで、ちょうどその時分夫の方は忙しかった事件やと片附いたのんで、何処ぞい避暑に行こやないか、ことは軽井沢いでも行つてみよかいましてんけど、私はなかなかそれどこやあれしませんさかい、光子さん毎日々々淋しがつて、こんな体で自分何処いも出られへんのんに、あんたほんまに羨うらやましいいなあいうてなさるし、行くのんならもうちよつと涼しいになつてから箱根いでも連れて行つて欲しいいうて、夫が何や物

足らん顔してるのんにも 頓^{とんちやく} 着^{やく} せんと、そこから半月ほどうもんはいつつもいつつも
 夫の出かけるのん待ちかねて笠屋町い飛んで行きましてん。何しろ私にしましたら、あれ
 からこつち光子さんが別人みたいにしおらしいに見えて、今までは美しい悪魔みたいに思
 われてたのんが、今度は急に驚^{わし}に狙^{ねら}われてる鳩^{はと}みたいに思われて来て 尚^{なおよ} 更^{さら}いとしさ増し
 たとこい、会うたんびに心配そうな様子してなさって前のような花やかな笑^え顔^が見^みせなさる
 こと一日もないのんで、まさかとは思っても短気なことでもしなさらえらいこつちや
 思たら、気が氣やあれしません。それで私、「光ちゃん、あんた栄ちゃんの前ではせめて
 もうちよつと浮き浮きしてなさいや、そやなかったらまた感づかれてどんなこといい出す
 か分れへん」いうて、「きつと、きつと、世間に顔向けならんように叩^{たた}きつけてやるさか
 い、死ぬほどつらいことあつてもちよつとの間辛抱してなさい」いいましてんけど、さて
 どないしたら綿貫叩きつけること出来るか、人欺^{おとし}したり陥^{おとし}れたりする計略^{むく}は向^むの方が上手
 ですさかい、なかなかええ考出て来^けえしませなんだ。私はそないいうてるうちにも、また
 綿貫がろうじの外で待ったりしてたらどないいい抜けしたらええのんやら、あんな誓約書
 の条件守らんかてちよつとも疚^{やま}しいことあれしませんが、それでも約束破ってるのんが
 やっぱり何や済まんような氣イしてて、いつもろうじ出て来るとき、またあのぞつとする

ような声が後ろから「お姉さん」いエへんかとビクビクしてたのんですが、ええあんなばい
 にあんなりになつてますのんで、あんな男のこツちやさかい、誓約書さい交してしまたら
 兄弟も糞くそもあつたもんやない思てるねんやろ、結局その方がこつちも助かる思てましてん。
 そうこうしてるうちに光子さんは毎日日々「姉ちゃんどないぞしてくれへんか、もう一日
 も辛抱出来へん」いいなさいますし、自分は最後の手段として、わざと綿貫誘い出して駈か
 け落おちしように思てる、その時は何処い逃げるいうこと前に私に教おせとくさかい、新聞に出
 されたりしてえらいことになつた時分に、もうええ頃や思たら掴つかまえに來てほし、そない
 したらなんぼ綿貫かて二度と寄り附くこと出来んやさかい、自分の名誉も傷きずけること覺悟
 の上でやつてみせる、「こつちで相談してることうすうす嗅かぎつけたらしいよつて、やる
 のんなら早い方がええ」いいなさるのんで、嗅かぎつけたらあの誓約書たて櫃に取つてあてに何
 とかいうて来るやろ、まあ、まあ、そんな非常手段最後まで取つときなさい」いうて、――
 ――ほんまにあの時分、よつぽど思案に余つてしもて、先生のとこい智慧ちえ貸してもらいに上
 ろか思たぐらいいすねんけど、そんな厚かましいことようせえしませんし、お梅どんに聞
 いてみてもええ考ないいいますし、いつそのこと夫の力借ろかしらん、うそついてたこと
 或る程度までは白状して、ただ綿貫の迫害免れるような法律的の手段ないもんか知らん、

話しように依つたら夫かて光子さんに同情寄せんこともないやろと、困つた揚句そんなことまで考えましてん。ところがその夫が、或る日突然、ちようど私が行つてゐる時に電話も何もかけんといひて笠屋町の宿屋い訪ンねて来たやありませんか。それが事務所の帰りしな、四時半ごろのことで、二階で光子さんと話してましたら、「奥さん奥さん」いうて慌てて仲居さんが駈け上つて来て、「今奥さんの旦那さんが見えになつて、お二人さんに会いたいというたはります。どないしまひよ」いいますのんで、「何でやって来たんやろ」とぎよツとしながら顔見合はしましてんけど、「とにかくあて会つて来るわ、光ちゃんそこにすツ込んでや」いうて、玄関い降りて行きましたん。

その二十五

「やあ、えろう分りにくいとこやなあ」と、夫は格子のところに立つて、実は今さつき、伊勢の四日市い帰る人あつて湊町の駅まで送つて行つて、戻りしなに心齋橋筋散歩してたら、光子さんのいなさるとこ確かこの辺やつたなあ、きつとお前も来てるやろ思た

のんで、急に訪^たンねる氣イになった。別に用事あるのんと違うけど、いつもお前がお邪魔に上^{やっかい}つて厄介になるのんに、近所まで来て顔出しせんのも悪いような氣イするし、それに光子さんどないしてなさるか、お見舞いかたがた是非お目にかかつて御礼いたい、差支いなかったら何処ぞで晩の御飯御馳走^{ごちそう}したい思うねんけど、ちよつとも外い出なさるこ^でと出来^でへんのんやろかと、何氣ない風^でしていうのんですが、どうもそれだけやないみたいな氣イして、「この頃は太分目立つようになってなさるよつて誰にも会わんようにしてなさるし、なかなか外い出るとこやあれへん」いいましてんけど、「そやったらまあ、会うだけでも会うて行きたい」いいますのんで、それでもいかんいう訳に行けませんさかい、「どないいいなさるか聞いて来るわ」いうて、「光ちゃん、こないこないいうねんけどどないしよう。」「どないしよう、ほんまに。姉ちゃんどないいうたん?」「太分目立つようになつてよつて誰にも会いなされへん云うてんけど、是非ちよつとでもいうてるねん。」「何ぞ訳でもあるねんやろか。」「さあ、あてもそない思うねんし。」「あていつそ会うわ、そんなんやつたら。……今お春どんと相談したら、帶上げお腹^{なか}の上へ締めてその上から着物着なさつたらええやろいうよつて、そないするわ。ほんまに懐^{ふところ}い綿詰めるようになつてしもたなあ」いいなさつて、そのお春どんいう仲居さんに帶上げ借つて、「お客

さん階下の部屋い通して待つててもろて」いうて、その間に私が手ツ伝うて身ごしらひし
 てましたら、またお春どん上つて来て、「そない申しましたけど、一分か二分でええさか
 い玄関でお目に。懸るいやはつて、上りやはれしません」いいますのんで、そやつたら早
 せんならんいうて大慌てに慌てて二人がかりで着せましたものの、冬やつたらどないなと
 胡麻化せるのんですが、肌襦袢の上に明石の単衣もん着てなさるだけやのんで、どない
 しても妊娠のように見えません。「姉ちゃんあてのこと何力月やいうといたん？」「何
 力月いうたか忘れてしもたけど、人眼につくいうたぐらいやし、六力月か七力月になつて
 んと工合悪いなあ。」「これぐらいやつたら六力月に見えるやろか。」「もつと全体が円
 うに膨れてなんだらいかんし。」「そんなこというて三人ともクスクス笑い出しながら、
 「なんぞもうちよつと持つて来まひよ」と、またお春どんがタオルやら何やら持つて来ま
 したので、「あんたも一ぺん下い行つて、とうちゃん誰ぞに見られたらいかんいいなさ
 つて、めつたに玄関いも出て来なされしませんさかい、とにかくお上り下さいいうて、な
 るべく暗いあんまり見えんような部屋い入れといて頂戴」いうて、かれこれ三十分も
 待たしといてから、やつとどうにか六力月のお腹拵えて行きましてん。「そんなりでかめ
 へんいうたんやけど、浴衣がけでは失礼やいいなさつて、着物着かえてなさつたのんで、

……」と、そないいいながら夫の様子窺うてますと、折れ鞆かばんに置いて、キチンと洋服の膝ひざがしら揃そろえてすわって、「かいって御迷惑か思いましたけど、あんまり御無沙汰ごぶさたしてますし、一ぺんお見舞いに上らんなん思てたといちやうどこの前通りかかりましたさかい」いうて、気のせえか光子さんのお腹の辺ジロジロ見てるみたいですね。光子さんは「いいえ、うちこそいつも姉ちゃんに我が儘ままばかりいいまして——と、自分のために避暑に行くのん止めてしまいなさつたのん気の毒やとか、姉ちゃんのお蔭で淋しい思い慰めてもろて、大層有難い思てるとか、あんまり口数くす利きなさらんと殊しゆ勝しょうらしい聞えるようにあんじよういいなさつて、団扇うちわで帯の上のとこ隠すようにしてなさるのんですが、お春すみどんが氣イ利かしてくれたと見えて、昼間でも電気点ともさんならんような薄暗い部屋の一隅すみの方にすわってなさつて、なんせ風通しの悪い上にお腹にいろいろなもん詰めてなさるよつて、ずくずくに汗かいてはあはあ息してなさる恰好かっこういうたら、いかにも本物らしいて、「巧いこと芝居してなさるなあ」思いましたん。

夫は直きに座ア立つて、「えらいお邪魔しました、どうぞまたお出かけになれるようになったら遊びに来て下さい」いうて、「もうおそいさかいお前も一緒に帰ったらええ」いますので、「何ぞ訳あるに違いないよつて今日はこれで帰る。明日きつと待つてて頂

戴」と光子さんにそうツというといて、しゅしゅ連れられて出て来ましたら、「バスに乗
 って行こ」いうて四つ橋の停留場い出て、そこから阪神で家い帰るまで、夫は不機嫌に黙
 ってしもて、何いうても生返事しかせえしません。家い這入ると洋服も脱がんと、「ちよ
 つと二階いおいで」いうてどんどん上って行きますのんで、こつちもあらかた覚悟きめて
 附いて行きますと、寢室のドアぱたと締めて、「まあそいおかけ」と差向いに椅子
 にかけて、暫くは物もいわんと、ほつと息ついて考え込んでるのんです。「あんた、
 今日、何で突然あんなとこ来たん？」と、重苦しい空気破るために私の方からそないい
 うてやりましたら、「うむ、……」いうてまた考えてて、「お前に見てもらいたいもんあ
 るねん」いいながらポケットから事務所用の封筒に這入ったもん出して、テーブルの上
 ひろげたのん見ましたら、そなり私は真つ青になってしまいましたん。どないして手工
 に這入ったのんか、「ここに署名してあるのん確かにお前に違いないか」いうて夫はあの
 誓約書眼工の前い突きつけるのんです。「断つとくが、僕はお前の心持次第では決して事
 を荒立たそう思てエへん。これが僕の手工に這入った径路についても聞きたいのんやつた
 ら聞かしてやる。けど第一に、事実お前が署名したもんか、それともこれはニセ物やのん
 か、その点ハッキリさしときたい。」……ああ、綿貫に先越された！ 私の持つてゐる書付

の方は筆筒に鍵かけて隠したありましたから、これは綿貫のんに違いないのんで、こんなことするためにこの誓約書書かしたのんか！　ほんまに私は、こないだから夫に口利いてもらお思てて、光子さんのことも打ち明けた方が得なことは話してしまお思てたのんに、さつき不意討ちに笠屋町い訪^たンねて来られて、あないなったら妊娠してなさるのんうそやいうこと今更いい出しかねて、うその上塗りしてしもてんけど、こんなことになるのんやったらあの時白状しといたらよかった！　「おい、黙ってたら分らん、返辞したらえやないか」と、夫は出来るだけ腹の虫おさえて、やさしい、静かな声出して、「黙ってるとこみたら、これお前書いたと認めてもええねんなあ？」いうて、それからだんだん話し出すのん聞いてますと、五、六日前に今橋の事務所の方い突然綿貫が訪^たンねて来て面会求めた。そいでどんな用事か思て応接間い通して会うてみたら、「今日お訪^たンねしたのんは、実は折入ってお願ひしたいことあるのんです」いうて、「多分あんたも御承知でしょうが、僕と徳光光子とは結婚の約束したあるばかりでなく、既に光子は僕の種までも宿してますのんに、こつちの奥さんが中に這入^{くはい}つていろいろ邪魔しなさるのんで、光子の仕打ちこの頃日増しに冷淡になって、今の工合ではいつ結婚してくれるのんか分らんような状態にある。就^ついてはあんたから奥様に意見して下さいませんか」いうよって、「僕の家内が何で邪魔

するのですか。委^{くわ}しいことは知りませんが、家内はあんたがたの恋愛に同情してて、一日も早う結婚しなさるのん祈つてるように聞いてましたが」いうたところが、「あんたは奥様と光子との関係がどんなことになつてゐるか、ほんまの事情御存知ないのんです」いうて、今でも前のようやいうことそれとなしに仄^ほめかした。けど初対面の男の話をそのまゝ信用する氣いもなかつたし、現にその男の種宿してゐるもんが別に同性の人とそんな風になつてるといふのんもけつたいなし、何やこの男氣い触れてゐのんと違ふか知らん思てたら、「お疑がいになるのんも尤^{もつと}もですが、ここに確かな証拠^{しやうこ}あります」いうてこの書付出して見せた。夫はそれ読んだとき、自分の妻が未^{いま}だに自分欺^{あざむ}いてたことにも不愉快感^{ふげつかん}じましたけど、それよりもなお不愉快やつたのんは、妻と見ず知らずの男とが自分の知らん間に兄弟の約束してゐるいうことやつた。第一人^{ひと}の女房とこんなもん取り交^{かわ}しといて、その女房の亭主の前いいれいいれに見せつけながら、それに対する一言のいい訳もせんと、まるで刑事が犯罪の証拠^{しやうこ}掴^{つか}んだみたいに得意そうにニヤニヤしてゐるこの男の氣い知れん思たら、一層むかむかして來たとこい、「あんたは此処に署名したあるのん、あんたの奥様の手工やいうことお認めになりますやろなあ」いいますのんで、「なるほど、見たところではたしかに家内の手工のようですが、それより先に伺^{うかが}いたいのは、ここに署名してゐる男は

何処の人です」いうてやったら、「それは僕です、僕が綿貫自身です」いうて、まだその皮肉悟らんみたいにながな顔してる。「この署名の下に捺してあるもん何ですか」いうたら、それはこないこないの訳でと臆面ものうその時のこと細こうに話し出すので、みんなまで聞かんうちに腹立つて来て、「これ読んで見ると、あんたと、光子さんと、園子との関係は委しいに規定してあるが、園子の夫である私については何の考慮も払われておらん。私ちゆうもんは全然眼中に置かれてん。あんたも此処に署名しておられる以上当然責任分たれるもんと思えるので、一往あんたの立場からその弁明求めたい。まして今のお話のようやと、この誓約書は園子の意志から出たんやのうて、半ば強制的に結ばれたように思われるが」いうてやった、そしたら恐縮するかと思いのほか相変らずニヤニヤ笑てて、「その書付にもある通り僕と園子さんとは徳光光子に依って結ばれてるので、その関係は園子さんの夫であられるあんたの利害とは始めから衝突してます。もし園子さんがあんた眼中に置かれたら、光子とあないな間柄になることもなかったやろし、こんなもん交すまでもないし、それこそ僕の何より望むとこですけど、妻たる人が自ら進んでしなざるも人を他人の僕がどないすることも出来しません。僕にいわしたらこの書付のような関係認めることが、既に園子さんに対して非常な譲歩してるのんです」いうて、あべこべに夫の

監督の不行き届き恨むような口ぶりで、兄弟の約束したいうのんは密通したのんと訳が違
う、そやから自分は不道德なことしたとは思てエへんいうのんです。

その二十六

そんで夫は、そんな書付手工に触れるのんも汚らわしい思いましてんけど、何せ相手が
非常識な人間のことやさかい、この男にこんなもん持たしといたら何するか分らん、これ
はどないぞして取つてしもた方がええ思て、「お話はよう分りました、あんたの仰つしや
る通りやとしたら、頼まれいでも夫たるものの責任として放つとけません。けど僕として
も、あんたとは今日始めてお目にかかったばかりやし、一往家内のいうことも聞いてみ
んことには片手落ちになる。就いてはこの書付暫く貸しといてもらえませんか。これ眼の
前い突き付けてやったらきつと白状しますやろけれど、それでもなかったら、なかなか強
情な奴ですさかい」いいましたら、貸すとも貸さんともいわんといて、急に大事そうにそ
れ膝の上に置いて、「しかしあんたは、もし園子さんが白状しなさらしたらどういう処置お

取りになるのんです」いいますのんで、「どういう処置取ると、その時の都合次第やさかい、今から明言する訳に行かん。僕はあんたに頼まれたから家内を詰問するのんやない。僕はあんたの利害のために動くのんやのうて、僕自身の面目、自分の家庭の幸福のために動くのんやいうことを承知して下さい」いうたところが、何や嫌^{いや}アな顔して、「僕かても、自分のために働いて欲しいというのんやあれしませんが、今度の事は、あんたの利害と僕の利害とが偶然一致してる思たのんで、伺うたのんです。あんたかてそれは認めなざるやろ」いいますよつて、「そんなこと僕は考える余裕もなし、また考えとうもありません。失礼ながら、僕はあんたと、ぐるになつてそんな事件の中い捲^まき込まれとうないのんです。僕は自分の自由意志で自分の妻を処分するだけです」いうてやった。すると「ああ、そうですか、そんなら仕方ありませんが」いうて、「ほんまいうたら、僕かてあんたには縁もゆかりもないのんですから、こんなこと頼みに来られる義理やないのんですけど、そいで僕、もし園子さんが光子と一緒に逃げるようなことあつたら、困るのんは自分ばかりやない、それ知つてながら黙つてたらあんたに対しても不親切や思て来たのんですが」いいながら、ジロジロ人の顔のぞき込んで、「そないなつたら、あんたかて嫌^{いや}でも応^{おう}でも事件の中い捲き込まれてしましますで」いいますのんで、「いや、御好意は分りました。御親

切に對しては感謝します」いうてやりますと、「ただ感謝するいわれただけでは困るのんです。一体あんたは、まさか園子さんに逃げられるようなヘマな事しなさらんやろ思います、それでも万一逃げられた場合にはどないなさいますか、逃げたもんには未練ないいうてアキラメておしまいになりますか、それとも何処までも追いかけて行つて取り戻すいうおつもりですか、そのどこをハッキリきめといて下さい」いいますよつて、「僕は自分の行動について、その時になつて見んと分らんこと今から他人に約束したり、それに掣せいちゆう肘ししられたりするのんイヤやのんです。まして夫婦のあいだのことはあくまで夫婦のあいだだけで解決つけます」いいましたら、「しかしあんたは、どんな事あつてもよもや園子さんを離縁なさるようなことありますまいな」いうのんですて。そのいい方が變に厚かましいて、ひつこうにねちねち絡からみ着いて来ますのんで、自分の妻離縁しようとしまいと、余計なお世話やないか、何もあんたがそんな心配する必要がありますまいいうてやりましたら、「いや、それでもあんたは園子さんの実家に恩義あるはずや」とか、「ちよつとやそつとの不都合があつたからいうて、園子さん追い出したら義理が済まんやろ」とか、多分光子さんから聞いたのんですやろが、そんな内輪の事情までちゃんと知つてて、「あんたも立派な紳士やよつて、まさかそんな不徳義なことしなされへんやろ思います」いう

たりするのんで、夫もしまいには腹に据えかねて、「あんたは一体何しに來たのんや。何のためにそんな関係もないこといつまでもべちやべちやべつてゐるのんや、あんたに注意してもらわんかて僕は僕で紳士の道守りますけど、それがあんたの利害と一致するかどうかは保証する訳に行けませんから、どうぞそのつもりでいて下さい」いうたら、「ふん、そうですか、そんなら折角ですがこの書付お貸しすること出来ません」いうて、膝の上い置いてあつたのん丁寧に封筒い入れて、内ぼところい収しまうのんやそうです。夫はそれが欲しかったことは欲しかったけど、そんな行きがかりになつてもたらもうしようがない、かいつて弱味見せたらあかん思て、「ええ、ええ、僕も強しいて拝借しようとは思いませんから、御自由にお持ち帰り下さい。但し一言いちごんお断りしておきますが、あんたがそれを、僕の手を経て僕の家内に示すことを拒まれる以上は、家内が事実を否定した場合に、僕としてもその書付に信を置くこと出来んかも知れない。僕は当然、初対面のあんたより家内の方を信じますから」いうてやった。そしたら独りごとのように「とかく夫が細君に甘いのが間違いの起る原もとやのんですな」いうて、「なあに、この書付と同じもんが園子さんのとこいも行つてますよつて、何処ぞ捜しなさつたらきつと出て來ますで。尤もそんなことしなさらんかて、腕を出さして見なさつたら証拠が残つてゐるはずです。」——と、そ

ないな憎まれ口いうて、「お忙しいとこえらいお邪魔しました」と、わざと落ち着いて挨拶あいさつして出て行きますのんで、それを廊下まで送って行つて、呆れた奴や思いながら部屋に戻つてほつとしてますと、ものの五分ぐらいした時分、またコツコツとドアをノックして、「やあ、只ただいま今は失礼しましたが、ちよつと、あのうもう一遍お邪魔さしてもらいます」いうて、何と思たのんか、今度は妙にニコニコとあいそ笑いしながら、そのほん五分ぐらいのあいだにまるで人間變つたみたいな表情して這入はいつて来ましてん。それが夫にはまた氣味わるうて、ぎよつとしながら黙つて見てましたら、テーブルの前に来て、お辭儀して、「おかけなさい」ともいわんうちに今腰かけてた椅子にかけて、「さつきは僕が悪かったです。僕は今、命にかけてもと思う人を取るか取られるか、大事な瀬戸際にあるもんですから、自分のことにばかり眼工くらんで、あなたの感情尊重する余裕失うてました。何も悪意あつてあんなこというたんやありませんから、さっきのことは水に流して下さい」いいますよつて、「それをわざわざいいに來なさつたんですか」いいますと、「はあ、そうです、外い出てから考えてみたら、自分が悪かつたいうこと分りましたのんで、何や知らん氣イ濟まんもんですから詫まりあやまりに來ました」いうて、「それは御丁寧なことです」いうてやつても、「はあ、……」いうたなり、まだモジモジと腰かけて、けつた

いな作り笑いして、「実はあのう、こうしてこんなことをお願いに來たりお詫^わびに上ったりしますのんも、よくよく苦しい立場に置かれて思案に余った結果やのんですが、どうぞ僕のこの、切^{せつ}ない、遣^やる瀬ない、泣くに泣けん胸の中を推量して下さい。それさい察してもらえたらさっきの書付お貸ししてもよろしいのんです」いいますのんで、「察してくれいうて、どんな工合に察したらええのんですか」いいましたら、「正直なところ、僕は何より、あんたが園子さんを離縁しなさるようになるのんを恐れるのんです。そないなったら園子さんやケ起してますます邪魔するさかい、光子と僕が結婚する望みなおのことないようになつてしまう。僕かてあんたがめつたにそんなことしなされへん思いますけど、どない考えても心配やのんは、園子さんが光子連れ出して逃げる場合です、何遍も何遍もくどいようですが、よつぽど監督嚴重にして下さらんと、きつと近いうちに逃げるにきまつてますのんで、一遍そんなことあつたら、たといあんたが心のうちでは園子さん赦^{ゆる}してやろ思いなさつても、世間の手前そうも出来んようになるかも分らん。それ考えたら僕は危険がもう眼の前い迫つてる氣イして、夜もおちおち寝られへんのんです。」——そないいうて、「どうぞ、どうぞ、お願いします」と、額をテーブルい擦^{こす}りつけるようにして、「そういう訳ですから、自分の都合のええことばっかりいう勝手な奴やとお思になりますや

ろけど、僕の窮境察して下さって、これから後、どんな事あつても園子さん逃がさんように責任持つて監督する、それでもまさか括り着けとく訳にも行けしませんさかい、逃げられることないとは限りませんけど、そないなつても追いかけて行つてきつと家い引き戻すいうこと約束して下さい。それさい『うん』いうて下さつたらこの書付お預けします」いうて、「今更こんなこと念押さんかて、あんたは園子さん非常に愛してなさる、決して離縁しなさらんことはよう分つてるのんですが、それを一と言あんた御自身の口から聞かして欲しいのんです。あんたかて僕を哀れんで下さつたら、お腹なかの中でちゃんとしまつてるこというて下さつてもええやありませんか。」——夫はそれ聞いてるうちに、つくづくこの男イヤ味な奴やつツちや、初めからもつと素直に、人の感情害さんようにいえるもんを、わざとほじくり返すような余計なこというて、顔色見い見い態度いろいろに変えたりして、何ちゆうけつたいた男やろう、これなら女に好かれるはずないよつて、光子さんかて厭いやにななさつたかも知れん、よつぽど損な性質に生れついた人間や。そない思たら今度はほんまに可哀そうになつて来て、「そしたらあんたも、この書付将来明るみ出すようなことせんいうて誓うてくれますか、そして僕が必要と認めるあいだ保管さしといてくれますか、それ承知なら、僕もあんたの条件容れてもよろしいです」いうたら、「この書付は、

そこにも書いてある通り双方合意の上でないと人に見せられんようになってるのんですが、既に園子さんの方に背信行為あったと認めますのんで、僕があんた方困らしてやろいう気イあつたら、これ種にしてどんな事でも出来んことあれしません。けど僕そんな卑怯な真似する人間でないことは、これわざわざあんたのとい持って来てお預けするのでも分るやありませんか。なあに、相手に誠意なかったら何ぼこんなもん書かしても反古と同じですよつて、お役に立つのんならどうぞ持つて行つて使て下さい。僕の方はただ、さっきの二カ条さい約束して下されば満足やのんです」 いいますさかい、そんならそれと、何で初めからいわんのんやろ思いながら、「そいでは確かにお預りします」 いうて受け取ろとしますと、「ちよつと待つて下さい」 いうて、「甚だ恐縮ですが、後日のために一と筆預かり証文書いてもらえませんか」 いうのんやそうです。それも承知しましたいうて、「右正二御預り致候也」と書いてやりましたら、「その後いもう一と筆書き足して下さい」 いうのんで、「何を書くのんです」 いうたら、「下名ハ右証書ヲ保管中左ノ条件ヲ遵守 スルコトヲ誓ウ、一、下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行為ニ悖ルコトナキヨウ責任ヲ持つテ監督ス、二、下名ハ如何ナル場合ニオイテモ決シテ妻ヲ離縁セズ、三、下名ハ所有主ヨリ請求サレタル時ハ何時ニテモ保管中ノ証書ヲ提示シ、モシクハ返却スベキ義務アルモ

ノトス、四、下名ガ保管中ノ証書ヲ紛失シタルトキハ、何ラカ他ニ所有主ヲ満足セシムル保証ヲ与エザル限り、第一条及ビ第二条ニ規定シタル義務ヨリ解除セラルルコトナシ、——それを一遍にすらすらいのんと違て、一つ書いてしまふとまた考えて、「あ、もう一と筆願います」いうて、だんだんそんな工合に書き足さすのんで、何や、馬鹿々々しい、三百代言みたいなことという奴や思て、面白半分に好きなようなこといわして、その通り書いてやつて、「ではこの後い但し書きを一つ入れますで。——但シ、下名ノ保管スル証書ガ虚構ノ事実ニ基ケルモノナル時ハ凡ベテノ約束ヲ無効トス、——なあ、こない書いといても差支いあれしませんやろ？」いうて、はつとしたらしゆうどぎまぎしてゐる様子でしてんけど、さつさと構わんと書いてしもて渡してやつたら、急にまた未練出たようにぐずぐずしながら、それでも仕方なしに書付置いて行きましたと。夫はそこまで一と息に話して来て、「どうや、この書付お前書いたのんに違いないのか。お前の方にもこれと同じもん行つてゐるのなら出して見なさい」いいながら、じつと返答待ってますのんで、私は黙つて立ち上つて、鍵のかかつてゐる抽出し開けて、そこに隠してあつたもう一通の方持つて来て、無言のままテーブルの上い置きましたん。

その二十七

「ふーん、これある以上はこの書付ニセ物やないのんやなあ？」そないいわれても、やっぱり黙ってうなずいて見せますと、夫は私がどんな気持でいるのんか見当つかんもんですさかい、疑がい深そうに眼工ぱちぱちさして、「そしたらこの証書に書いたあることみんなほんまの事実やのんか」いうのんです。「そら、ほんまのこともあるねんけど、うそのこともあるねん。」——私はさつき夫の話聞きながら、もうこないなったら隠し立てしたかてしょうがない、いつそ綿貫の計略の裏搔かいて、自分に都合ええことも悪いことも、何でも彼でも残らず打ぶツちやけて、あとは成り行きに任してやろ、ひよツとしたら案じるより生むが易やすうて、どんなうまいことあるかも分れへんと、すっくり腹きめましたのんで、先ず第一に綿貫の秘密すつば抜いてやって、そやさかい光子さん妊娠してはるいうのんうそやいうこと、さつき夫が会った時はお腹にいろいろなもん詰めてなさったのんやいうこと、あの笠屋町の家にしたかて、常時彼処あそこにいなさるのんでも何でもないこと、この証文書かされた時は綿貫にあんじよう嵌はめられて、脅迫しられたのんやいうこと、自分が欺だまされて

たことから夫欺してたことまで、なんでも二時間ぐらいかかって一切合財話してやり
 ましたら、「ふん、ふん」いうて、ときどき溜め息つきながらしまいまで聞いてしもて、
 「そしたらお前の今いうたことちよつともうそないねんなあ？ 綿貫いう男にそんな秘密
 あること確かやねんなあ？」いうて、「ほんまいうたら、自分の方にもちゃんと調べ届い
 てる」いうのんです。それが、夫が綿貫に会うたのんは四、五日前のことですので、そ
 いから今日まで知らん顔して事件伏せといたいうのんは、何や綿貫いう奴の素振り怪しい、
 何ぞもつと深い訳あるのんやないかいう氣イしたのんで、私に打つかる前に一往取り調
 べてやろ思て秘密探偵に頼んだところが、そんな商売大阪にかつて仰山あれしませんさ
 かい、こないだ光子さんが頼みなさつたのんと同じとこい行つてしもたのんで、「その人
 なら大概のこと分つてます、前に調べたことあります」いうで、その場アで直きに答えて
 くれた。そいで綿貫が訪ねて来た日の夕方には、もう一と通り種上つてしもてたのんで
 すが、夫はあんまり意外やのんで同名異人の間違いやないか知らん思いましてんけど、探
 偵の方には光子さんとのいきさつまで分つて疑がう余地あれしませんし、……そないな
 つて来ると、今度は光子さん妊娠してなさるいうことや、笠屋町の家のことや、私と光子
 さんとの関係や、なんとも腑に落ちんことだらけですよって、また改めて光子さんの方調

べさした。その報告の届いたのん今朝けさのことで、それでも夫はまだ半信半疑でしたさかい、自分で様子見て来てやる思てさつき不意に笠屋町訪たンねてやったいうのんです。「そしたらあの時、お腹に物詰めてはったこと分つてたん？」私はわざと打ち解けた調子でそないいうてやりましたけど、夫はそれには答えんと、「僕はお前の今日の態度いつもより柔順で正直なこと認める。けどその正直さは過去の罪惡後悔してるためやのんかどうか、それハッキリいうて見なさい」いいますねん。「お前かて自分の過去の行いが、どんなに道に外はずれてたかいわんかて分つてるやろ。僕もそんな不愉快なことほぜくり返す氣いねんよつて、こいから後、本氣で罪の償つぐないする決心あるかないか、それ聞かしてくれたらええ。どうせ綿貫との約束やかい真面目まじめに守る必要もないねんけど、とにかく僕はお前離縁せんいうことあの男の前で誓うた。それに考えてみたら僕自身にも手落ちあつた。夫としての監督おこた怠たつてたいいう綿貫のいいぐさにも一往理窟りくつないことないし、光子さんの家の方から苦情申し込まれたら、お前より先に僕手工あやつて詫あやまらんならん思てるぐらいやし、こんな事になつたのんは夫婦共同の責任みたいに感じてゐる。第一新聞にでも出るこゝあつたら、何としてお前の親たちに言いい訳わけしよう。それも普通の意味での恋愛やとか三角關係やとかいうのんやつたら、まだ話しよも同情のしよもあるけど、この証文に書いたあるようなこ

と、誰が読んだかて気違いとより思工へんで。ま、そない思うのん身みびいき鼻はな肩かたかも分れへんが、お前のいうのん聞いてみたらもともと綿貫いう奴から起ったことで、ほんまに悪いのん彼あの男一人や。お前かて光子さんかてあんな男に係り合わなんだら、まさかこんなことにもならなんだやろし、徳光さんの家かて、それ分つたらどない思やはるやろ。僕今まで光子さん悪いのんや、あの児こ不良少女やよつてお前にロクでもない感化及ぼすのんや思ててんけど、親の身イになつたら綿貫いう男八つ裂きにしても飽き足らん思やはるやろ。何処い出しても恥かしい器量自慢の娘持つてて、あんな奴に見込まれるやなんて、僕とこよりも一つ不仕合わせや。……」夫は私の激しやすい性質に逆ろうたらいかん思てますのんで、理性に訴えるより感情的に動かすよう努めてて、それが一種の手工やいうこと見え透いてますねんけど、親のことやかいかい持ち出されて、殊ことに光子さんのこと、そないに不憫ふびんらしゅういわれましたら、自分の胸に思てることと一緒やのんで、急に悲しいになって来て、眼工に一杯涙溜め溜め聞いてますと、「なあそやないか？」と夫は涙で光ってる頬ほべた視詰みつめながら、「泣いてばかりいても分れへんさかい、よう分別して、今度こそ最後の、うそのないお前の考いうてみなさい、僕はお前がどうしても家出するいうのんなら、そら仕方ない思てる。けど、ほんまの僕の氣持いうたら、憎いのんあの男だけで、お前も光子

さんも可哀そうな目工に遇^おうたんや思てるねん。かりにお前と離別せんならんことになつても、お前が今みたいな真似^{まね}つづけてたら、いつまで立つてもその『可哀そうな』いう心持残つて、僕も長いこと苦しまんならんし、お前にしたかてまさか光子さんと結婚する訳にも行けへんやないか。僕の監督離れたかて、いつまで世間^かが許しとくはずないさかい、仰山の人に心配かけた上自分も恥掻^かいて圧制的に止めさされるか、そないならんうち自分で悟つて直すようにするか、孰^{どっち}方なとお前の心がけ次第やで。」「そんでもうち、……こないになつたのん因果やさかい、……死んであんたに詫^{あや}まります！」夫はビクリとして飛び上るような恰好^{かつこ}しましてんけど、その時私はわツと泣きながらテーブルに俯伏^{うつぶ}してしましましてん。……「どうせうち、こないになつたら誰にかて見放されるのん当り前やし、生きてたかて世間に顔向け出来へんさかい、……どうぞ死なして頂戴、こんな腐った人間にあんたかて未練ないやろし、……」「……誰^かがお前見放すいうた？ 見放したもんなら意見するはずないやないか？」「そないにいうてくれはるのん有難い思いますけど、今更うち一人ええ児になつて光子さんあんなりに放つてしもたら、どんなに難儀しやはるこつちやら、……あんたかて一番光子さん可哀そうやいやはったやないか。」「そらいうた、いうたからこそお前ら救い出そうとしてるのんや。……まあ、お聞き、お前えらい考え違

いしてるで。お前みたいな意味でどんなに愛情^{ささ}捧げたかってちよつとも難儀^{すく}救てやることになれへんで。僕はお前のことばかり心配してるのやあれへんで。徳光さんとこいも行て、よう訳話して一切あの男近づけんように嚴重に監督して、お前との交際も遠慮してもらうように注意するのんが、僕の義務やと思てるねん。そないにしてこそ光子さんのためやないか。」「あんたみたいなことしなはつたら、うちより先に光子さん死にやはるし。……」「なんでや？　なんで死ぬのんや？」「なんででも死にやはるし。……今までかつて死ぬ死ぬいうてはつたんようようのことで止めててんもん。……そやさかいうちも一緒に死ぬわ。死んで社会に詫^{あや}まるわ。」「馬鹿なこといいな！　そんなことして僕や親たちに迷惑かけて、それが何で謝罪になるねん！」

その二十八

私は夫が何ちゆうても耳に入れんと、「いいえ、死にます、死なして頂^{ちようだい}戴」いうてテーブルに俯伏^{うつぶ}したなり、やんちやな児^こ才^{さい}みたい泣いてましてん。もうこの場合「死ぬ」

いうてやるのん一番ええ。それより外に方法ない。……私の頭の中にあるのんは、どないしたらこいから先も今までのように会うて行くこと出来るやろかと、そればかりですのんで、正直にいうたら、夫に離縁しられるのん一番恐い^{こわ}。どうせ此処^{ここ}まで知れてしもた以上、自分と光子さんの間^{あいだ}柄^{がら}納得^{なとく}さして、それ承認してくれたら、自分は夫大事にする、きつと夫婦仲も円満に行く、綿貫の奴どんな妨害したところで、証拠の書付こつちに取つてしもたあるし、あんな男のいうことやたら信用するもんないやろし、たとい光子さん何処^{どこ}ぞい行きやはっても、ちゃんとした家庭の奥様同士どないに仲好^ようしてたかて誰が何ちゆうもんあるやろ。前とちよつとも変つたことないばかりか、前よりしつくりと行くのんやし、むやみに事荒立てるよりもその方が何ほ優^ましか分れへん。夫は私に無鉄砲な事しられたら、第一に心配やのんで、お腹^{なか}の中では私以上に離縁恐れてて、事^{こと}勿^{なか}れ主義に傾いてることよう分つてますさかい、「そないに束縛するのんならほんまに家出してやるぞ」いうとこ見せて、そいからそろそろ注文持ち出して、——と、私はあらかた思案をきめて、二日かかっても三日かかってもきつとしまいにはいうこと聴かしてやるつもりで、なるべく反感挑発せんように、何いわれてもただ大人^{おとな}しいに無言のうちに涙ぐみながら、堅い決心隠してるみたいに割りと落ち着いてましたのんで、それが夫にはなお気味悪

うて、その晩はどうど夜の明けるまで一睡もせんと傍（そば）に着いてて、便所いまで一緒に来るのんです。そいで明くる日は一日事務所休んでしもて、御飯も二階に運ばすようにして、じつと睨（にら）み合いしたなり、ときどき顔色うかごうては、「こないしてたら体つづけへんさかい、一と寝して頭休めてから、ゆつくり考え直して御覧」とか、「とにかく死ぬやの家出するやのいうこと、思い止まるいう約束してくれ」とかいますねんけど、私は黙つていやいやして見せるばかりで、心のうちでは、此処まで来たらもう大丈夫や思てましてん。ところがそのまた明くる日の朝、夫はどうしても一時間か二時間事務所い出んならん用あるのんで、留守の間は絶対に外い出エへんし、電話もかけへんいうこと誓うか、それイヤやったら大阪い連れて行くいきますよつて、「うちかてあんた一人で出したら心配やさかい附いて行きます」いいましたら、「何が心配やのんや」いいますのんで、「うちに内証で徳光さんとこいいいつけ口でもしに行かれたら、それこそ生きてられへん」いいますと、「僕かつてそんな、お前に納得させへんうちに無断で不意打ち喰わすようなこと絶対にせエへん。僕がそれ誓（ちか）たらお前も誓うてくれるか」いいますねん。そいで私も、「あんたさい意地の悪いことせエへんいうのんなら、留守のあいだぐらいじつと待つてますさかい、安心して仕事して頂戴。うちもその間アに一と休みしますわ」いうて、夫出してや

りましたのんが九時頃のこと、暫く寝台に横になってましてんだけど、妙に興奮してしも
てて寝られるどこやあれしません。それに夫から、大阪に着いたら直ぐ電話かかって、そ
いから三十分置きぐらいにチヨイチヨイかかって来ますさかい、何や知らん気分落ち着か
んと、部屋の中往ったり来たりしながらいろいろなこと考えましたら、そのうちにふつと
思いついたいのんは、毎日々々こんな工合に根競べしてたら、綿貫がどないなわるさ
せんとも限らんし、光子さんかて、一昨日あんなり別れてしもてどない思てるか、昨日か
て一日待つてはったやろ。どうせ口先で「死ぬ、死ぬ」いうたぐらいでは威嚇し利けへん
さかい、いつそ早よ埒明くように、それもあんまりえらい騒ぎにならんように、奈良とか
京都とか、何処ぞ近いところへ逃げたらどやろ。そいでお梅どん頼んで、わざとビツクリし
たみたいに夫のところへ駆け込んでもろて、「今お宅の奥さんと家のとうちやんと何処そこ
い逃げはりました。家い知れたらえらいことになりますさかい早よ掴まえてくくなはれ」い
うて、もうちよつとで死ぬいうところへ夫連れて来てもらう。……それやったら、今日置い
たら機会あれへん。……と、そない思いましてんけど、外い出る訳に行けませんさかい、
「あのなあ、委しい話会うてからするよつて、大急ぎでちよつと家まで来てほしい」いう
て電話で光子さん呼んどいて、「旦那さんにいうたらいかんで」と、女子衆に口止めし

といて待つてましたら、そいから二十分ぐらいして来やはりましてん。

電話かかって来るうちは夫大阪にいるちゆうこと確かやのんで、かいって安心ですねんけど、それでも不意に帰つて来たら裏口から出てもらお思て、光子さんの日傘と草履庭の方い廻しといて、逃げる時の用心に下の座敷で会うたのんですが、光子さんは初めから心配そうな青い顔して、昨日一日見なんだ間にえらい寔れてなさつて、私の話聞きなされるともう涙ぐみながら、「そしたらあれから姉ちゃんの方にもそんなことあつてんなあ」いいなさつて、自分もあの日イの夕方から昨日にかけてさんざん綿貫にいじめられた。綿貫のいうのんには、「あんたと姉さんとグルになつて僕欺^{だま}そうとしてるさかい、僕の方もその裏搔^かいてこないだ今橋の事務所い行つて、姉さんのことみんな柿内氏に話して来てやった。そやさかい笠屋町い様子探りに来たのんや。あないして姉さん連れて行かれてしもたら、もうなんぼ待つてたかて来るはずあれへん。」

その二十九

ぞないいうて綿貫は、「僕と姉ちゃんと証文換えことしてたこと、あんたかて薄々知つてたやろが、もうあんなもん反古ほうこになつたさかい、証拠のために今橋い預けて来た。ここに預り証書ある」いうて、懷ほどこから出して見せて、「そら、この通り書いたあるやろ、——下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行為ニ悖ルコトナキヨウ——」と一々箇条書き読んで聞かして、それも自分の都合悪い但し書きのどこ手工で隠してて、「柿内氏からこの書付取つた以上は、もう姉ちゃんの方心配ないよつて、あんたも僕に証文入れなさい」いいながら、また懷からその文案みたいなもん出して見せますねんと。それ読んでみると、光子さんと綿貫とは永久に一心同体やとか、死を以て綿貫に従わなにかんやとか、その約束に背そむいたらこないこないしられるやとか、何ほでも虫のええこと書いたあつて、「これでよかつたら此処い名ア書いて判捺おしなさい」いうのんですけど、「そんなことするのんイヤや」いうて断りなさつて、「あんたみたいに何ぞいうたら証文書け証文書けいう人あれへん、そないしてはそれ種つこに使て人オドスつもりやねんやろ」いいなさつたら、「あんたさい心變りせエへなんだら、恐がる道理ないやないか」いうて無理にもペン持たそとするのんで、「お金の借り貸しやあるまいし、証文で人の心括くつとくこと出来る思てるのんやろか。何ぞ外に目的あるねんやろ。」「あんたこそ判つくのんイヤやなんて、心變りする氣イヤね

んやろ。」「ふん、そら、なんぼ判ついたかて先のことは分れへん」いうてやんなさつたら、「そない僕に楯^{たて}ついたら今に難儀することあるで。あんたが証文書かんかて、オドスつもりやつたら此処に何ほでも材料あるねん」いいながら、紙入れの中から小さい写真出して見せるのんやそうです。それがビツクリしたことには、私の夫が取り上げてしもたあの誓約書の写しやのんで、こないだ今橋い持って来る前に、ちゃんと写真に映しといた、柿内氏はもうあの書付返さんつもりかも知れんけど、そんな手工に乗るような僕やあれへん、この写真と、預り証と、この二つ新聞記者にでも見せたら、売ってくれいうて飛び着いて来るやろ、僕かて必要に迫られたら何するや分らん。——そないいうて、何でも僕のこと聴け、聴かなんだらあんたの前途真つ暗にしてやるいいますよって、「それ見なさい、その通りあんた卑劣やないか。あてかて覚悟してるさかい、それだけ材料あるねんやつたら、この上人イジメたりせんと、新聞にでも何にでも売んなさい」いいなさって、そんなり喧嘩^{けんか}別れになった。そいであんまり弱いとこ見せたらいかんよって、今日は笠屋町いも行かんというて、どないするか様子見てやる思てなさつたら、私のところから電話やつたんで、飛び立つ思いで顔見に来たいいなさいますねん。

まさか綿貫かて、いよいよあかんという見きわめも付かんと自分の損にもなるようなこと

せエへんやろけど、こないなつて来たらなおのこと夫味方に入れるのん第一やいうのんで、
そこから私の考えてた計略実行することになりましたのんですが、光子さんは「何処ぞ近
いとこへ逃げるのんやったら、あて所の浜寺の別荘がええし」いいなさつて、彼処は今年
留守番の夫婦行てるだけやさかい、海水浴して来るいうてお梅どん連れて行くのんなら、
四日や五日泊つてたかてちよつとも家の方心配ない。それで私の方はそうツと此処の家抜
けて出て、難波駅で光子さん待ち合わせて、三人で浜寺に着く時分には、夫は私のいんよ
うになったのん氣イ付いて、何は措いても光子さんの家い電話かけるにきまったある。そ
したら直ぐ居所分つて浜寺の方いまたかけて来る。その時お梅どん電話口い出てもろて、
「今お宅の奥様と家のとうちやんと薬飲んで昏睡してはる。ちゃんと書き置きまで書い
たあるのんで、覚悟の自殺にきまつてます。今本宅とあんたさんとい電話かけよとして
たところですよ。直きに来とくなはれ」いうたら、きつと慌てて飛んで来るやろ。——この
お梅どんの口上も大役ですもんけど、それより昏睡して見せるちゆうこと、なんぼ狂言に
したかてやつぱりほんまにそんなもん飲まんなりませんのんで、お医者はんが見てもこれ
なら生命に別ツ条ない、二、三日安静にしといたらええいわれる程度にするのんには、ど
れぐらい飲んだもんやら分量分れしませんねん。けど常時使てるバイエルの薬やったら、

そない恐いことあれしませんし「小ツちやい方のタブレットやったら一ト箱飲んででも死ぬへんいうし。そやさかいあれもうちよつと控え目工に飲んだら大丈夫やし。あて姉ちゃんと一緒にやったら間違うて死んだかて構うことあれへん」いいなさるのんで、「ふん、そやとも、あてかてかめへん」いいましてん。——それで夫が駈け着けて来たら、「まだこの通りぼんやりしてはりますけど、お医者はん絶対に心配ないやはりますし、もう大分正氣づいて来やはりまして、ときどき眼工開いたりしやはりますのんで、ほんまは本宅の方いお知らせないきまへんねんけど、そしたらとうちやん叱られはりますし、私かてどない御寮人さんに叱られまツか分れしまへんさかい、電話かけんと置きましたんだす。何卒あんたさんもそのお積りで内証にしといとくなはれ。どうせ今晚帰りやはる訳に行けしまへんよつて、奥様御加減ようなりやはるまで、此処い遊びに来てなはる体裁にしてゆつくり逗留してとくなはれ」と、そこはお梅どんにあんじよういわして、二日でも三日でもじいツとしたなりで、寝たふりしながら譚言いうたり、眼工覚まして泣いて見せたり、そのあいだにはお梅どんからも「お二人さんの命助ける思て願ひ聴いたげとくなはれ」いう工合に口添えしてもろたら、なんぼ夫かてしヨことなしに承知するやろ。「そしたらそれ何日にしよう？」「何日いうたかて、こないに監禁同様にしられてたら、今日より外

に機会あれへん。」「あてかて早^はよしてもらわな、また綿貫が何の彼のいうて来るし。」

——と、そんな相談してゐるうちにも何遍でも電話かかつて来ますのんで、これやったらなかなか逃げる隙^{ひま}ないし、逃げたところで浜寺い行かん間に分つてしまふ、逃げてから掴^{つか}まえられるまで何ぼ少うても二、三時間の余裕なかつたら都合わるい。最初私は、「夕方まで昼寝するさかい起したらあかん」いつけて、夫にも電話で断つといひ、寢室のドア中から鍵^{かぎ}かけて、窓から飛んで降りて逃げよ、と、そない考えましてんけど、外側が洋館の白壁になつて足がかりもあれしませんし、前の浜には仰^{ぎやうさん}山海水浴の人行^いてますし、そんな人目につくようなこと出来^でしませんよつて、また相談し直して、いっそのこと此処二、三日大人^{おとな}しいにして、夫や家の者に油断さしてから、海い泳ぎに行くように見せて逃げ出してやろいうことになりましてん。そいでそないするのんには、二、三日して氣い許すようになった時分、「毎日家の中に閉じ籠^{こも}つてたら病人みたいになるさかい、海い這^は入ることぐらい許して頂戴。海水服一つ着たなりで、何処いも行かんと前の浜にいますよつて」と、夫が出かける時に断つといひ、ほんまに海水服着ただけで海岸い出る。同時にお梅どん光子さんの着物持つて、浜で待つて、直きに着換えさす。着物は海水服の上からスッポリ被^{かぶ}れるようなワンピースの洋服にして、帽子もなるだけ縁^{ふち}の下つた顔の隠れる

ようなのんがええ。浜には人がウヨウヨしてて、かいて気イ付けへんやろけど、洋服や
 ったらこの頃めつたに着たことないので、なおよさら尚更誰に見られても私やいうこと分れへん
 やろ。待ち合わす時刻は朝の十時から十二時までの間、——その時分やったら夫きつと大
 阪い行てる。日イは、雨さい降らなんだら今日から三日目、その日イいかなんだら四日目
 も五日目も、毎日来ててもらう。と、そんな相談してましたら、またええ智慧ちえ出て来て、
 光子さんの方は二日目の晩あたりに一と足先浜寺い行てる。そないすると夫から問い合わせ
 せの電話かかったとき、「光子は昨日から別荘の方い行ってます」と、本宅の方でもいう
 やろし、光子さんの方いかかって来ても、「うちこつちい来てること姉ちゃん知りやはれ
 しませんさかい。来やはるはずあれしません」いうて、自身で電話口い出てやんなさつた
 ら、これは遠い所い逃げたんやない、海で死んだのんかも分れへん思て、何より先に海の方
 方搜索するやろ。そいでええ加減たつた頃に、「実は今さっき奥様お見えになりました、
 うっかりしてる間アにえらい事になりました、……」とお梅どんから知らしてやる、この
 計略で時間計算してみましたら、家の者ら氣イ付くまでに一時間半か二時間はかかる。そ
 いから大阪い知らせ行つて、問い合わせの電話かけたりして、夫香こうろえん櫛園い歸つて来るの
 んざつと一時間、海搜したり近所尋たねたりするのん一、二時間、お梅どんから知らして

来て香櫨園から浜寺い駈^かけ付けるまでが一時間二、三十分、——都合五、六時間余裕ある
 のんで、それやったらちゃんとその間^まアに支度出来る。ただ気の毒やのんはお梅どんで、
 前の日イから光子さんに附いて浜寺い行つて、彼^{あそこ}処から十時までにはわざわざ香櫨園い出
 て来て、暑い盛りに一時間も二時間も海岸に待つてんならん。それもひよつとしたら待ち
 ぼけ喰^くわされて、二日も三日も来んなりません。けど「あの児^こやったらきつとしてくれる
 わ、そんなことするのん好きやねんし」いいなさつて、何から何まで洩^もれのないように手^て
 筈^{はず}きめて、お互に「巧いことやつて頂戴」いうて、光子さん帰つて行きなかつたのん一時
 頃でしたけど、それと殆^{ほと}んど入れ違いみたいに夫戻つて来ましたのんで、ほんまにこれや
 ったら今日でのうてよかつた思いましたん。

その三十

はあ、……逃げたのんはそいからやつぱり三日目のことで、日和^{ひより}の都合も時間の工合も
 すつくり予定の計画通り行きましたのんで、私は十時ちよつと過ぎに海水服着て海岸い出

て、お梅どん見ると眼工で合図しいしい黙って浜七、八丁走って、そこで更紗模様のヴォイルの服頭から被^{かぶ}つて、お金の十円這入^{はい}つてる手提げ受け取って、パラソルで顔隠しながら、お梅どんとは別々に急ぎ足で国道い出ましたら、運よくタクシー来ましたのんで、それに乗って一と息に難波^{なんば}まで行きましてん。そいですさかい十一時半前にはもう別荘に着いてしもてて、お梅どんの方が三十分も後^{おく}れてやって来て、「えらい早^よおましたなあ。

ほんまにこない巧い工合に行たことあれしません。さあ、さあ、今の間アにしやはらんと、ぐずぐずしてはつたら電話かかって来まつせ」いうて、母屋^{おもや}から大分離れた庭の中に建つてる「何とか庵^{あん}」たらしい葛屋^{くずやぶ}葺きの家の方い二人追い立てるようにして、そこい這入^{はい}つたらもうちゃんと枕^{まくらもと}許に薬やら水やら用意してあるのんで、私は洋服浴衣^{ゆかた}に着換えて差向いにすわつてみましたもの、これがこの世の見納めやないか、ほんまに死ぬのんやないやろか、「もし間違うてあて死んだら光ちゃん死んでくれるなあ?」「姉ちゃんかてそうやわなあ?」と、互に抱き合うて涙流すばかりでしてん。その時光子さんは両親に宛^あてたのんと、私の夫に宛^あてたのんと、二通の書き置き出して見せなさつて、「これ読んでみて頂戴」いいなさるのんで、私も書いといたのん出して互に読み比べてみましてんけど、それからほんまの書き置きのつもりで、殊^{こと}に私の夫に宛^あてたある光子さんの手紙には、

「あんたの大事な奥様一緒に連れて行くのん何とも申訳ありません。これも運命や思てあきらめて下さい」と、夫が読んだら恨みも忘れて心動かすに違いないように書いたありましたさかい、それ眼工の前い置いて見る自分らまでが本気にさせられて、もうどないして死んで行くもんとか思われしません。そないして一時間ぐらいたってしまいましたら、パタパタと庭下駄にわげたの音してお梅どん駈かけ込んで来て、「とうちゃん。とうちゃん！ 今やつと今橋から電話だす。まだしたらとうちやんちよつと出とくなはれ」いうのんで、慌あわてて飛んで行きなさつて、その電話済んでしまうと、「これで何も彼もあんじよう行つた。さあ、もうぐずぐずしてられへん」いうて、そいからもう一度別れ惜しんで、互にぶるぶる顫ふるてる手工振り合いながら薬飲みましてん。

完全に意識失うてたのんは半日ぐらいの間らしいて、その晩の八時頃にはときどき眼工開あいてあたりキヨロキヨロ見廻したりし出したいうこと、あとで聞きましたのんですが、私自身ではその後二、三日ちゆうもん一つもハッキリした記憶ないので、……何やこう、頭抑おさえつけられるような、胸苦しい、ムカムカ吐き気するような感覚が、枕もとに据わつてゐる夫の姿とごちやごちやに幻影みたいに眼工に映つてて、つまりその間が数限りもない夢の連続になつてますねん。私と、夫と、光子さんと、お梅どんと、四人が何処ぞい旅に

出かけて、宿屋の一と間に蚊帳かやっ吊つて寝てて、それが六畳ぐらいの狭い座敷で、同じ蚊帳の中に、私と光子さん中に挟はさんで両端に夫とお梅どん寝てる。……そんな光景が夢の場面の一つのようにぼんやり頭に残ってますねんけど、部屋の様子から考えたら、ほんまの事が夢に交り込んだのに違いのないので、これもあとで聞きましたのんに、夜遅おそうになつてから私の布団隣りの部屋い引つ張つて行きましたら、光子さん眼工覚ましなさつて、

「姉ちゃん、姉ちゃん」と譚言うわごとみたいにいいつづけて、「姉ちゃんいてへん、うちの姉ちゃん返して！ 返して！」いうてポロポロ涙こぼしなさるのんで、しよことなしにまた

同じとこに寝したんやそうですさかい、それが夢では宿屋の座敷になつてるのんですが、まだその外にもいろいろ不思議な夢あるのんで、これも宿屋みたいな所ところに私が昼寝してましたら、傍に綿貫と、光子さん小声で内証話ないしよばなししてて、「姉ちゃんほんまに寝てはるねんやろか。」「眼工覚ましたらいかん。」いうて、ヒソヒソしゃべってるのんが切れ切れに聞えますのんを、私はうとうとしながら聞いてて、此処は一体何処やねんやろ！ きつといつもの笠屋町の家に違いない、生憎あいにく其方い背中向けて寝てるのんで、二人の様子見えへんけど、見えんかてもう分つてる。自分はやつぱり欺だまされたんや、自分にだけ薬飲まして、こないな目工に遇あわしといて、その間アに光子さん綿貫呼びやあったんや、エエ、

口惜しい、口惜しい、今跳び起きて二人の面皮剥いでやろ！ と、そない思うのんですけれど、起き上ろとしても体の自由利けません。声出してやろ思て一所懸命になればなるほど、舌硬張つて動けませんし、眼エあくことすら出来ませんので、エエ、腹立つ、どないしてやろ思てる間アにまたいつやらうとうとしてしもて、……そいでも話声まだ長いこと聞えてて、その男の方の声が、おかしいことに綿貫でうて夫の声に変つてしもて、……こないなとこになんで夫いるねんやろ？ 夫あないに光子さんと親しいのんか知らん！ 「姉ちゃん怒りやはりますやろか？」 「なあに、園子かてその方が本望ですやろ」 「それしたら三人仲好うして行きまひよなあ」と、——そんな工合にポツリポツリ耳に這入つたのんが、今考えてもよう分れしませんねんけど、二人の間でほんまに話してたもんやのか、それとも夢の中ながら想像で事実補うてたのんか、……それがあう、……こいだけやつたらみんな自分の心の迷いで根エも葉アもない幻見たんや、そんな事実あらうはずないと打ち消してしまいますねんけど、その外にもまだ忘れることの出来ん場面覚えてますし、……それも初めは阿呆らしい夢や思てましたのんが、薬さめて意識ハッキリして来るにつれて、外の夢だんだん消えてしましますのんに、その場面だけかいって頭い焼き付いてて、疑がう余地ないようになって来ましてん。いったい薬の分量は同じように飲んだんです

けど、私の方が長いあいだ昏睡こんすいしてたいのんは、光子さんは十一時ごろに朝昼兼帯の御飯たべはってお腹なか大きかったのんに、私は朝御飯もろくさまたべんと飛び出してえらい活動しましたさかい、胃袋空からツぽになつてて薬完全に吸収されたのんやそうで、私の方はまだ夢うつつの境迷うてた時分、光子さんは飲んだもんみんな吐いてしまやはったお蔭で、よつぽど前から意識恢かいふく復してなさつたらしいのです。それでも後になつてからの話に、「あて知らん間アに、傍にいる人を姉ちゃんと間違うたのんや」と、そない自分でいやはりますのんで、それやつたら罪は夫の方にあることになるのんですが、夫の自白聞きましたら、二日目の昼過ぎお梅どん母家おもやの方い行つて、夫は私の寝顔見ながら団扇うちわで蠅追はいうてた、そしたら光子さんが寝惚ねぼけたように「姉ちゃん」いいながら私の方い寄つて来こうとしなさるのんで、眼工覚まさしたらいかん思て、間い這入つて光子さんの体抱き上げるようにして引き離して、枕外はすしなさつたのんを直したげたり、掛け布団掛けたげたり、……そんな風にして、寝てはるとぽっかり思い込んで油断してましたさかい、知らず識しらず、氣イ付いた時にはもうどないしても逃げることに出来んようにしられてた、何せ夫ちゆうたらそないな事にかけてら経験のない、子供みたいな人ですよつて、私は夫の話の方がほんまに違いない思いますねん。

その三十一

まあ、そんなこと、どっちが先や詮議^{せんぎ}立てたところで無駄ですもんけど、一ぺん間違っ
あつてからは、私に済まん思いながら同じ過ち^{あやまち}繰り返してたらしいので、それ考えたら
全然夫に責任ないともいわれませんかなんですが、私としたらその点に同情出来るいうの
んは、前にもたびたびいいました通り、夫と私とは肌合^{はだ}エへんのんで、私がいつも愛の相
手外に求めてたように、夫にしたかて無意識のうちにそれ求めてたのんに違いあれしませ
ん。おまけに外の男みだけに芸者遊びするやとかお酒飲むやとかして、物足らなさ^み充たす
ちゆうこと知らん人だけに、なおのこと誘惑に陥りやすい状態にあったのんで、一旦そな
いなつてしもたら、堰切^{せき}つた水みたいに、盲目的な情熱が意志や理性の力踏みにじくつて
燃え上つて来て、光子さんより夫の方が十倍も二十倍も夢中になつてしもたのんです。そ
んな訳で、夫の心持の変化は大概諒^{りようかい}解、出来ますねんけど、いったい光子さんどうい
つもりでいなさつたのんか、そらまあ、ほんまに半分は寝惚^{ねぼ}けてなさつて、ほんその時の

出来心やったのんか、それとも或るハッキリした目的持つてなさったのんか、——つまり綿貫放る代りに夫とそういう風になつて、私との間に嫉妬起さして、思うままに操つてやる、——どうせ自分の崇拜者一人でも仰山寄せ着けときたい性分ですさかい、またしてもその悪い癖出しなさったのんか、そやなかったら「氣イついてみたら済まんことした思てんけど、そいでもこないなつた方が味方につけるのんに都合がええのんで」いうてなさつたように、夫引き入れる手段やったのんか、なんせえらい複雑で裏には裏ある人の氣持なかなか分れしませんけど、多分そんないろいろの動機に時のはずみも加わつたのんやろ思いますねん。ま、二人が自白しましたのんはずつと後のことですさかい、初めはそんな深いところまで考えんと、寝ながらぼんやり「裏切られた」いう感じ持つてて、お梅どん許いやつて来て「奥様、もう安心だつせ、あんた所の旦那様何も彼も聴いてくれはりました」いうてくれた時も、嬉しいのん半分と口惜しいのん半分で、そない喜びもせえしませなんだのんで、二人も私に感付かれたこと薄々悟つてたらしいのんです。そいでお医者はん「もう起きられても大丈夫です」いわれたのん三日目エの晩で、浜寺引き揚げたのんは四日目エの朝でしてんけど、その時も光子さん「姉ちゃん、もう心配せんでもええし。委しいこと明日あんたとこい行つて相談しようなあ」と、口ではそないいいながら、

氣イ咎めると見えて妙に態度余所々々しいて、夫の方も何や知らん光子さんと打ち合わせ
 したあるらしゆう、私連れて香櫨園い帰つて来ますと、「用事溜たまつてるさかいこいからち
 よつと事務所い行て来る」いうて直きに出て行つて、晩の八時過ぎに戻つて来てからも、
 「晩の御飯済まして来た」いうたなり、私に話しかけられるのん恐こわがるようにしてますね
 ん。私は夫が人欺だまして平気でいられる人間でないことよう知つてますさかい、今に何とか
 いい出すやろ、困らされるだけ困らしてやれ思て、無理に知らん顔して、時間になつたら
 さツさと先い寝てしまいましたら、夫は尚な更お落おち着かん塩梅あんばいで、十二時になつても寝
 付かれんらしい寝返り打つて、ときどき薄眼あ工開あきながらそうツとこつち見守つて寝息う
 かごうてるのんが、真つ暗い中でも分るのんです。そないして暫しばらくたちましたら、「おい」
 いうて私の手工取つて、「どうや、気分ええのんか？ もうちよつとも頭痛いことないか
 ？ まだ起きてるねんやつたら、僕話したいことあるねん」いうて、「お前、……知つて
 るねんやろ？……どうぞ堪忍してくれ、運命や思て忪こらえてくれ。」「ああ、そんなら夢や
 なかつてんなあ。……」「堪忍してくれ、なあ、堪忍すると一と言いうてくれ。」そない
 いわれてもしくしく泣いてばかりいる私を、いたわるように肩さすつてくれな
 がら、「僕かてあれ夢と思いたい。……悪夢や思て忘れてしまいたい。……けど、僕、忘

れること出来んようになってしもた。僕は始めて恋するものの心を知った。お前があないに夢中になったのん無理ないこと今分った。お前は僕のことパッションないないいうたけど、僕にかてパッションあつたんや。なあ、僕もお前許す代り、お前かて僕許してくれるやろ？」「あんた、そないなこというて復讐ふくしゅうする氣いやねんなあ。今にあのひとグルになつて、うち独りぼちにさそ思て、……」「馬鹿なこといいな？ 僕そんな卑劣な男やない？ 今になつたらお前の氣持かて分ったさかい、何で悲しい思いさすもんか！」自分は今日も事務所の歸りに光子さんと會うて相談して來た。私さい承知してくれたら、あとは自分が一切引き受けて、綿貫の方もちよつとも心配ないように片附けてやる。光子さんも明日は家うちい來なさるやろけど、私に會うのん極きまり惡がつてなさつて、「あんたから姉ちゃんに詫あやまつといて頂戴」いわれて來た。と、そないにいうて、自分は綿貫みたいな不信用な男やないよつて、綿貫に許したこと自分にも許してくれたらええやろいうのんですが、そら、なるほど、夫の方は人欺すようなことせんとしても、氣がかりやのんは光子さんですねん。夫にいわたら「自分は綿貫と違ふよつて大丈夫や」いいますねんけど、私の身イになつたらその「違ふ」いうこと心配の種やのんで、なんせ光子さんは始めてほんまの男性ちゆうもん知んなさつた、そんだけ今までより真劍になんなさるかも分れへん

し、そのために私捨てなさつても、「不自然の愛より自然の愛貴い」いう立派な口実ありますし、良心の苛責かしやくも少いですやろし、……もし光子さんにそんな理窟りくついわれたら、夫にしたかつて間違うてることしなさいいう訳に行けしませんし、ひよつとしたらあツちゃこツちゃ説き伏せられて、しまいには「光子さんと結婚さして欲し」いい出さんとも限れません。「僕とお前とは誤まつて夫婦になったのんや。性の合わんもんこないしてたらお互の不幸やさかい、別れた方がええ思う。」——と、いつぞそないいわれる日イ来るのやないやろか？ そしたら常時恋愛の自由口にしてながら「イヤや」いうこと出来しませんし、世間の人かて私みたいなもん離縁しられるのん当り前や思うやろ、今からそんな行末のこと考えて、取り越し苦労したとこでしヨうないようなものの、どうも私にはきつとそないなる運命みたいな氣イするのですが、そうかいうて、今の場合、夫の頼み聴かなんだら自分も明日から光子さんの顔見られんようになるので、「あんた信用せえへんのやないけど、何や知らん悲しい予覚して、——」いうて、しくしくしくいつまでも泣いてますと、「そんな馬鹿なことあるもんか。そらみんなお前の妄想や。誰ぞ一人でも不幸になったら三人で死のやないか」いうて、夫も泣き出して、とうとう二人で夜が明けるまで泣き通してしまいましたん。

その三十二

さてその明くる日から夫は光子さんの家の方の諒解運動と、綿貫の方の解決とにえらい奔走し始めたのんです。先ず第一に徳光さんとい行て、お母さんに面会求めて、僕はお宅のお嬢さんの親友である園子の夫として、お嬢さんから頼まれたことある。実はお嬢さんは悪い男に付け狙^{ねら}われてなさつて、……と、そんな工合に切り出して、尤^{もつと}もその男はこないこないの人間やのんで、お嬢さんの貞操は汚されてエへん、ただその男ちゅうのんが卑劣な奴で、お嬢さんがその男の種宿してなさるやとか、お嬢さんと僕の妻とが同性愛やとか、跡形もないこといい触らして、強制的に証文に判つかしたりしましたさかい、今にお宅の方いも脅迫がましいこというて来るかも分れませんが、絶対にそんなことお取り上げになつたらいきません。お嬢さんの身の潔白は誰よりも僕が知ってます。取り分け僕の妻との交際がそんな醜いもんでないことは、夫たる僕が証明します。就^ついては僕も友人の立場として、御依頼のうても何とかせんならん思てた際ですから、どうぞこの問題僕に

一任してもらえませんか。お嬢さんの安全僕お引き受けしますよって、たといその男何いうて来ても「今橋の事務所い行け。」いわれて、直接お会いにならないように。——と、めつたにうそついたことない人が、恋のためにはそないなことまでするのんですやろか、巧いこというてお母さん円めてしもて、それから綿貫のとい出かけて、結局この方はお金で埒明らちあいたいうて、例の新聞い売るいうてた証文の写真と、種板たねいたと、夫から渡したあつた預かり証と、証拠になるもん全部取り返して来ましてん。それが二日か三日のあいだにバタバタと片附いてしもたので、なんぼ夫が一所懸命になつたにしても、あの綿貫がそないやすやす手工引いたいうのんが、私も光子さんも何や腑ふに落ちんような氣イして、写真の種板おこしたにしたかて複写したあるかも分れへんし、何企たくらんでるかも知れん、

「なんぼお金やんなさつた」いいましたら、「千円いうのん五百円にさした」いうて、

「なあに彼奴あいつかてカラクリの種こつきり僕に握られてしもて、もうこれ以上オドシ利かん思たのんで金にする氣イになつたのんや」と、夫は安心し切つてるのんです。それでその時はすつくり私らの計画通りに行つた形で、たつた一人貧乏びんぼうくじひ鬩抽いたのんお梅どんで、「そんなことになつたのんに、お前附いてながら主人に知らさんいう法あるもんか」いわれて、暇出ひまされてしもて、えらアい私ら恨んで、——そら、まあ、あないに骨折らし

ときながら、其方そつちの方い飛ばしり行くのん考えなんだのんは何といわれても手落ちですさかい、出て行く時にいろいろなもん買うてやったりして機嫌取りましてんけど、このお梅どんから後で意趣返しされるやなんて、夢にも思い寄りませなんでん。

夫は光子さんの家の方い、「もう御安心です」いうてやりましたのんで、お父さんわざわざ事務所にお礼に來なさるやら、お母さんも私のとこい來なさって、「どうぞどうぞ、あの通りの我が儘わまもんですさかい、ほんまの妹や思て面倒見てやつとくなはれ。家ではあの児がお宅さんいさい上つてたら安心してます。何処い行きたいいいいまして、あんたさんと一緒でないと出せしません」いいなさるやら、えらい信用しられてしもて、お梅どんの代りにお咲どんいう女子衆おなごしゅつれて、毎日おおびらに遊びに來やはって、たまには泊つたりしなさつても、お母さん何ともいやはれしません。けどそないにして外部の關係万事都合よう行くようになりましたら、今度は内部の關係が、綿貫の時よりも一層お互に疑がい深うさされて行つて、日一日と地獄の苦しみ重ねるようになったのんです。それにはいろいろ理由あるので、前は笠屋町いう便利なとこありましたのんに、今ではそんなとこあれしませんし、あつても一人だけ放つといて二人が外い出ることならんいいますし、もしたら結局家にいるよりしヨウないのんですが、そないすると私か夫どつちか執方どつちぞが邪魔にし

られるようになったり、そうでないまでも自分の方から氣イ利かさんならんようになったり、そこいさして光子さんが、いつでも出しなに「こいから香櫨園い行きます」いうて、今橋の方い知らしやはるよつて、夫は直き歸^{かい}つて来る。それもお互に隠し立てせん約束やのんで、知らすのん仕方あれしませんが、そんならそいで、もうちよつと早う朝のうちからでも来てくれはつたらええのんに、大概二時か三時頃に来やはるさかい、二人ぎりである時間いうたら、ほんの何ほもあれしません。夫にしたかて光子さんから電話かかったら用事放つといても飛んで歸つて来るのんで、「そないせんかってよろしやないかうちちよつとも話してる間アもあれへん」いいますと、「もつとゆっくりしてよ思てんけど、事務所の方暇やさかい歸つて来た」とか、「離れて想像してる方が氣が揉^もめる。一つ家にいてたら安心やよつて、邪魔やねんやつたら階^{した}下い行ててもええ」とか、「お前は二人ぎりである時間あるのんに、僕にはちよつともないということ察してくれんと困る」とか、だんだん問い詰めると、「ほんまは光ちゃん『電話かけたのんに何で早^はよ歸つて来えへんねん！ 姉ちゃんの方がよつぽど実意ある』いうて怒りやはるねん」いいますねん。いったい光子さんの焼餅ちゅうのんが、何処までが本氣で何処までが手管^{てくだ}か分れしませんねんけど、それがまたいかにも氣違いじみてて、たとえば私の夫のこと「あんた」いうたらもう

眼工に涙溜めはつて、「今では夫婦でもないのに、あの人のこと『あんた』いうたらいかん」いいなさつて、人のいる前ではともかくも、内輪では何ぞ外に呼びようあるやろ、「孝太郎さん」とか、「孝ちゃん」とか、いうて欲し、夫にしたかて私のこと「園子」やの「お前」やのいわんと、「園子さん」いうか、「姉さん」いうかせないかん、それぐらいはまだええとして、睡眠剤と葡萄酒持つて来なさつて、「二人ともこれ飲んで寝なさい、あてあんたらの寝ついたん見てから行ぬ」いうて聴きなされしません。初めは冗談か思てましたら、なかなかそやないのんで、「特別によう利く薬調合してもろて来た」いいなさつて、粉薬の包二つ出して、夫と私の前い置いて、「二人ともあてに對して忠実誓うねんやったら、その証拠にこれ飲みなさい」いいなさるやあれしませんか。けどこの薬に毒でも這入つて、自分だけ永久に眠らされるのんやないか知らん？——と、はつとそんな氣イ起りましたら、「飲め飲め」いいなさるほどなおのこと疑わしいになって来て、じーつと光子さんの顔視詰めてますと、夫もやつぱり同じ恐怖に襲われたらしゅう、白い粉薬手工の上に載せたまま、私の手工にある薬の色と見比べるみたいにして、光子さんの顔と私の顔とジロジロうかごうてるのんです。すると光子さんは「なんで飲めへんのん？　なんで飲めへんのん？」いうてヤキモキしなさつて、「ああ分つてる、あんたらあて欺してて

んなあ」と、身イふるわして泣きなさいますし、もうしヨウない、殺される覚悟で飲んでやろ思て、薬の包口イ持つて行きましたら、私の様子黙つて眺めてた夫が「園子！」いうていきなり手工掴^{つか}んで、「まあ、待つてくれ！ こないなつたら孰^{どっち}方がどうなるか運試^{だめ}しや。その薬換えこととして飲もやないか」いいますのんで、「ふん、そうしよう、そんで二人とも一、二の三で一一緒に飲も」と、とうどそないして飲みましてん。

その三十三

この光子さんの計略図にあたつて、夫と私とはどんなにお互に疑がい合い、嫉妬^{しつと}し合うたことですやろ。毎晩々々薬飲まされるたんびに、寝さされるのん自分だけやないか、夫はうその薬飲んで寝た真似^{まね}してるのん違うやろかと、そない思たら、飲んだ風して放つてしまおとしますねんけど、光子さんいうたらそんな胡麻化^{ごまか}しささんようにじツと手もと視^み詰めてて、まだそんだけでも心配やのんか、しまいには「あて飲ましたげるわなあ」と、寝台と寝台の間に立ちなさつて、恨み合いせんように、同時に両方の手工に薬持ちなさつ

て、二人仰向けに臥さしあおむといて、あーんと口開かして、薬入れてしまいなされると、今度はあの、病人の水飲ますくち嘴の長アいガラスの容れいもんありますやろ？ あれ二つ両手に持つて、そろそろと、孰方どっちが先にもならんように、同じくらいに傾けて行つてお湯飲ましなさるのんですが、「たあんと飲んだ方が利き目ある」いいなさつて、あの容れもんに二遍も三遍も入れ替えては注ぎ込みなさいますねん。こっちは一所懸命に、ちよつとでも余計起きててやろ、寝たふりして見ててやろ思いますねんけど、寝返り打ったり横向きになつたりしたらいかん、ちやんと顔見えるように仰向きになつて欲しいいうて、両方の寝台のあいだに腰かけて、脇眼わきめも振らんと二人の寝顔見守りながら、寝息うかごうたり、眼まばたきさしてみたり、心臓に手エあててみたり、いろいろなこととして試しなさつて、ほんまに寝入つてしまうまでは傍離そばれなされしません。そないにせんかて何で今更夫婦の語らいしますやろ。夫も私も今では放つとかれたかて手工触れる氣イも起れへんくらいで、これほど安全な男女いうたらあれしませんのんに、「そいでも何でも一つ部屋に寝るのんやつたら薬飲ます。」いいなさつて、だんだん利かんようになると、分量や調合取り換えなさるのんで、その強烈な薬の感じ覺めたあとまでも残つてて、朝床の中で眼工開あいた時の氣持の悪さいうたら、頭の後の方痺しびれてて、手足抜けるようにひだるうて、胸がムカムカして、

起き上る元氣もあれしません。夫も同じように病人臭い青才い顔して、まだ薬の味残ってるみたいに口の中にちやにちやさしながら、「こないしてたら、今にほんまに中毒起して死ぬかも分れへん」いうて溜め息たいきつきます。私はそんな様子見ると、さては夫もほんまに飲まされたのんか思て、かいつて安心しますねんけど、疑がい出したらそれがまた狂言みたいな氣いしますのんで、「なあ、うちら何で毎晩薬飲まされんならんねんやろ？」いうてやりますと、「何でやろなあ？」と、夫は夫で、やっぱり疑がい深そうに人の顔ジロジロ見ますねん。「うちら二人寝さしといたかて心配なこと知れたあるやないか。何ぞ外に目的あるねんし。」「どんな目的やお前には分ってるのんか？」「うち分れへん、あんたには分ってんねんやろ？」「僕には分らん、お前こそ知ってるのやないか。」「そないお互に疑ごうてたら切りないけど、うちどないしても、自分だけ寝さされてるような氣いするねんし。」「そら僕かて同じことや。」「それかて浜寺のこともあるやないか。」

「あれがあるさかい、今度は僕の番やないかいいう氣いするねん。」「あんた光ちゃんの帰る時まで起きてたことないのんか？ どうぞほんまのことというて欲し。」「僕はない、お前はどうか！」「あんな強い薬飲まされたら、起きてとうても起きてられへん。」「ふーん、そんなんやつたら、お前もたしかに薬飲むねんなあ？」「当たり前やし、この青い顔見

て御覧。「僕の顔も見て御覧。」そんな話してる間に、朝の八時頃になるときつと電話
 がかつて来て、「さあ、もう起きないかんし」いわれて、夫は睡たい眼工擦り擦り起され
 てしても、しヨことなしに事務所い出て行くか、よつぽど睡とうて溜らん時でも、「八時
 過ぎたらあんたは寢室にいてることならん」いわれてますのんで、下の部屋い来て縁側の
 籐椅子とういすか何ぞで寝んなりません。そないな工合で、私は何時までも寝てられましてんけ
 ど、夫の方は一層疲れかた非道ひどうて、事務所行たかて頭役に立てしませんさかい、自分
 は休みたいのんですが、あんまり休むと「姉ちゃんの傍にばかりいてたがる」いわれま
 すよつて、大概の日は用事あつてもものうても「昼寝しに行て来る」いうて出かけますね
 ん。

私はその時分から「光ちゃんうちのこと何にもいわんと、あんたのことばっかり、ああ
 したらいかんこうしたらいかんいうやないか。あんたの方が愛しられてる証拠やし」いう
 てたのんですが、夫にいわしたら、愛してるもんこないにいじめるはずない、僕を疲れさ
 して、情慾も何も起らんように麻痺まひさしといて、二人で好きな真似まねしようという計略やない
 かいいます。そいでおかしいのんは晩御飯の時やかい、お互に睡眠剤で胃イ悪うしてて、
 食慾ちよつともあれしませんのんに、お腹なか空いてたら早う薬まわ循環りますさかい、なるだけ余

計喰^たべとことして、孰^{どつち}方も相手の御飯の数勘定して競争で詰め込みますのんで、「そない喰^きべたら薬^き利^きけへんよつて、二人とも二饌^{ぜん}以上喰^きべることならん」いいなさつて、しまいには光子さんお膳の傍に眼工光^{くわう}らして、監督してなさるようになったんです。何せあの頃の生理状態いいましたら、今考えでも無事でいられたのん不思議なぐらいで、胃イ衰弱^{じやくじやく}してるとこい毎日飲^のまされる薬の分量多いのんで、一時に吸収出来へんせえか、お昼になつてもしよちゆう意識^{いしぎ}ぼんやりしてて、生きてるのんか死^しんでるのんか分らんみたい^に、顔色ますます青^{あお}なる。体は瘦^やせて来る。それより困^こるのんは感覺鈍^{どん}うなつて来る。ところが光子さんの方は、そないに二人苦しめて御飯の制限までしときながら、自分いうたら何^{なん}ぼでもおいしいもん喰^くべて、つやつやしい血色してなさる。つまり私たちは光子さん一人が太陽^{たいやう}みたいに輝^{かがや}いて見えて、どんなに頭疲^{つか}れてる時でも光子さんの顔^{かほ}さい見たら生き返^{かへ}つたようになりますのんで、ただそれ一つ楽しみに命^{いのち}つないでいる。光子さんもまた、「なんぼ神経麻痺^{まひ}してたかて、あてに逢^あうたらハッキリするやろ？ そやなかつたら熱情^{ねんじやう}足らんねんし」いいなさつて、興奮^{こふげん}の程度で孰^{どつち}方パツション強^{つよ}いか分る、そやさかい睡眠^{すいみん}剤飲^のますこと尚^{なほ}更^{さら}止^とめられへんいいなさいますねん。まあいうてみたら、普通のパツション^{パツション}捧^{ささ}げられても面白^{おもしろ}ない、薬の力で情慾鎮静^{じやうじやう}さされてしもてても燃えるような愛感^{あいかん}

じるのでなかったら満足出来へん。——結局二人藻^も抜^ぬけの殻^{から}みたいにさして、この世の中に何の望みも興味も持たんと、ただ光子さんいう太陽の光だけで生きてるように、それ以外に何の幸福も求めんようにさしたいいうことになるので、薬飲むのん厭^{いや}がったりしたら泣いて怒んなさるのんです。そら、まあ、自分がどのくらい崇拜^{まつ}しられてるか試してみてもそれ愉快がるような心理、前から光子さんにあつたことはありましたものの、そない極端に、ヒステリーみたいなこといい出しなさつたのんは、何ぞ別に理由あるのんに違いなないので、多分綿貫の感化やないか思いますねん。というのんは、最初の経験から健全な相手では物足らんようにさされてなさつて、誰^{つか}掴^{つか}まえても綿貫と同じようにさしたかつたのんやないか？ そやなかつたら何であない残酷に人の感覚麻痺^{まひ}さす必要ありましたんやろ？ よう昔の話に、死^し霊^{りやう}や生^{いきりやう}霊^{りやう}乗り移るということ聞いてますけど、何や光子さんの様子いうたら、綿貫の怨^{おん}念^{ねん}崇^たつてるみたいに日増しに荒^すんで来^きなさつて、ぞうツと身の毛のよだつようなことありますのんで、そない思たら光子さんばかりやあれしませんが、あの健全な、非常識なとこ微塵^{みじん}もなかつた夫までが、いつや知らん間に魂入れ替つたように、女みたいなイヤ味^みいうたり邪推^じしたりして、青オイ顔ににたにた笑い浮べながら光子さんの御機嫌取つたりしますのんで、そんな時の物のいい方や表情のしかたや、陰

険らしい卑屈な態度じつと見てましたら、声音^{こわね}から眼つきまでとんと綿貫生き写しになつてゐるやあれしませんか。ほんまに人間の顔いうもん心の持ちようでその通りになつて来るもんやとつくづく思ひましてんけど、それにしたかて怨霊の祟りいうようなこと、先生でない思ひやりますやろ？ 取るに足らん迷信や思ひやりますやろか？ なんせ綿貫はあない執念深い男ですやさかい、蔭で私^{のろ}ら呪てて、何ぞ恐い禁^{まじない}厭でもして、夫に生霊取り憑^ついてたかも分れしません。それで私「あんた段々綿貫みたいになつて来るわなあ」いうてやりますと、「自分でもそない思てる」いうて、「光ちゃん僕を第二の綿貫にするつもりやねん」いいいますので、もうその時分の夫いうたら凡^すべての運命に従順になつてしもて、自分が第二の綿貫にさされること拒まんばかりか、かいつてそれ幸福に感じてゐらして、薬飲むのんも、しまいには進んで飲まされること願うようになって来ましてん。光子さんにしましたら、どうせ三人こないになつたら無事に収まるはずあれしませんさかい、もうどないでもなれいう氣いで、焼け糞^{くそ}半分になつてなさつて、事に依^よつたら夫と私だんだん薬で衰弱さして殺してしまお、……と、心の底ではそんな企^{たくら}み持つてなさつたのんやないか。……そない思たのん私だけやのうて、「僕かてそれ覺悟してる」と、夫もいうてましたぐらいで、ほんまいうたら、もう直き二人幽霊のように細うなつて死んでしま

うのん待つてなさつて、その時限り自分は巧いこと手工退ひいて、すつくり真面目まじめな人間になつて、ええ婿むこさん捜そ思てなさるのんやろ、「僕もお前もこないに青い顔してるのんに、光ちゃん一人丈夫そうにぴんぴんしてる様子見たら、どうやらそうに違いない氣イする」いいますねん。それで夫も私も、衰弱の余り楽しいことも嬉しいことも感じんようになつてしまつたら、もうその時がこの世の終りやと観念してて、今日死ぬか明日死ぬか思ひながら生きてましてん。

ああ……ほんまに私、その予想の通りになつてあの時一緒に殺されたらどない幸福でしたやろ。それがこないな思ひかけぬ結果になつてしもたのんは、あの新聞に記事出たのん第一の原因ですのんで、なんでもあれ九月の二十日頃でしたやろか、或る朝夫が「ちよつと起きてくれ」いいますよつて、何や思たら、「誰やこんなもん送つて来た奴ある」いうて、いつも見たことない新聞の三面のとこ広げてて、そこ覗のぞいてみましたらあの綿貫に書かされた書付大きな写真にして載せたあつて、仰山なこと書き立ててある見出しの上に、赤インキで二重円の印附けたあるやあれしませんか。それも一日だけやない、記者の手許てもとに材料たんと集まつてるさかい、連日にわたつてこの醜惡なる有閑階級の罪状を摘発すべしという予告したありますのんで、「それ見なさい、やっぱり綿貫に欺されてたんや」い

いましたものの、もうその時は案外度胸すわってしもてて、口惜しいとも忌ま忌ましいとも思わんと、「いよいよ最後の時来た」いう感じ、真っ先に来ましてん。「ふん、馬鹿な奴ツちゃ、今更こないなこと書かして何になる」いうて、夫も血の氣工失せた頬べたに冷やかなほほ笑み浮べてるだけで、「構めへん、構めへん、放つといたらええ」いいましてんけど、それでもその新聞いうたら信用のない小新聞ですさかい、まさか世間が真に受けるはずないやろいうのん頼みにして、何は措いても光子さんとこい電話で知らして、「これこれの新聞家うちいも送って来たよつて、光ちゃんとかいも来てへんか」いうたげましたら、慌あわてて捜して見なさつて、「来てた、来てた、ええ塩梅あんばいにまだ誰アれも見えへなんでん」いいなさつて、その新聞懷ほころに入れて、「どないしたらええやろ」いいながら駈かけ込んで来なさいましてん。

最初私らは、綿貫の売り込んだ材料やつたら自分に都合悪いこと書けへんやろし、私と光子さんとの事なら今に始まった噂うわさやないし、大した問題にはならんかも知れへん、まあ、そない慌てるにも及ばんやろ思てましたのんで、二、三日目工に光子さんの家い知れた時にも、「また例のわるさやつてるのんです、偽筆の署名まで拵こしらえて写真に出すやなんてあんまり悪辣あくらつですさかい、訴えてやつてもよろしいんですが」と、夫の口でええよ

うにいいくるめさして、ほつと一と安心してたところが、記事はそいから何日たつてもしまいにねえ、一層深刻に真相に触れて来て、綿貫に不利な事実かて遠慮なしに発き出したばかりか、笠屋町の宿のこと、奈良い遊びに行つたこと、光子さんお腹に物詰めて夫に会いなさつたこと、……それが、綿貫の知つてゐるはずないことまでも分つてゐるらしいて、この調子やつたら、浜寺のことから狂言自殺のこと、夫渦中い巻き込んだこと、何から何まで素ツ葉抜きそうな勢いやのんです。それにおかしいのんは、光子さんも私もお互に遣り取りした手紙大事にしもといて、誰にかて見せたことあれしませんのんに、私の方から上げた中の一通が、——えらい猛烈な、動きの取れん文句並べたある一通が、——いつの間にやらちゃんと窃まれてて、れいれいしいに写真に出されましたのんで、取つたとしたらお梅どんより外にないさかい、さては綿貫とグルになつてゐないうこと始めて氣付いたのんですが、そないいうたら、光子さんとこ暇出されてからも二、三べん私とこい遊びに来て、用もないのんにウロウロしてたことあつて、何や様子けつたいな、するだけの事はしてやつたのんにまだお金でも欲しいのんかいな思ひましてんけど、そないにしてやるにも及ばん思つてつい放つたらかして置きましたら、何でも新聞に記事載り出す二、三日前にやつて来て、妙なこというて光子さん冷かしたりして行んでしもたなり、ぷつ

り姿見せしません。「何ちゆう恩知らずやろ、家にいた時かて奉公人みたいなことあれへん、まるきりあてときようだいみたいにさしといたのんに、……」「あんまり我が儘さし過ぎてんやわなあ。」「飼い犬に手工咬かまれるとはこの事ことツちやし。姉ちゃんにかてあない色々してもろといて何不足やねんやろ。」「そしたらやっぱ綿貫に買取しられたんやろか。」——まあ想像しますのんに、新聞社では最初綿貫の材料に基づいて調べ出してみたら、それからそれいと隠れた事実分つて来たとこい、折ようお梅どんちゆうもん見つけて掴つかまえたのんか。そやなかったら綿貫の奴初めからお梅どんと連絡取つて、破れかぶれに自分の秘密までサラケ出して売り込んだのんか。孰方どつちにしたかてこないなつたらもう一刻も猶予出来へん、グズグズしてたら光子さん一步も外い出られんようになるよつて早う兼ねての約束通り覚悟きめよいいましたものの、それでもどうしようことういうて毎日相談してましたら、そのうちにとうど浜寺のこと出始めましてん。

そいから先の出来事は孰どの新聞にもあない委くわしいに出ましたぐらいで、先生かてよう御承知ですやろし、もうもうそないに管くだく々しいに過ぎ去つた日のことお聞かせせんかて、……何や私も、あんまり長いことしゃべつたせえかけつたいに興奮して、辻つじ棲つまの合わんこと話したような氣イしますねんけど、……ただ新聞に洩もれてることいいましたら、あの

時第一に「死の」いい出しなさって最後の手筈てはずきめなさったのんは光子さんでしてん。たしかお梅どんに手紙盗まれたこと分った日イに、「こないなもん家い置いといたら危険や」いうて、証拠になるような文ふみから殻全部私とこい持つて来なさいましたのんで、「焼いてしまおか」いいましたら、「いや、いや、あてらいつ何どき不意に死なんならんか分れへんさかい、書き置きのこの代りにこの記録遺しとこ。どうぞ姉ちゃんのと一緒に大事に預かつといて頂戴」いいなさって、私らにも身イまわの周りのもん整理しとくようにいいつけたりして、そこから二、三日目エの、十月二十八日の午後一時頃「いよいよ家の様子おかしい、今日帰ったら出られんようになりそうな」いうて来なさって、逃げて掴まえられたりしたらあかんさかい、いつそいつもの部屋で死のいいなさいましてん。それで枕もとの壁にあの観音様の画像飾って、三人寄ってお線香せんこう上げて、「この観音様の手引てびきやつたら、あて死んだかて幸福や」と、私がそないいいましたら、「僕ら死んだら、この観音様『光子観音』いう名アつけて、みんなして拝んでくれたら浮かばれるやろ」と夫もいうて、彼の世あに行つたらもう焼餅喧嘩げんかせんと仲好よう脇わき仏ほとけのように本尊の両側にひツついてまひよと、光子さん真ん中に入れて枕並べながら薬飲みましてん。……はあ？ そら、そうですね、何でその時、私だけ一人残されるいうことと思いましたやろ、明くる日眼工がんこう覚ました時にも、

直きに二人の跡追おう思いましてんけど、ひょつとしたら、生き残ったん偶然やないかも分れへん、死ぬまで二人に欺されてたのんやないやろかう氣イしましたら、あの手紙の束預^{たば}けなさったことにしたかて疑がわしいになつて来て、折角死んでも彼の^あ世で邪魔にされるのんやないかと、ああ、……先生、（柿内未亡人は突然はらはらと涙を流した。）……その疑がいさいなかつたら、……今日までおめおめ生きてる私やあれしませんねんけど、……そうかて死んでもた人恨んだとこで仕方あれしませんし、今でも光子さんのこと考えたら「憎い」「口惜^{くや}しい」思うより恋しいて恋しいて、……ああ、どうぞ、どうぞ、こない泣いたりしまして堪忍して下さい。……

青空文庫情報

底本：「卍（まんじ）」岩波文庫、岩波書店

1950（昭和25）年5月20日第1刷発行

1985（昭和60）年12月16日第18刷改版発行

1990（平成2）年4月25日第20刷発行

初出：「改造」改造社

1928（昭和3）年3月～1929（昭和4）年4月、6月～10月、12月～1930（昭和5）年1月、4月

※「懐」に対するルビの「ふところ」と「ほところ」の混在は、底本通りです。

※表題は底本の目次では「卍（まんじ）」、「中扉」では「まんじ」となっています。

入力：kompass

校正：酒井和郎

2017年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

卅（まんじ）

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>